

ブラジル国南部地方の 経済社会概況及び 農業開発現況

昭和60年3月

国際協力事業団

S	P
J	R
85	- 4

3
11
RY

ブラジル国南部地方の 経済社会概況及び 農業開発現況

JICA LIBRARY



1025419[1]

昭和60年3月

国際協力事業団

S	P
J	R
85	- 4

國際協力事業團		
受入 月日	'87. 1. 27	703
登録 No.	15893	81.1
		SP

ま え が き

本調査は、1985年1月ブラジル国パラナ州クリチーバ市、サンタ・カタリーナ州フロリアノポリス市及びリオ・グランデ・ド・スール州ポルト・アレグレ市において集取した資料の分析及び各農務局担当官の情報等を取りまとめたものである。

調査資料は、ブラジル地理統計院の統計年鑑及び同院が発行した「ブラジルの地理—南部編」を基本とした自然環境と各統計を取りまとめ各州より得た資料のコメントをつけ加えた。

また開発計画関係については、SUDESUL(南部開発庁)より提供された資料を用いた。

本資料が広く関係各位に、ご活用いただければ幸いである。

昭和60年3月

サンパウロ支部長

《目 次》

1. 一般概況	1
1. 1 自然環境	1
1. 1. 1 位置、面積及び人口	1
1. 1. 2 地勢、河川	7
1. 1. 3 植 生	10
1. 1. 4 気 象	14
1. 2 経 済 概 況	18
1. 2. 1 概 要	18
1. 2. 2 工 業 部 門	21
1. 2. 3 農 牧 部 門	28
1. 2. 4 輸 出	29
1. 2. 5 輸送インフラの状況	33
2. 農業開発現況	47
2. 1 概 要	47
2. 2 農 牧 形 態	47
2. 2. 1 農場数及び農地面積	47
2. 2. 2 土地所有形態	52
2. 3 主要農産物の生産現況	57
イ) 穀 類	57
2. 3. 1 米	57
2. 3. 2 小 麦	64
2. 3. 3 とうもろこし	70
2. 3. 4 フェイジョン	75
ロ) 油脂原料作物	80
2. 3. 5 大 豆	80
ハ) 工業原料作物	86
2. 3. 6 綿	86
2. 3. 7 砂糖キビ	88
2. 3. 8 マンジョカ	90
ニ) 嗜好作物	92
2. 3. 9 煙 草 葉	92

2. 3. 10 コーヒー	94
ホ) 野菜類	95
2. 3. 11 ジャガイモ	95
2. 3. 12 玉ねぎ	99
2. 3. 13 にんにく	101
へ) 果実類	104
2. 3. 14 ふどう	104
2. 3. 15 リンゴ	106
ト) 牧畜部門	110
2. 3. 16 牛	110
2. 3. 17 その他	114
3. 南部地方の地域開発計画	115
3. 1 概要と基本方針	115
3. 2 ラゴアミリン特別計画 (PROMIRIM)	117
3. 3 パラナ州北部土壌の侵蝕対策特別計画 (PRONOROESTE)	119
3. 4 パラナ州西部地方特別計画	120
3. 5 サンタ・カタリーナ州南部沿岸開発プロジェクト (PROLITORAL)	122

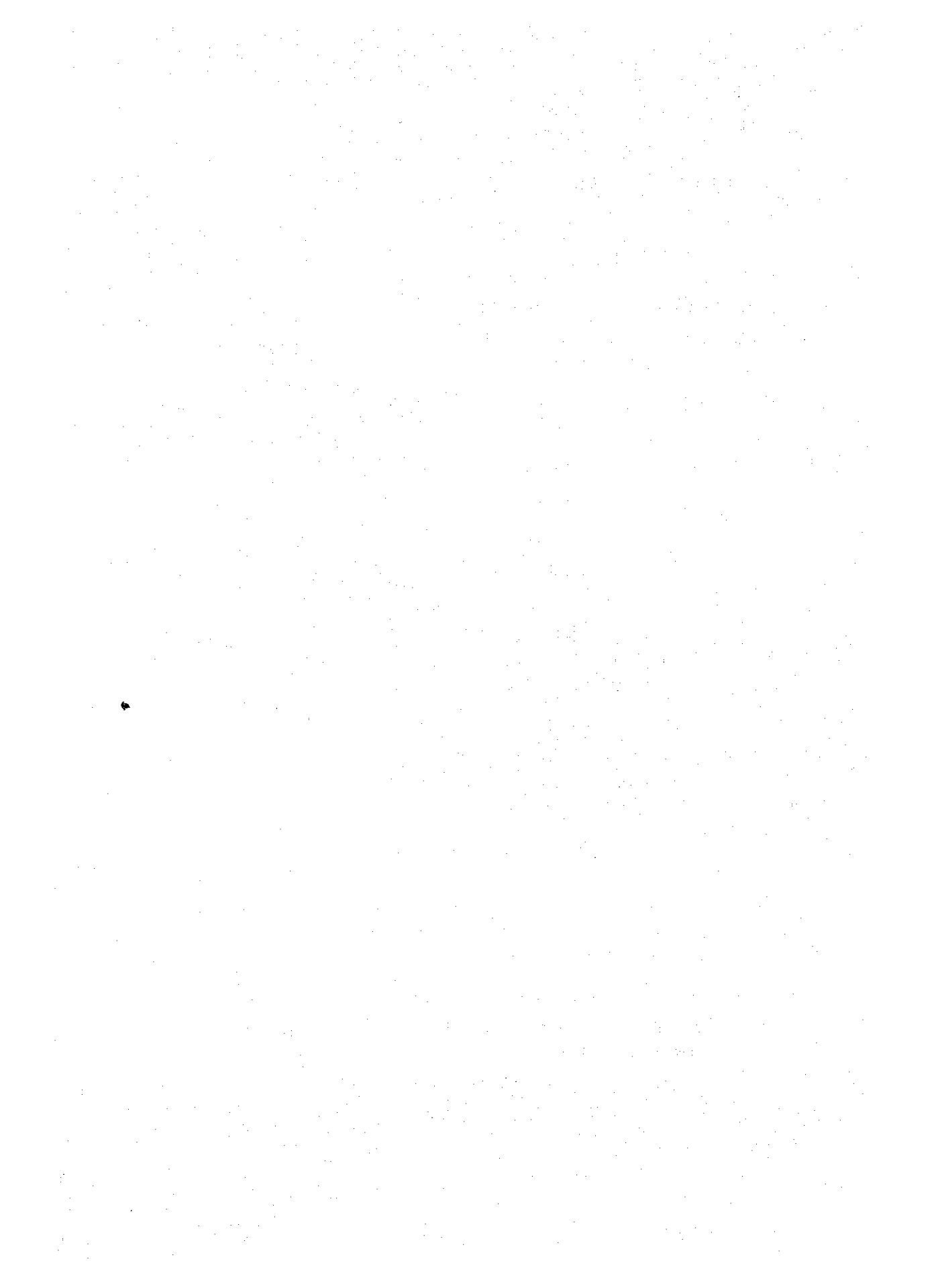
《 図 表 索 引 》

表 1	南部3州の位置	1
◇ 2	南部各州都の位置	2
◇ 3	南部3州の面積	2
◇ 4	河川流域面積	2
◇ 5	州別及び地方別人口推移（1980年）	3
◇ 6	各州都の人口推移	3
◇ 7	南部3州の中人口10万以上の都市	4
◇ 8	人口密度	4
◇ 9	人口増加率	5
◇ 10	都市及び農村人口	5
◇ 11	南部地方の経済活動人口	6
◇ 12	南部地方の経済活動人口（業種別）	7
◇ 12	南部地方の経済活動人口比率（所得別）	7
◇ 14	南部地方の植生別面積	14
◇ 15	気象統計 バラナ州クリチーバ市（1981年）	14
◇ 16	気象統計 サンタ・カタリーナ州フロリアノポリス市（1981年）	15
◇ 17	気象統計 リオ・グランデ・ド・スール州ポルト・アレグレ市（1981年）	15
◇ 18	南部地方主要農産物の全国生産比率	18
◇ 19	南部地方の工業規模	18
◇ 20	鋳業部門の規模	21
◇ 21	製造工業部門の規模	21
◇ 22	南部地方工業の製造品目別統計（A）	22
◇ 23	南部地方工業の製造品目別統計（B）	22
◇ 24	工業生産成長率（過去12ヶ月間の推移）	25
◇ 25	工業生産成長率：業種別	26
◇ 26	南部地方工業に対する開発銀行融資	27
◇ 27	主要作物の生産高比率	28
◇ 28	南部地方の輸出	31
◇ 29	大豆及加工品の輸出	31
◇ 30	南部地方の輸出（重量）	32
◇ 31	（金額）	32
◇ 32	南部地方の道路延距離数推移	33
◇ 33	鉄道延距離数	36

表 34	南部地方の道路距離数と自道車数の推移	39
〃 35	南部地方の乗用車1台あたり人口の推移	39
〃 36	南部各州の道路距離数の推移	40
〃 37	道路延距離数(1982年)	40
〃 37-A	リオ・グランデ・ド・スール州輸出港取扱量及び金額	45
〃 37-B	パラナ州の港取扱量(輸出商品)	46
〃 37-C	サンタ・カタリーナ州港の取扱量(1983)	46
〃 38	全国生産順位3位までに含まれる南部地方の農作物(1983年)	48
〃 39	南部地方の州別農場数推移	49
〃 40	南部地方の州別農地面積推移	49
〃 41	南部地方の農場数農地面積全国比率	49
〃 42	農地面積の中に占める農耕地面積の比率	50
〃 43	総面積に占める農地面積の比率	50
〃 44	南部地方の生産者形態(農場数)1980年	50
〃 45	南部地方の生産者形態(面積)1980年	50
〃 46	南部地方の農牧形態(1980年)	51
〃 47	農牧形態、南部地方の全国比率(1980年)	51
〃 48	南部地方経営規模別農場数	52
〃 49	南部地方経営規模別農地面積	52
〃 50	南部地方の経営規模別農場数全国対比	53
〃 51	南部地方の経営規模別農地面積全国対比	53
〃 52	パラナ州経営規模別農場数	54
〃 53	パラナ州経営規模別農地面積	54
〃 54	パラナ州1農場当り平均面積	54
〃 55	サンタ・カタリーナ州経営規模別農場数	55
〃 56	サンタ・カタリーナ州経営規模別農地面積	55
〃 57	サンタ・カタリーナ州1農場当り平均面積	55
〃 58	リオ・グランデ・ド・スール州経営規模別農場数	56
〃 59	リオ・グランデ・ド・スール州経営規模別農地面積	56
〃 60	リオ・グランデ・ド・スール州1農場当り平均面積	56
〃 61	南部地方の米生産実績(1983年)	57
〃 62	パラナ州の米生産推移	61
〃 63	サンタ・カタリーナ州の米生産推移	61
〃 64	リオ・グランデ・ド・スール州の米生産推移	62
〃 65	リオ・グランデ・ド・スール州とその他の州の米作比較	62

表 66	米：リオ・グランデ・ド・スール州生産者受取価格	63
〃 67	南部地方の小麦生産（1983）	64
〃 68	パラナ州の小麦生産推移	67
〃 69	リオ・グランデ・ド・スール州の小麦生産推移	67
〃 70	サンタ・カタリーナ州の小麦生産状況	68
〃 71	小麦製品と代替品の価格推移上昇率（1983年）	69
〃 72	南部地方のとうもろこし生産（1983）	70
〃 73	パラナ州とうもろこし生産	73
〃 74	リオ・グランデ・ド・スール州のとうもろこし生産	73
〃 75	とうもろこし需給（リオ・グランデ・ド・スール）	74
〃 76	サンタ・カタリーナ州のとうもろこし生産	74
〃 77	南部地方のとうもろこし価格推移	75
〃 78	南部地方のフェイジョン生産状況（1983）	76
〃 79	パラナ州のフェイジョン生産推移	77
〃 80	サンタ・カタリーナ州のフェイジョン生産推移	78
〃 81	リオ・グランデ・ド・スール州のフェイジョン生産推移	78
〃 82	南部地方のフェイジョン生産者受取価格	79
〃 83	南部地方の大豆生産	80
〃 84	リオ・グランデ・ド・スール州の大豆生産推移	83
〃 85	パラナ州の大豆生産推移	84
〃 86	サンタ・カタリーナ州の大豆生産推移	85
〃 87	南部地方の綿生産状況（1983）	86
〃 88	パラナ州の綿生産推移	87
〃 89	南部地方の砂糖キビ生産（1983）	88
〃 90	パラナ州の砂糖キビ生産推移	88
〃 91	サンタ・カタリーナ州の砂糖キビ生産推移	89
〃 92	リオ・グランデ・ド・スール州の砂糖キビ生産推移	89
〃 93	南部地方のマンジョカ生産（1983）	90
〃 94	サンタ・カタリーナ州のマンジョカ生産推移	90
〃 95	パラナ州マンジョカ生産推移	91
〃 96	リオ・グランデ・ド・スール州マンジョカ生産	91
〃 97	南部地方の煙草葉生産	92
〃 98	リオ・グランデ・ド・スール州の煙草葉生産推移	93
〃 99	サンタ・カタリーナ州の煙草葉生産推移	93
〃 99-A	南部地方のコーヒー生産（1983）	94

及 100	パラナ州のコーヒー生産推移	95
◇ 101	南部地方のじゃがいも生産 (1983)	95
◇ 102	パラナ州のじゃがいも生産推移	96
◇ 103	サンタ・カタリーナ州のじゃがいも生産推移	97
◇ 104	リオ・グランデ・ド・スール州のじゃがいも生産推移	97
◇ 105	南部地方のじゃがいも価格 (リオ・グランデ・ド・スール州の場合)	98
◇ 106	南部地方の玉ねぎ生産 (1983)	99
◇ 107	リオ・グランデ・ド・スール州玉ねぎ生産推移	99
◇ 108	サンタ・カタリーナ州の玉ねぎ生産推移	100
◇ 109	南部地方の玉ねぎ価格 (サンタ・カタリーナ州の場合)	101
◇ 110	南部地方のにんにく生産状況 (1983)	101
◇ 111	サンタ・カタリーナ州のにんにく生産推移	102
◇ 112	リオ・グランデ・ド・スール州のにんにく生産推移	103
◇ 113	パラナ州のにんにく生産推移	103
◇ 114	南部地方のにんにく価格推移 (リオ・グランデ・ド・スール)	103
◇ 115	南部地方のぶどう生産状況 (1983)	104
◇ 116	リオ・グランデ・ド・スール州ぶどう生産推移	105
◇ 117	サンタ・カタリーナ州ぶどう生産推移	105
◇ 118	リオ・グランデ・ド・スール州のぶどう酒需給	105
◇ 119	サンタ・カタリーナ州のリンゴ生産	106
◇ 120	ブラジルのリンゴ生産推移 (A)	106
◇ 121	ブラジルのリンゴ生産推移 (B)	107
◇ 122	ブラジルのリンゴ生産推移 (C)	107
◇ 123	サンタ・カタリーナ州のリンゴ園樹令	109
◇ 124	サンタ・カタリーナ州のリンゴ販売量及び価格	109
◇ 125	南部地方の牛保有頭数	110
◇ 126	牛の屠殺数と牝牛の割合	111
◇ 127	リオ・グランデ・ド・スール州の牛肉価格	112
◇ 128	全国及びサンタ・カタリーナ州の牛肉市場	112
◇ 129	全国牛保有頭数及びサンタ・カタリーナ州保有頭数	113
◇ 130	サンタ・カタリーナ州牛肉推定消費量	113
◇ 131	牧畜部門保有頭数 1980年センサス	114
◇ 132	牛乳の国内生産量とリオ・グランデ・ド・スール州の比率	114
◇ 133	パラナ州牧畜活動	114
◇ 134	南部地方の鶏屠殺数	114



1 一般概況

1.1 自然環境

1.1.1 位置、面積及び人口

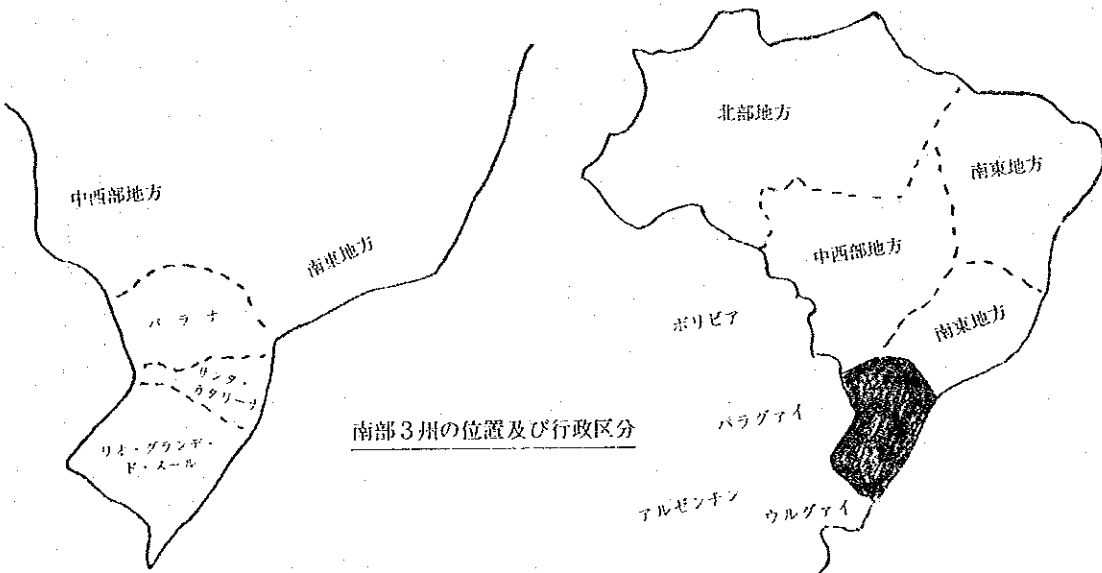
イ) 位置

南部地方はブラジル国の最南端に位置し、北部を南東及び中西部地方、西部をパラグアイ国及びアルゼンチン国、南部をウルグアイ国、東部を大西洋に接しており、行政区分上北より南に向ってパラナ、サンタ・カタリーナ、及びリオ・グランデ・ド・スールの3州により構成される。地理上の位置はパラナ州の北端が南回帰線に近い南緯22度、南端はリオ・グランデ・ド・スール州の南緯33度である。

表1 南部3州の位置

州 別	南 緯		西 経	
	北 端	南 端	東 端	西 端
パ ラ ナ	22°29'30" S	26°42'59" S	48°02'24"	54°37'38"
サンタ・カタリーナ	25°57'36" S	29°21'48" S	48°22'55"	53°50'00"
リオ・グランデ・ド・スール	27°03'42" S	33°45'09" S	49°42'41"	57°40'57"
ブ ラ ジ ル	5°16'19" N	33°45'09" S	34°45'54"	73°59'32"

出所：IBGE：SINOPSE ESTATISTICO



各州郡の位置はサンタ・カタリーナ州都のフロリアノポリス (Florianópolis) とリオ・グランデ・ド・スール州都のポルト・アレグレ市 (Porto Alegre) 市が大西洋岸にあるため、海面すれすれの24m及び10mの高度であるのに対し、パラナ州都のクリチバ市 (Curitiba) は海岸山脈上の高原にあり、サンパウロ市よりも高い905mの標高にある。

首都ブラジリアまでの距離は南下する程遠くポルト・アレグレ市の場合1,600kmに及んでいる。

表2

南部各州都の位置

都 市 名	地理上の位置		標 高 m	ブラジリヤまでの 距離 km
	南 緯	西 経		
クリチバ (パラナ州)	25°25'48" S	49°16'15"	905	1,081
フロリアノポリス (サンタ・カタリーナ州)	27°35'36" S	48°35'56"	24	1,314
ポルト・アレグレ (リオ・グランデ・ド・スール州)	30°02'15" S	51°13'13"	10	1,619

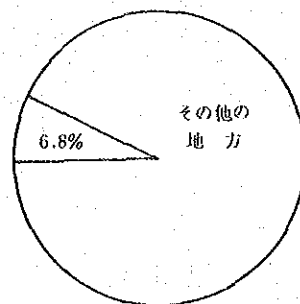
出所：IBGE

ロ) 面積

南部地方の面積は577,723km²で、ブラジルの地方区分（北部、東北部、中西部、南東部及び南部）の中ではもっとも少ない面積であり、国土面積の6.8%を占めるに過ぎない。

南部地方を構成する3州の中ではリオ・グランデ・ド・スール州が南部地方の48.8%を占めてもっとも大きく、パラナ州34.5%、サンタ・カタリーナ州16.7%の割合である。

南部地方を流れる河川流域別の面積はパラナ川、大西洋に注ぐ南部河川及びウルグァイ川各流域がほぼ同規模の面積である。



全国に占める南部地方の面積

表3

南部3州の面積

州 別	面 積		陸地面積 km ²	水域面積 km ²
	面 積 km ²	%		
パ ラ ナ	199,554	2.4	199,060	494
サンタ・カタリーナ	95,985	1.1	95,483	502
リオ・グランデ・ド・スール	282,184	3.3	267,528	14,656
南 部 地 方 計	577,723	6.8	562,071	15,652
北 部 地 方	3,581,180	42.1	3,554,002	27,178
東 北 部 地 方	1,548,672	18.2	1,542,246	6,426
中 西 部 地 方	1,879,455	22.1	1,879,356	99
南 東 部 地 方	924,935	10.8	918,808	6,127
全 国 計	8,511,965	100.0	8,456,483	55,482

出所：IBGE

表4

河川流域面積

1,000km²

州 別	パラナ川	南部河川	ウルグァイ川	そ の 他	計
パ ラ ナ	183.7	15.9	—	—	199.5
サンタ・カタリーナ	12.9	35.7	47.3	—	96.0
リオ・グランデ・ド・スール	—	151.3	130.9	—	282.2
南 部 地 方 計	196.6	202.9	178.2	—	577.7
そ の 他 の 地 方	694.7	20.8	—	7,218.7	7,934.2
全 国 計	891.3	223.7	178.2	7,218.7	8,511.9

出所：IBGE

ハ) 人口

もっとも最近行なわれた1980年のセンサスによる人口は19百万人で国内総人口の16%を占め、南東部(43.5%)、東北部(29.3%)に次ぐ規模である。州別ではリオ・グランデ・ド・スール州の人口がもっとも大きく南部地方の40.8%を占め、パラナ州もほぼこれに近い40.2%、サンタ・カタリーナ州が19.0%の割合となっている。

各州都の人口ではリオ・グランデ・ド・スール州都のポルト・アレグレ市及びパラナ州都のクリチーバ市がそれぞれ100万人以上の人口を擁して、全国的にも大都市の中に数えられている。これに対しサンタ・カタリーナ州都のフロリアノポリス市は20万人弱の中都市である。

表5 州別及び地方別人口推移 (1980年) 1,000人

州及び地方別	人 口			
	1950	1960	1970	1980
パ ラ ナ	2,116	4,268	6,931	7,630
サンタ・カタリーナ	1,560	2,118	2,902	3,629
リオ・グランデ・ド・スール	4,165	5,367	6,665	7,777
南 部 地 方	7,841	11,753	16,496	19,036
北 部 地 方	1,845	2,562	3,604	5,893
東 北 地 方	17,973	22,182	28,112	34,856
中 西 部 地 方	1,737	2,943	5,073	7,545
南 東 地 方	22,548	30,630	39,854	51,768
全 国 計	51,944	70,070	93,139	119,098

出所：IBGE

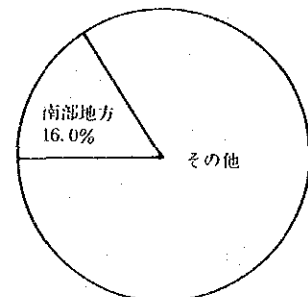
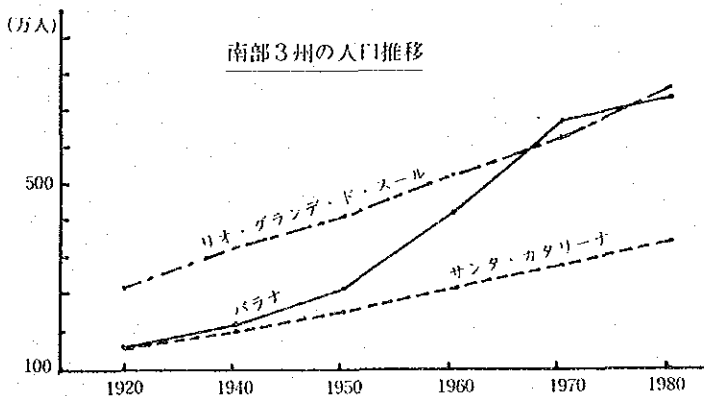


表6 各州都の人口推移 1,000人

州 都	人 口			
	1950	1960	1970	1980
クリチーバ (パラナ州)	181	357	609	1,026
フロリアノポリス (サンタ・カタリーナ州)	68	98	138	188
ポルト・アレグレ (リオ・グランデ・ド・スール州)	394	635	886	1,126

出所：IBGE

1980年度のセンサスで明らかとされた10万人以上の都市としては次のものがある。

表7 南部3州の中人口10万人以上の都市

州 別	都 市 名	人口 1,000人
パ ラ ナ	ク リ チ ー バ Curitiba	1,026.0
	ロ ン ド リ ー ナ Londrina	301.7
	ポ ン タ ・ グ ロ ッ サ Ponta Grossa	186.3
	マ リ ン ガ Maringá	168.2
	カ ス カ ベ ル Cascavel	157.4
	フ ォ ス ・ ド ・ イ グ ア ス ー Foz do Iguaçu	136.5
	ウ ム ア ラ ー マ Umuarama	100.6
サ ン タ ・ カ タ リ ー ナ	ジ ョ イ ン ビ ー レ Joinville	235.6
	フ ロ リ ア ノ ポ リ ス Florianópolis	187.8
	ブ ル メ ナ ウ Blumenau	157.3
	ラ ー ジ ェ ス Lages	155.3
	ク リ シ ウ マ Criciúma	110.6
リ オ ・ グ ラ ン デ ・ ド ・ ス ー ル	ポ ル ト ・ ア レ グ レ Porto Alegre	1,125.9
	ペ ロ ー タ ス Pelotas	260.2
	カ シ ア ス ・ ド ・ ス ー ル Caxias do Sul	220.7
	カ ノ ー ア ス Canoas	220.6
	サ ン タ ・ マ リ ア Santa Maria	181.7
	リ オ ・ グ ラ ン デ Rio Grande	146.2
	ノ ー ボ ・ ハ ン ブ ル ゴ Novo Hamburgo	136.6
	パ ッ ソ ・ フ ン ド Passo Fundo	121.2
	ビ ア モ ン Viamão	117.8
	グ ラ バ タ イ Gravataí	107.5
	バ ジ ョ ー Bagé	100.2

出所：ANUARIO ESTADISTICO

表8 人口密度 人/km²

州 別	1940	1950	1960	1970	1980
パ ラ ナ	6.2	10.6	21.4	34.8	38.3
サ ン タ ・ カ タ リ ー ナ	12.3	16.3	22.2	30.4	38.0
リ オ ・ グ ラ ン デ ・ ド ・ ス ー ル	12.4	15.6	20.1	24.9	29.1
南 部 地 方	10.2	14.0	20.9	29.4	33.9
全 国 計	4.9	6.1	8.3	11.0	14.1

出所：IBGE

人口密度は国内でも南東地方に次いで高く、南部地方の平均では1km²当り33.9人で、全国平均の14.1人をはる

かに上廻っている。州別ではパラナ州とサンタ・カタリーナ州の密度がほぼ等しく、リオ・グランデ・ド・スール州が上記2州に比して低い密度である。

1970年より80年にいたる10年間の人口増加率は1.4%で全国平均の2.5%をはるかに下廻り、国内でもっとも人口増加の鈍かった地方となっている。このような傾向は最近の10年間にみられた特殊な現象で、1972年に最初のセンサスが行なわれた以降南部地方の人口増加率は常に全国平均を上廻り、全国人口に対する比率は今世紀始めの10%より1970年には17.6%に及んでいた。

この様に長年にわたって人口の増加を続けてきた南部3州の人口増加率低下の原因は、他地方への転出が増えたための現象であり、とくにパラナ州における人口増加率の停滞が大きく影響している。このことは農業地帯がすでに限界に達して拡大の余地がなくなってきたことのほか、最近頻度を増してきた降霜によって度重なる被害（とくにコーヒー）を受けたため降霜のない地帯、とくに70年代より新たな農業前線として注目されているセラード地帯への移動が顕著となったことや、隣接するサンパウロ州への移動がさかんに行なわれたための現象とみることができる。この10年間にパラナ州より他州へ移動した人口は約100万人といわれており、その59%がサンパウロ州、21%が中西部地方（セラード地帯）、14%が北部地方（主にロンドニア州）へ移動している。

1980年センサスの結果にみられた大きな変化としては、始めて都市人口が農村人口を上廻ったことで都市人口の比率が62.4%、農村人口が37.6%の割合いとなっている。国全体としては10年前の1970年センサスで都市人口

表9 人口増加率

州 別	人 口 1,000人		人口増加率 年間 %
	1970	1980	
パ ラ ナ	6,937	7,630	1.0
サンタ・カタリーナ	2,903	3,629	2.3
リオ・グランデ・ド・スール	6,670	7,777	1.6
南部地方計	16,510	19,036	1.4
その他	76,705	100,063	
全国計	93,215	119,099	2.5

出所：IBGE

表10 都市及び農村人口 1,000人

州 別	都市人口	農村人口
パ ラ ナ	4,473.5	3,156.9
サンタ・カタリーナ	2,154.5	1,474.2
リオ・グランデ・ド・スール	5,252.5	2,524.7
南部地方計	11,805.5	7,155.8
その他の地方	68,673.9	31,463.7
全国計	80,479.4	38,619.5

出所：IBGE

が農村人口を上廻り全国平均で55.9%を占めたが、その際南部地方だけは農村人口が55.7%を占めて都市人口をしのいでいた。この様に都市人口比率の増加が遅れたのは南部3州が農牧業を主体とし、全国生産に大きな比重を占める生産地帯を構成してきたためである。

この様に最近の10年間にみられた都市人口の増加は基本的に農村人口の流出によるものであり、農村人口の減少は南部3州全体の傾向となっている。南部地方を構成する64の類型ミクロリージョンの中、人口の増加をみたのはわずかパラナ州の8地区、サンタ・カタリーナ州内の1地区のみであった。

また都市人口の方では少数の大型都市への人口集中がみられており、南部3州の中にある都市の10%に都市人口の65%が集中している状況にある。中でもポルト・アレグレ市、クリチーバ市及びパラナ州内北部のロンドリーナとマリंगाを結ぶ地帯が南部都市人口の35%を集中させている。これらの都市では人口の集中的増加による社会インフラの不足が明らかとなっており、人口過密化の問題が生じている。

経済活動人口については10才以上の経済活動人口及び非経済活動人口の年齢別統計、業種別統計及び所得階層別統計は次の各表の通りである。

表11 南部地方の経済活動人口（10才以上） 1,000人

区 分	経済活動人口		非経済活動人口		計
	男	女	男	女	
人 口 1,000 人					
10 ~ 14 才	508	301	954	1,112	2,875
15 ~ 19 "	1,038	687	269	635	2,629
20 ~ 24 "	1,009	575	77	504	2,165
25 ~ 29 "	836	408	23	455	1,722
30 ~ 39 "	1,307	615	25	678	2,624
40 ~ 49 "	968	412	48	566	1,994
50 ~ 59 "	571	209	106	435	1,321
60 才以上	288	82	311	544	1,225
計	6,525	3,289	1,813	4,929	16,555
比 率 %					
10 ~ 14 才	7.8	9.2	52.6	22.6	17.4
15 ~ 19 "	15.9	20.9	14.8	12.9	15.9
20 ~ 24 "	15.5	17.5	4.2	10.2	13.1
25 ~ 29 "	12.8	12.4	1.3	9.2	10.4
30 ~ 39 "	20.0	18.7	1.4	13.8	15.9
40 ~ 49 "	14.8	12.5	2.6	11.5	12.0
50 ~ 59 "	8.8	6.4	5.9	8.8	8.0
60 才以上	4.4	2.4	17.2	11.0	7.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：IBGE：SINOPSE ESTATÍSTICO

表12

南部地方の経済活動人口（業種別）比率

%

	計	所得階層別（最低賃金）			
		½まで	½～1	1～2	2～5以上
業種	43.5	40.3	41.2	28.0	21.3
製造業	13.3	4.2	14.1	21.9	19.2
サービス業	12.3	41.7	20.0	10.5	9.3
商業	8.9	4.8	8.7	11.1	11.9
非営利団体	5.5	2.2	6.4	7.2	7.7
建築業	5.2	1.1	4.4	10.0	8.1
運輸通信	3.1	0.6	0.9	2.8	7.9
官庁	2.9	2.8	1.6	3.3	5.2
雑務	2.1	0.9	1.2	2.0	3.1
その他	2.0	1.3	0.7	1.7	4.0
（工業）	1.2	0.1	0.8	1.5	2.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：IBGE：SINOPSE ESTATISTICO

表13

南部地方の経済活動人口比率（所得別）

%

区分	都市	農村	計
最低賃金の½まで	6.6	7.5	7.0
” ½～1	11.3	11.5	11.4
” 1～2	17.5	13.4	15.7
” 2～3	8.0	5.0	6.6
” 3～5	7.3	3.3	5.5
” 5～10	5.0	1.7	3.6
” 10～20	2.4	0.4	1.5
” 20以上	0.9	0.1	0.6
所得なし	40.9	56.8	48.0
申告なし	0.1	0.3	0.1
計	100.0	100.0	100.0

出所：IBGE. SINOPSE ESTATISTICA

1.1.2 地勢、河川

南部地方の地形は海岸に沿う海岸山脈を頂点とし、西部のパラナ川盆地、南部のウルグァイ平地に向って傾斜する形を特徴としている。この間海拔標高1,000m以上の海岸山脈より西部の30mの低地、南部の200m以下の平原にいたるまでゆるやかな波状の地形である。この平原を一般に南部高原（Planalto Meridional do Brasil）と呼んでいる。

パラナ州とサンタ・カタリーナ州の海岸山脈の中には南方地方でもっとも高い山峰があり、海拔1,965mのパラナ山（Pico de Paraná）を最高とする他、カラツバ山（Pico de Caratuba）1,939m、マルンピ山（Pico de

Marumbi) 1,565m等の高峰があり、パラナ川支流やウルグァイ川上流の盆地を形成する。

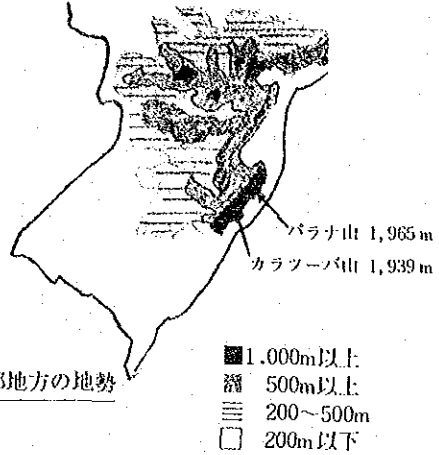
南部地方の地勢を形成する河川は、ラ・プラタ川上流のパラナ川及びウルグァイ川を中心とする河川群と、大西洋に流れ込む小河川群で、その流域にそれぞれの盆地を形成している。

各州別の地勢は次の通りである。

A) パラナ州：

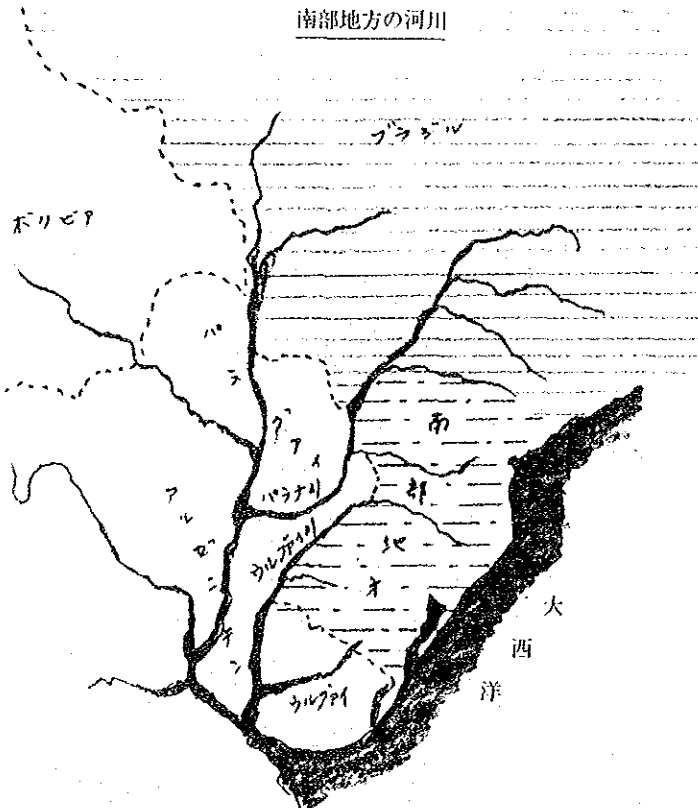
南部3州の中ではもっとも標高の高い州で、州内の52%は海拔600m以上の高度にある。その地勢は次の5つの地帯に分類される。

- イ) 海岸低地～海岸山脈の東側にある海岸線に沿った低地。
- ロ) 海岸山脈～州内でもっとも高い地帯で中に州内最高峰のパラナ山 (Pico Paraná) 1,966mがある。
- ハ) 第1高原～別名クリチーバ高原と呼ばれ、海岸山脈より西部のパラナ川沿岸に向う地帯の最初の部分をいう。
- ニ) 第2高原～別名ボンタ・グロソス高原と呼び西部高原地帯では中位の標高を持つ地帯。この地方には雨の侵蝕によって形成された奇岩群で有名なビーラ・ベéria (Vila Velha) がある。
- ホ) 第3高原～西部高原の中ではもっとも低い地帯で別名玄武岩高原と呼ばれる。



南部地方の地勢

南部地方の河川

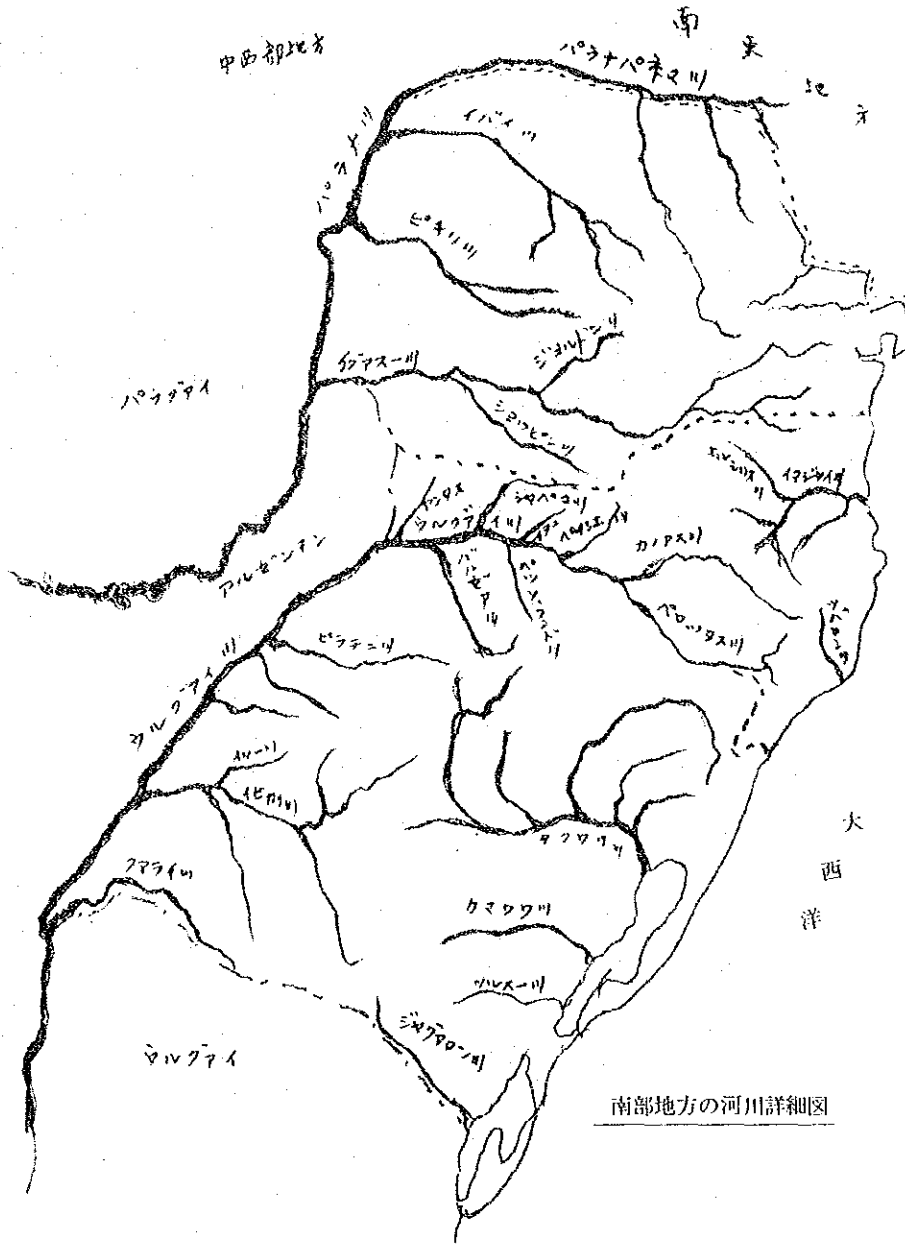


パラナ州内の河川はパラナ川とその支流のパラナパネマ川 (Paranapanema)、イバイ (Ivaí)、ピキリ (Piquiri) 及びイグアスー (Iguaçu) の各河川よりなるパラナ河川群と、海岸山脈を源流とし大西洋に注ぐ小河川群の二つに分けられる。この中パラナ川盆地では起伏の多い地勢の中を流れるため多くの瀧を作っており、これを利用する水力発電のポテンシャルに富んでいる。

B) サンタ・カタリーナ州：

東部より西部に向って次の4種の地勢に分けられる。

イ) 海岸低地—パラナ州の場合と同様に大西洋岸と海岸山脈との間にある低地。



南部地方の河川詳細図

ロ) 海岸山脈～パラナ州の海岸山脈に連続する山系で標高が高い。この海岸山脈は東北地方のリオ・グランデ・ド・ノルテ州に始まり南部地方にいたる長い山脈であるが、南端はこのサンタ・カタリーナ州の海岸山脈をもって終っており、リオ・グランデ・ド・スール州には入っていない。

ハ) 古生代形成の地質を持つ高原。

ニ) 砂質玄武岩による高原～州面積の半を占める。

州内河川は東部では海岸山脈より大西洋に注ぐイタジャイ川 (Rio Itajai) と、その支流のエルシリオ川 (Rio Hercilio) 及びツバロン川 (Rio Tubarão) がある。又西部はラ・プラタ系に属するウルグァイ川 (Rio Uruguay) とその支流のカノアス川 (Rio Canoas)、ペロッタス川 (Rio Pelotas)、ペイシェ川 (Rio Peixe)、シャベコ川 (Rio Chapecó)、イラニ川 (Rio Irani)、アンタス川 (Rio Antas) 等がある。

C) リオ・グランデ・ド・スール州:

地形は全体的に平坦またはゆるやかな波状形が支配的である。パラナ州及びサンタ・カタリーナ州内には可成り高い標高の場所があったのに対し、州内には標高の高い地形はない。州内の地勢は次の6種に分類される。

イ) 海岸低地～海岸に接する地帯で連続した砂地である。

ロ) 砂質玄武岩の高原～俗にセラーナ (Serrana) と呼ばれる地帯を形成する。

ハ) 中央低地～州内の中央部にある低地帯で州の中央部を東西に分離する。

ニ) クリスタリーノ高原 (Planalto Cristalino) ～州内南東部にあり波状形の地形が支配的である。

ホ) カンパーニャ平原 (Planície de Campanha) ～クリスタリーノ高原の西側にあり広い盆地と多くの草原より成る。

州内河川網はウルグァイ川及びその支流と大西洋に流れ出る中小の河川によって形成される。中でもウルグァイ川は州内でももっとも重要な河川であり、主要支流としてパツ・フンド川 (Rio Passo Fundo)、バルゼア川 (Rio Varzea)、ピラチニ川 (Rio Piratini) 及びイビカイ川 (Rio Ibicaí) 等がある。また大西洋岸の河川としては、ジャグァロン川 (Rio Jaguarão～ラーゴ・ミリンに注ぐ)、ツルスー川 (Rio Turuçu)、カマクア川 (Rio Camaquã)、タクワリ川 (Rio Tapuari)、シーノス川 (Rio Sinos)、カイ川 (Rio Cai) 及びグラバタイ川 (Rio Gravataí) 等がありパット湖 (Lagoa de Pato) に注いでいる。これらの河川周辺に広大な農業地帯が展開している。

1.1.3 植生

南部3州のパラナ、サンタ・カタリーナ及びリオ・グランデ・ド・スール各州は南緯23°以南に位置しているため、熱帯性の植生は少なく亜熱帯の植生が支配的である。また全域を通じて十分な湿気があるため森林の形成を可能としており、森林形態が南部地方北部地帯の代表的な植生であったが、今世紀中の開発がすすみ森林地帯が農地化されてしまったため、そもそもの植生がどのような形態であったかを判断するのは困難な状況となっている。リオ・グランデ・ド・スール州南部になると草原地帯が拡大する。これは地形が平坦であったことや過去に極度の乾燥の時期を経験したため森林の形成を妨げたのであろうと推定されている。

このような状況のため南部地方の植生を画一的に分類することは困難であるが、各種の研究の結果、ブラジル

地理統計院ではその植生を次の通り分類している。

植生の種類

- a a) 海岸山脈の湿潤恒葉森林 (Floresta Perenifolia Higrófila Costeira)
- b) 熱帯半落葉森林 (Floresta Subcaducifolia Tropical)
- c) 亜熱帯性半落葉森林 (Floresta Subcaducifolia Subtropical)
- d) 松を含む亜熱帯性半落葉森林 (Floresta Subcaducifolia Subtropical com Araucária)



南部地方の代表的植生

- 亜熱帯性の松を含む半落葉森林
- ▨ 亜熱帯性半落葉森林
- ▤ カンボ
- ▧ 熱帯性半落葉森林
- ▩ 沿岸地帯恒葉森林
- 海岸植生

e) 草原 (Campo)

f) セラード (Cerrado)

g) 海岸植生 (Vegetação Litoranea)

以上の植生分類の中代表的な植生の特性は次の通りである。

a) 海岸山脈の湿潤恒葉森林

南部地方の海岸線に沿う森林帯で、海岸地方の海岸線に沿っており、海岸の平地からジェラル山脈 (Serra Geral) の東側側面 600 ~ 700 m の高度まで植生する。

この植生は南部地方に限ったものではなく、北は東北地方のリオ・グランデ・ド・ノルテ州より延々と続いており、南部のオソリオ (Osorio) 付近で気象条件が温帯に入るためこの植生は終る。

森林の中には樹高 35m に及ぶ大木があり、葉は繁り太陽光線の侵入を遮っている。森林の中には中型の樹木のほか、わずかに入る日光によって育つかん木の層がある。

この森林には樹木の種類が多く、すでに相当の伐採が行われてきたが、地形上到達するのが困難な場所には原始林のままの姿が残っている。この様な原始林はパラナ州内の河川盆地やサンタ・カタリーナ州内のイタジャイ盆地 (Vale do Itajaí) にみられる。サンタ・カタリーナ州南部、及びリオ・グランデ・ド・スール州ではこの森林帯は狭くなっている。

この森林内の有用樹としては次のようなものがある。

パラナ州内: Figueira Branca, Guapiruvu, Angico Verdadeiro, Braúna, Caingá, Jacarandá, Timbaúva, Ipê Amarelo, Peraba, Palmito 等、

サンタ・カタリーナ州内: Canela Preta, Guaraparim, Tanheiro, Peroba, Bicuiba, Leiteiro Guapiruvu, Guaramirim Araçá, Cinzeiro 等

以上の樹木は平均標高 25m の大木であるが、このほか 9 m 程度のものとして Palmito, Bacopari 等がある。

これらの樹木を含む湿潤恒葉森林は木材の経済的価値を利用するためのほか機械化農地の造成のため広く伐開されており現在残っている森林は起伏の多い地形の場所や到達が困難な場所に限られている。

b) 熱帯半落葉森林 (Floresta Subcaducifolia Tropical)

別名 Mata Pluvial Tropical (雨の多い熱帯地帯の森林) とも呼ばれているパラナ州北部地方に限定される森林帯で、上記の湿潤恒葉森林に連続していたものであるが、現在では伐開しつくされて殆んど何も残っておらず耕地化されている。耕地化された農地の中にはその高い肥沃度で有名なテラ・ローシヤ地帯が含まれている。テラ・ローシヤ地帯に残っている森林の樹高は湿潤森林の場合と同様に 25 ~ 30m に達しており、乾期には相当の落葉がある。この森林帯の中には肥沃な土地であることを示す Pau-dente が多く植生していたといわれている。

有用材としては次のものがあげられる。

Peroba (樹高 40m に達す), Guatambu, Cedro Vermelho, Cedro Rosa, Jacarandá Amarelinho,

c) 亜熱帯半落葉森林

熱帯半落葉森林に連続する南部の森林帯であり、西部の河川盆地で松を含む地帯をも包含する。リオ・グランデ・ド・スール州ではウルグァイ川盆地のほか、高原南部地帯やタペス (Tapes) 及びエルバル (Herval) 山脈のように孤立した地域にも見られる。

森林内の有用材としては次のものがある。

Alecrim, Angico, Canafistulas, Canelas, Canjerana, Guatambu, Cedro, Guaçatinga, ヤシ類では Jerivá や Palmito が多い。

d) 松を含む亜熱帯半落葉森林

海岸山脈西側の高地より、南部高原の標高が高く気温の低い地帯にある。広い盆地地帯にあることは稀であり、河川上流の高地に限られる。パラナ州やサンタ・カタリーナ州では 600 ~ 500 m 以上の場所に、またリオ・グランデ・ド・スール州の場合は 400 m 以上の場所にみられる。土壌は極度の湿気がない限り森林形成を制約していない。

森林の構成は2段の層によって成っており、高い層が松、下の層には地質や太陽光線の度合に応じた樹木の層がある。これらの多くは乾期に落葉する。

パラナ州では海岸山脈の側面より奥地のパラナ川沿岸の地帯まで連続してみられるため、独特の風景を作っておりパラナ松の名称が一般化している。用材としても利用度の高いパラナ松のほか、有用材としては Imbuia があり、下の層には Erva-mate (マテ茶)、Xaxim が圧倒的に多い。

e) 草原

南部地方には多くの草原地帯があり天然牧草として利用されている。パラナ州内の草原地帯としてはクリチーバ草原 (Campos de Curitiba)、カストロ草原 (Campos de Castro)、ジェライス草原 (Campos Gerais)、グァラプアーバ草原 (Campos de Guarapuava)、パルマス草原 (Campos de Palmas) 等があり、サンタ・カタリーナ州内ではラージェ草原 (Campos de Leges)、サン・ジョアキン草原 (Campos de São Joaquim)、またリオ・グランデ・ド・スール州内ではバカリア草原 (Campos de Vacaria)、パッシン・フンド草原 (Campos de Passo Fundo)、ラゴア・ベルメーリョ草原 (Campos de Lagoa Vermelha) 等がある。これら3州にまたがる草原は南部草原 (Campos do Planalto Meridional) と呼ばれている。

これらの草原はゆるやかな波状形の地形に多く草によって覆われている。

() セラード

中西部地方を特徴づけるセラード植生はパラナ州北部にも及んでおり、標高 600 m 以上の場所にセラードの植生がある。州内のシンザ川 (Rio Cinza) 上流にあるセンジェス市 (Sengés) 及びパラナ川沿岸のジャグァリアイバ (Jaguariaíva) 近郊、カンボ・モウロン (Campo Mourão) の近くにもセラード植生がみられる。

以上の各種生別面積は次表の通りである。

表14 南部地方の植生別面積 1,000km²

州 別	カンボ	亜熱帯湿潤 松を含む森林	亜熱帯 湿潤森林	海岸湿潤 森林	その他	計
パ ラ ナ	18.2	80.6	28.6	5.4	66.3	199.1
サンタ・カタリーナ	14.4	41.2	8.2	29.6	2.1	95.5
リオ・グランデ・ド・スール	155.7	41.4	56.0	—	14.4	267.5
南部地方計	188.3	163.2	92.8	35.0	82.8	562.1
その他の地方	229.4	—	14.7	144.6	7,505.7	7,894.4
全 国 計	417.7	163.2	107.5	179.6	7,588.5	8,456.5

出所：ANUARIO ESTADISTICO

1.1.4 気 象

南部地方の気象は次の三種の気候に大別される。

イ) 亜熱帯型気候

パラナ州北部及び西部で年間どの月も平均気温が15℃を下らず、15～18℃の間にある地帯。全般に湿潤又は半湿潤の気象型でほとんど乾燥しない。

ロ) 温帯型気候

少なくとも年間1月だけは平均気温が15℃を下る地帯を指す。

ハ) 高地気候型

パラナ州の標高1,300m以上、サンタ・カタリーナ州の1,200～1,300m、リオ・グランデ・ド・スール州の1,000～1,000mの地帯で、年間の平均気温が12～14℃で年間少なくとも1月は平均気温が10℃を下る地帯。各州別にみると次の状況にある。

表15 気 象 統 計 パラナ州 クリチーバ市 1981年

月 別	気 温 (℃)					湿 度 %	降 雨 量 mm	
	最高平均	最低平均	絶対最高	絶対最低	平 均		月 間 計	24時間最高
1	25.7	17.0	30.1	13.1	20.6	84	161.6	38.9
2	26.4	17.3	31.0	16.0	21.1	81	28.3	6.8
3	25.0	15.7	30.8	11.4	19.4	82	63.0	25.0
4	22.2	12.7	28.2	6.9	16.5	84	72.1	30.1
5	22.4	11.7	27.5	6.8	16.2	81	43.8	16.7
6	18.7	8.5	24.7	— 2.2	12.7	79	17.2	4.8
7	17.9	6.2	25.4	— 2.0	11.4	78	25.4	8.7
8	20.8	9.4	27.1	5.8	14.1	77	57.2	23.9
9	23.7	10.5	31.4	1.8	15.9	72	71.3	33.6
10	20.0	11.6	28.6	4.3	14.9	86	126.0	24.5
11	25.7	15.4	31.5	11.0	19.2	80	136.9	52.4
12	23.9	14.7	29.4	10.4	18.6	81	145.1	42.0
年間	22.7	12.6	31.5	— 2.2	16.7	80	947.9	52.4

パラナ州：

熱帯と亜熱帯の中間型で年間の平均気温は18℃以下に落ち、国内でももっとも気温の低い地方の一つである。夏と冬の平均気温差は9℃に達する。州内の全般にわたって豊富な降雨がある。年間平均降雨量は1,250mm～1,500mmである。

サンタ・カタリーナ州：

州内の気候は湿潤な亜熱帯気候で次の二種に分けられる。

a) 夏が暑い湿潤亜熱帯気候～低地帯の気候型で年間の平均気温は18～20℃の間にある。

表16 気象統計 サンタ・カタリーナ州 フロリアノポリス市 1981年

月別	気 温 (℃)					湿度 %	降 雨 量 mm	
	最高平均	最低平均	絶対最高	絶対最低	平均		月間計	24時間最高
1	27.5	21.8	30.9	19.7	24.4	82	129.9	37.3
2	29.0	22.7	31.4	18.9	25.6	83	157.7	53.2
3	27.0	20.7	31.5	15.8	23.6	80	292.9	131.9
4	25.2	18.5	29.2	11.8	21.5	80	114.9	33.4
5	25.6	17.9	30.6	13.8	21.0	84	179.4	133.8
6	21.3	13.3	27.9	4.1	16.6	78	59.2	23.3
7	20.2	12.6	31.6	6.9	15.9	81	86.7	23.5
8	21.2	13.9	28.6	8.1	17.0	81	40.0	22.5
9	21.6	15.3	25.8	8.8	18.0	82	69.4	19.1
10	21.9	15.6	25.4	9.9	18.7	79	169.8	38.5
11	25.6	19.4	28.1	16.4	22.4	80	112.8	25.8
12	25.9	19.8	29.8	17.0	22.8	78	184.3	47.2
年間	24.3	17.6	31.6	4.1	20.6	81	1,597.0	133.8

表17 気象統計 リオ・グランデ・ド・スール州 ポルト・アレグレ市 1981年

月別	気 温 (℃)					湿度 %	降 雨 量 mm	
	最高平均	最低平均	絶対最高	絶対最低	平均		月間計	24時間最高
1	29.9	20.6	35.1	15.8	24.5	73	123.9	45.8
2	30.5	22.0	35.5	16.6	25.6	77	231.7	109.8
3	27.8	18.5	34.6	13.0	22.5	75	14.6	8.6
4	24.7	16.4	29.9	29.9	11.8	78	108.2	37.2
5	26.0	15.7	32.6	10.4	20.0	81	50.5	18.6
6	18.6	9.7	27.8	2.3	13.3	81	138.0	46.3
7	19.5	11.1	28.8	5.3	14.6	78	81.0	34.5
8	22.3	11.7	31.3	4.7	16.3	72	50.3	30.5
9	21.0	13.3	33.4	7.6	16.6	80	194.7	40.1
10	23.3	13.9	32.8	7.2	20.2	70	19.9	8.3
11	26.8	18.0	33.6	14.6	21.7	73	54.3	34.4
12	27.6	18.0	34.6	12.3	22.2	67	90.6	27.2
年間	24.8	15.7	35.5	2.3	19.8	75	1,177.7	109.8

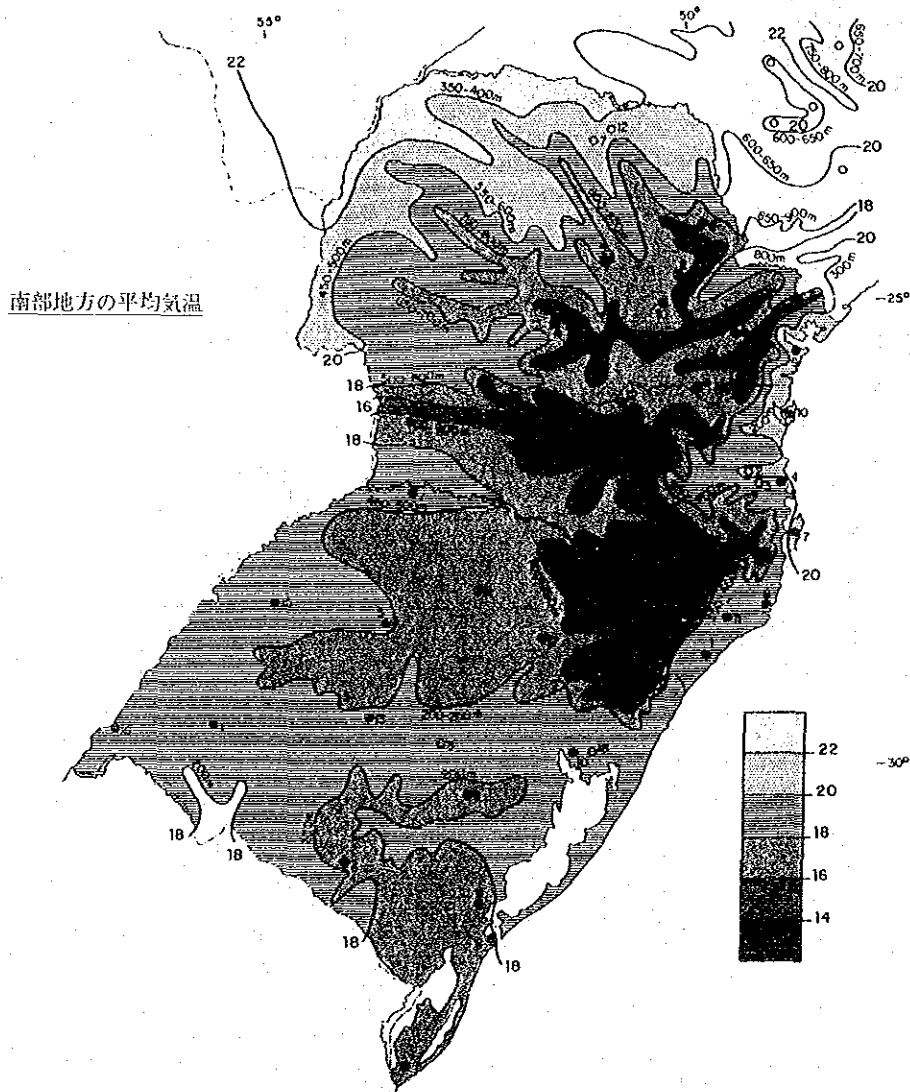
出所：気象庁

b) 夏の気温が低い湿潤亜熱帯型気候～高原地方の気候型で、年間平均気温は16～18℃、年間平均降雨量は1,500mmに達する。年間を通じて平均している。サン・ジョアキン (São Joaquim) 高原では降霜をみることがある。

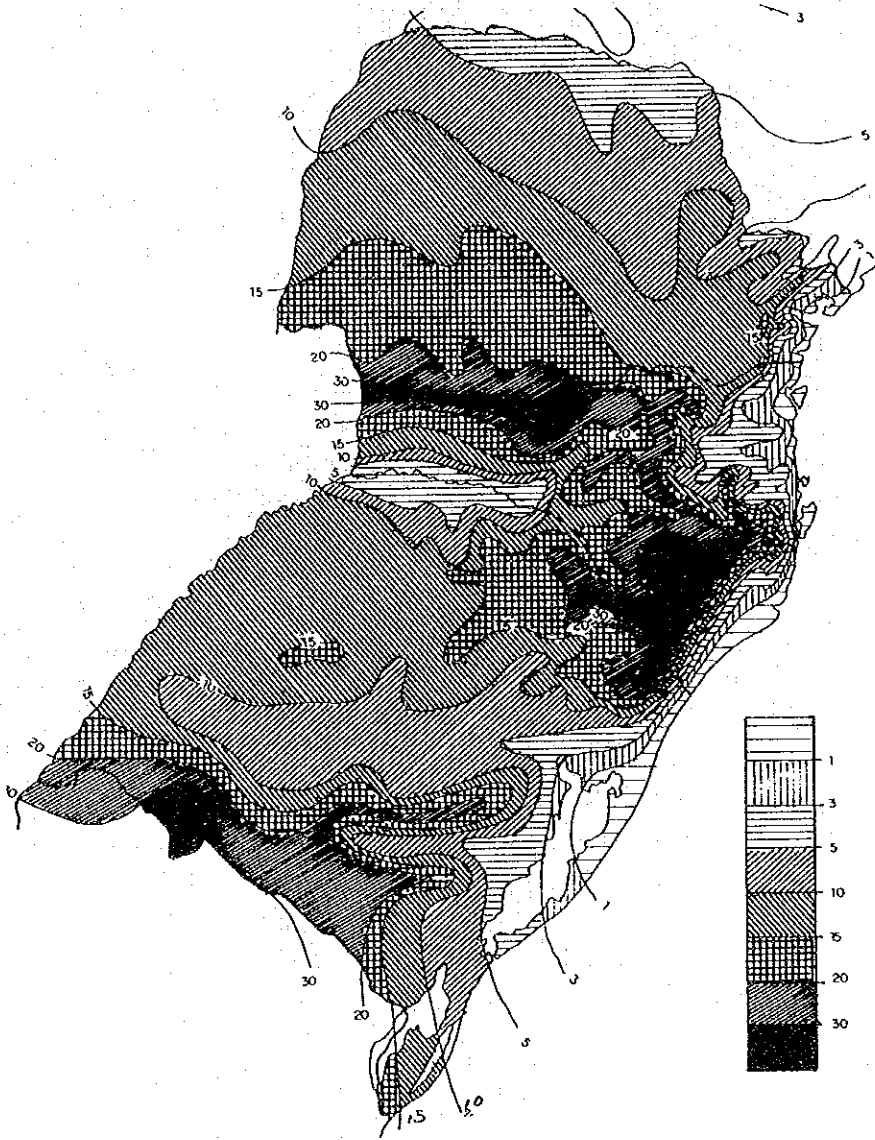
リオ・グランデ・ド・スール州：

州の全体を通じて亜熱帯型の気候である。平均気温は18℃、年間平均降雨量は1,000mm前後である。カンパニャ (Campanha) 地方は夏がもっとも暑く、高い高原地帯では夏は涼しく、冬は厳しい寒さがある。降霜は全州にわたってあり、降雪は高原地方で5～9月の間にみられる。

以上の気象型を持つ南部3州各州都の最近の気象統計は表15～17の通りである。



南部地方の年間降霜回数



1.2 経済概況

1.2.1 概況

南部地方は全国を5つに分けた地方分類の中では面積がもっとも小さく全国の6%を占めるにすぎず、人口も国内総人口の16%弱に止まっているが、その経済活動は南東地方に次ぐ重要性を持っており、国内総生産高に約18%の比重を占めている。

経済活動の中では農牧部門が傑出した位置を占めており、生産品目の中には国家経済上重要なものが多く、かつ全国でも上位の生産規模にあるものが多い。すなわち国内食糧としては米をはじめ小麦、フェイジョン、とうもろこし及び牛肉の重要な生産地かつ国内他地方への供給者の立場にあり、輸出作物では、かつてのコーヒーに代って大豆及び副産物の生産集中地帯である。主要農産物の国内生産に占めた比率を統計でみると南部地方の重要性が理解される。

工業部門の方は南東地方に次ぐ国内第二の工業地帯ではあるが、南東地方に比して全国的な重要性は小さく、国内工業生産の16%程度の規模にとどまっている。しかし中にはリオ・グランデ・ド・スール州のシーノス川周辺を中心とする靴産業や、同じリオ・グランデ・ド・スール州を主体とするぶどう酒の製造など全国的規模の工

表18 南部地方主要農産物の全国生産比率 %

品 目	1978	1979	1980	1981	1982	1983
小 麦	95.6	89.6	87.4	90.3	83.8	83.0
煙 草	72.4	77.5	79.0	73.8	74.7	80.3
大 豆	84.7	78.1	78.2	78.0	69.8	68.5
とうもろこし	45.6	47.4	57.1	58.4	51.2	52.8
じゃがいも	60.0	56.1	49.5	47.1	46.8	44.1
玉 ねぎ	37.3	40.6	39.6	47.8	45.4	45.8
フェイジョン	34.9	38.0	33.7	40.6	39.0	39.7
米	34.5	29.3	34.5	40.6	33.1	38.5
コ ー ヒ ー	25.8	9.2	15.8	21.8	15.8	18.3
羊	62.7	62.6				
豚	37.0	37.0	※	※	※	※
牛	20.0	19.4				
鶏	29.7	29.9				

出所：SUDESUL. IBGE ※ 資料なし

表19 南部地方の工業規模 1980年センサス

州 別	工 場 数		従 業 員 数		生 産 高	
	1,000	%	1,000人	%	CR 10億	%
パ ラ ナ	7.7	6.5	216.3	4.6	475.6	5.1
サンク・カタリーナ	7.0	5.9	255.7	5.5	370.1	3.9
リオ・グランデ・ド・スール	9.4	8.0	430.6	9.3	676.4	7.2
南 部 計	24.1	20.4	902.6	19.4	1,522.1	16.2
そ の 他 の 地 方	94.2	79.6	3,747.8	80.6	7,864.8	83.8
全 国 計	118.3	100.0	4,650.4	100.0	9,386.9	100.0

出所：ANUARIO ESTADÍSTICO 1983

業も含まれている。

対外取引面では上述の通りコーヒー及び大豆を主要輸出品目としているが、その他煙草葉、加工牛肉、工業部門での靴などがブラジルの輸出に大きな比率を占めた項目として加えられる。また輸入代替面では小麦、大麦及びリンゴの生産が特筆される。

国内取引面では前述の通り主要農産物の供給源としての立場にある反面、工業製品はその多くが自給態勢になく南東地方よりの供給に依存している。最近の統計に欠けるが78年のデータによると、サンパウロ州の州外販売の中31%が南部地方に向けられており、南東地方にとっては19百万人を擁し所得水準が全国平均を上廻る重要な消費市場として重視されている。

南部地方の経済活動面における重要性としては上記のほか、国内で唯一の石炭産出地帯であること、イタイプー水力発電所を始め豊富な水力発電資源を有していること、現在までのところ林業分野では国内最大の生産地帯であること、羊毛生産の唯一の場所であることなどがあげられる。

他面、このような南部地方の経済的位置も、地域内の農耕地帯がすでに限界に達して面積拡大の余地がなく、中西部地方や北部地方の農業前線に新しい農業地帯が出現していること、やエネルギー危機の中で石油代替のエネルギー源としてのパラナ州内の水力発電、リオ・グランデ・ド・スール州及びサンタ・カタリーナ州の石炭、パラナ州サン・マテウス地区におけるオイル・シエルの生産等、これに関連する工業部門の開発がすすめられ、すでに操業段階に入った第3石油化学コンビナート（ポルト・ポルト・アレグレ）と共に、これまで農牧活動を中心としてきた経済活動が徐々に工業面へと移行していくのではないかと予想されている。

最近の経済概況については、SUDESUL（南部開発庁）が発表した1983年度の報告書によると次の通り述べられている。

1983年度は国内経済の全体がリセッション経済の中で移行し、最近数年間における最大のマイナス成長（-3.0%）を残した年であった。対外債務、財政赤字、及びインフレの対策が経済政策の主要目標としてとりあげられ、年度当初のクルゼイロ対米ドル平価の大巾切下げによる輸出増進と輸入抑制策、公共経費の節減や投下の抑制、補助の打ち切りや給与政策の変更及び一連の金融引締め政策による財政赤字と国内インフレ対策の中で、南部地方の経済もその活動の停滞を余儀なくされた。

南部地方における83年度の経済活動状況をみると、全国的には大巾な生産減を招いた農牧部門で全国並みに生産を落したもののほか、一部には生産を増加した作物もあり、主要輸出農産物が国際相場の好況に恵まれたため農牧部門としては平均して収益の増加がみられた年であった。

南部地方農業生産の90%を占める主要11品目についてみると、5品目が増産（前年比コーヒー 238.7%、砂糖キビ29.2%、煙草0.8%、大豆11.6%、小麦23.1%）、マンジョカの生産は前年と変化はなく、生産を落したものとしては、米-7.3%、綿-5.3%、じゃがいも-20.2%、フェイジョン-47.0%、とうもろこし-11.8%等があった。

牛肉の生産は屠殺量でみると前年を6.6%下廻り国内需要の減退を反映したが、海外需要の増加が国内の減退をカバーした形となっている。これに対し養豚部門は過去2ヶ年にわたる屠殺量減少のあと、83年は前年比7.8%の大巾な回復をみている。逆に養鶏部門は悪く、79年から80年にかけて年間平均30%という好調の成長のあと、83年には前年比0.6%の成長に止まり新たな停滞の時期に入っている。

農業部門と工業部門の交換係数については、生産者が農産物の販売によって得た受取価格と、生産資材の購入のために支払った価格の関係でみると、農業部門の方に有利に展開しており、農業者の購買力が全国的に低下した中で南部地方は逆に購買力を高めた結果となっている。これは他の地方に比して輸出農産物を多く持ち、その価格が有利に展開したための結果とみられる。

一方、工業部門は83年の金融引締めの影響をまともに受けた部門であり、全国ベースで83年度の生産高は82年の水準を(-)6.26%の下降であった。中でも資本財部門の落ち込みがひどく、受注の70%を占める公共部門の予算削減が大きく影響した部門であった。非耐久消費財の生産は機械や車輛類生産の落ち込み程ではなかったが、ここにも大巾な減退がみられている。これに対し耐久消費財の方は自動車部品や製鉄製品が、年間の一時期需要水準を維持したものの年間を通じるとやはり停滞の年であった。

中間財部門も又、その他の工業部門と同様の傾向にあり、ここでも政府の投資予算縮少が大きく影響した。鉄鋼製品及び化学製品の輸出にしても低調な水準を脱却することは出来なかった。

このような構図の中で南部地方の工業生産も良好なものではなく、前年に比して大巾な生産減退がみられた。部門別にみると南部地方でも全国の場合と同様に資本財部門(機械、車輛及び部分品)がもっとも低調であり、建築部門がこれに続く不振な部門であった。その理由も又全国の場合と同様に公共及び民間投資の停滞によるものであった。

最終消費財(耐久及び非耐久消費財)部門の成果も又工業界で期待されていた程のものではなく、農牧部門の資材需要減退、都市の雇用水準の低下、給料生活者の購買力の減退を反映した。とくに雇用率は前年に引き続く下降を続け、インフレ下の実質賃金の下落と共に購買力を落し、財の購入を鈍らせたためであった。また中間財では他の部門と同様にコスト上昇の影響のほか、その需要先の工業界が不振であったため直接の影響を受けた部門となっている。

土木建築部門についても又前年に続く低調な活動が継続した、政府の緊縮財政の影響を受けたものである。更にインフラ部門や重電気部門でも国営会社の投資予算20%削減の影響による受注の減少がみられた。ただし輸送部門は例外で、下半期に各地で発生した洪水の被害のため各州政府は道路の補修、建設工事を余儀なくされている。

市場の需要が少なかったため建設された建物の実質価値の減少がみられた。建物価格は年間を通じて135.8%の上昇であったが、この間インフレが211%の上昇をみており、リセッション経済下における不動産への需要減退を明らかにしている。同様に商業界にもその影響があり販売高の明らかな減退がみられた。主要都市のポルト・アレグレ市では82年に前年比(-)5.8%の売上減少のあと、83年は(-)18.8%と大巾な売上減が続いており、クリチーバ市においても82年度の(+3.2%)より83年には(-)7.9%の落込みとなっている。

取引きされた小切手の額面金額についてみると83年には実質価値で若干の増加はあったが、前年の減少をカバーすることは出来なかった。これらの小切手が商業活動に何らかの関連を持つものと仮定すると、南部地方の経済活動で資金の不足があったものと結論づけられる。

以上のように不振を極めた83年度の経済活動の中で前年をはるかに上廻る実績を残したのは輸出部門で、大豆及び加工品の輸出が国際価格の好況に幸されて大巾な伸びを記録した。このほか工業製品、基礎資材等も輸出を伸ばしているが、これらは年頭に行なわれたクルゼイロの大巾切下げによる国際競争力の強化にもとづく成果とみられている。

企業の支払能力は南部3州でそれぞれ異った様相もっており、クリチーバ市及びフロリアノポリス市において破産した企業数が前年より減少したのに対し、ポルト・アレグレ市では極度に増加している。

商業活動の1つのバロメーターとなるICM(商品流通税)の税収入を実質価値でみると、前年の(-)3.5%に対し83年はやや好転して(+11.4%)の収入増を記録している。同収入額は全国のICM収入額の17.4%に相当する。

物価指数については全国のインフレ率が211%に達した中で、南部各州都の生活費上昇率はクリチーバ197.5%、フロリアノポリス182.7%、ポルト・アレグレ175.5%で全国をやや下廻る物価上昇であった。

また全国的な経済活動の直接の影響として、すでに減退傾向にあった雇用水準は更に悪化しており、中でも建築部門における雇用率の減少が目立っている。

1.2.2 工業部門

南部地方の工業生産に関する IBGE (ブラジル地理統計院) のデータによると、1980年度の統計では全国企業数の20.2%にあたる24,348の工場が操業し、全国工業従業員数の19.4%に相当する918千人が就働し、生産高は全国合計の16.1%に相当する Cr\$ 1,533,190百万であった。

従業員数及び工業生産高からみると南東地方に次いで全国二位の位置にあるが、南東地方の比率が圧倒的に高い(従業員数の66%、生産高の73%)ため二位といってもその規模は比較にならない。

工業部門の中では製造工業の割合がもっとも高く、工業部門生産高の4分の3を占め、建築、公共工業サービスがこれに続く生産高の高い部門となっている。鉱業部門が工業全体の所得形成に与えた割合は低く製造工業部門の1.3%程度である。

表20 鉱業部門の規模

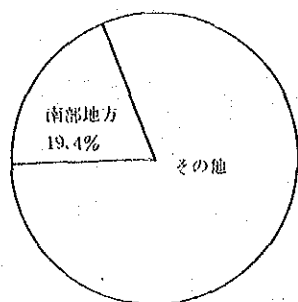
州別	年度別 区分	1975			1980		
		企業数	従業員数 1,000人	生産高 Cr\$ 100万	企業数	従業員数 1,000人	生産高 Cr\$ 100万
パラナ		90	2.0	97.6	127	2.9	1,518.8
サンタ・カタリーナ		58	7.6	465.8	127	9.6	7,251.8
リオ・グランデ・ド・スール		86	3.3	153.0	76	3.4	2,269.0
南部計		234	12.9	716.4	289	15.9	11,039.6
西部地方		44	5.2	2,762.5	31	4.5	9,302.0
東北地方		317	12.6	945.9	348	14.3	10,420.1
中北地方		90	2.0	261.3	439	7.9	6,357.4
南東地方		875	27.6	6,061.3	1,168	38.4	85,386.8
全国計		1,561	60.3	10,747.4	2,276	83.7	122,505.9

出所：ANUARIO ESTADISTICO

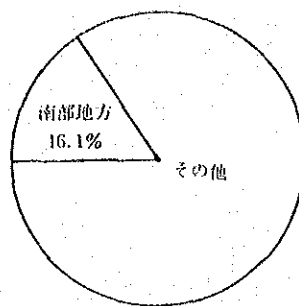
表21 製造工業部門の規模

州別	年度別 区分	1975			1980		
		企業数	従業員数 1,000人	生産高 Cr\$ 100万	企業数	従業員数 1,000人	生産高 Cr\$ 100万
パラナ		6,269	157.1	32,219.3	7,668	216.3	475,643.0
サンタ・カタリーナ		4,874	170.4	23,070.1	6,956	255.6	370,063.2
リオ・グランデ・ド・スール		8,532	334.1	55,972.2	9,435	430.6	676,444.7
南部計		19,675	661.6	111,261.6	24,059	902.5	1,522,150.9
北部地方		2,173			3,855	114.1	176,374.5
東北地方		12,148	338.4	49,565.6	16,966	463.0	718,894.6
中西地方		3,040	51.0	8,157.1	4,989	85.9	115,027.0
南東地方		57,005	2,492.6	584,686.8	68,456	3,084.8	6,854,477.2
全国計		94,041	3,604.1	761,583.6	118,324	4,650.4	9,386,924.3

出所：ANUARIO ESTADISTICO



全国従業員数に占める比率(1980)



全国生産高に占める比率(1980)

上記1980年の統計を1969年の統計と比較すると、全国工業生産高に対する比率が69年の12.7%より、80年には16.1%に上っているので、この間他の地方に対する位置を向上させたことが明らかとされている。

とくに従業員数の比率が大きいのは南部地方の工業が全国平均よりも労働力に依存する伝統的な工業が多いことを意味するものであり、農牧部門と関連した工業が多いことを示す数字でもある。それだけに近代的工業の数は少ない。伝統的工業としては食品、木材及び衣料工業がそれぞれ製造工業生産高の18.3%、11.6%及び6.5%を占めて大きく、また新しい工業としては化学(14.3%)、機械(9.3%)、金属(7.5%)及び非金属工業(5.8%)が特筆される。

南部地方の工業を使用分類別にみると中間財の生産高がもっとも多く、消費財がこれに続いているが、消費財の生産比率は減少傾向にあり、これに代って資本財の比率が増加している。使用分類別の統計としては最近のものがないので1975年までの統計をみると次の通りとなっている。

表22 南部地方工業の製造品目分類別統計(A) %

分類別	南部地方			全 国		
	1960	1970	1975	1960	1970	1975
伝統的工業	71.0	60.7	52.4	47.2	40.6	35.6
新しく導入された工業	29.0	39.3	47.6	52.8	59.4	64.4
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：REGIAO SUL EM PERSPECTIVA

表23 南部地方工業の製造品目分類別統計(B) %

分類別	1960	1970	1975
資本財	3.9	9.3	14.0
中間財	40.2	44.3	46.3
消費財	55.9	46.4	39.7
耐久消費財	(6.7)	(6.2)	(5.6)
非耐久消費財	(49.2)	(40.2)	(34.1)
計	100.0	100.0	100.0

出所：REGIAO SUL EM PERSPECTIVA

南部地方の工業地帯としては次の地域があげられる。

a) ポルト・アレグレ都市圏(リオ・グランデ・ド・スール州)

南部地方では最大の工業地帯で地方内工業生産高の26%を占める。工業の種類も多く広域にわたっているが、

中でも化学（国内生産高の20%）、金属（14%）、機械（10%）、衣料及靴（10%）、食品（7%）、輸送機器（5%）等が重要な工業部門である。

1970年代の工業生産傾向は電力消費量を工業生産の1つの指数としてみると、南部地方全体の平均を下廻っている。

b) クリチーバ都市圏（パラナ州）

南部地方ではポルト・アレグレに次ぐ重要な工業地帯で地方工業生産高に 8.6%のウエイトを占めている。業種としては金属（国内生産高の17.5%）、木材（13%）、食品（11%）、機械（9%）、家具（7%）等があげられる。70年代の成長率は地方全体の平均値であった。

c) ジョインビレー (Joinville) 及びジャラグア・ド・スール (Jaraguá do Sul) ~ サンタ・カタリーナ州

南部地方工業生産高の 5.9%を占める第3の工業地帯で新しい工業々種が多い。中でもプラスチック、機械、食品、衣料、電気機器、通信機器及び靴産業が特筆される業種である。

上記2市のうちジョインビレーは工業生産成長率の地方全体の平均、ジャラグア・ド・スールの場合は平均を上廻る成長を示している。

d) カシアス・ド・スール (Caxias do Sul)、ファロウピーリャ (Farroupilha)、ベント・ゴンサルベス (Bento Gonçalves)、グァリバルディ (Garibaldi) 以上リオ・グランデ・ド・スール州内。

(C)の場合とほぼ同等の工業規模で南部地方工業生産高の 5.9%を占める。業種は金属、機械、家具、飲料水、繊維が特筆される。70年代にはこの中カシアス・ド・スールだけが平均的成長、他の都市は平均を上廻る成長を残した。

e) ブルメナウ (Blumenau)、イタジャイ (Itajaí)、チンボウ (Timbó)、ブルスケ (Brusque)、インダイアル (Indaial) 以上サンタ・カタリーナ州

南部地方工業生産高の 5.2%を占める繊維及び衣料をベースとする工業である。70年代には南部地方全体の平均的成長であった。

f) ロンドリーナ (Londrina) ~ マリンガ (Maringá)、パラナ州

パラナ州北部の工業都市群で食品工業と化学工業を基礎としており、南部地方工業生産高の 4.7%、また70年代の南部地方平均成長率に準じた成長を残している。

g) ペロックス (Pelotas) リオ・グランデ・ド・スール州

地方工業生産高の 3.3%を占めており、化学及び食品工業をその基礎としている。

h) パナンビ (Panambi)、イジュイ (Ijuí)、サント・アンジェロ (Santo Angelo)、サンタ・ローザ (Santa Rosa)、オリゾンティーナ (Horizontina) 以上リオ・グランデ・ド・スール州

地方工業生産高の 2.3%を占めており、農機具及び大豆の加工工業を中心としている。

以上の主要工業都市群のほか、単独の都市として同様に重要性を持つものとしてパラナ州内のポンタ・グロッサ市 (Ponta Grossa) 及びサンタ・カタリーナ州のラージェス市 (Lages) がある。大豆を中心とする農産加工工業及び化学部門を基盤とするポンタ・グロッサ市に対し、ラージェス市の方は木材及び紙工業が盛んである。

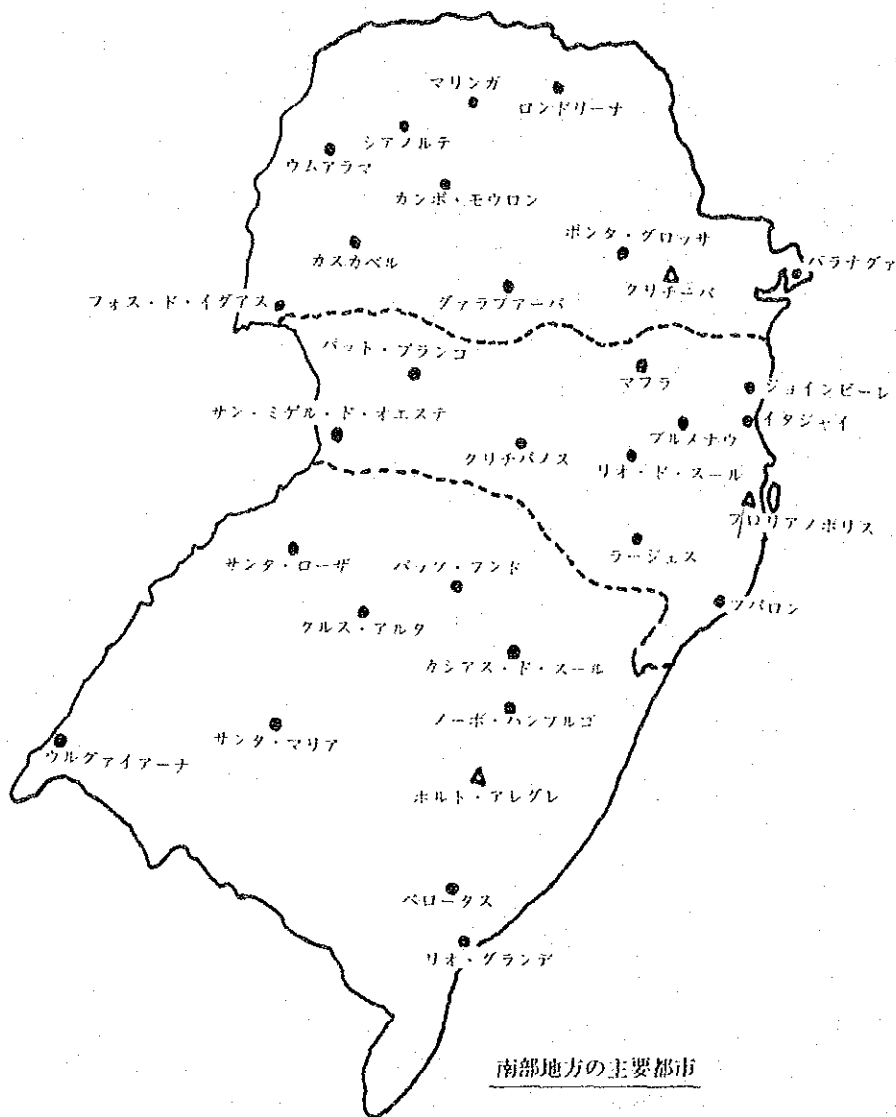
このほか、木材と家具工業に関連する工業都市としては、サンタ・カタリーナ州のサン・ベン・ド・スール (São Bento do Sul)、リオ・ネグリンニョ (Rio Negrinho)、マフラ (Mafra)、トレス・バーラス (Tres Barras)、カノインニヤス (Canoinhas) 及びポルト・ウニオン (Porto União) や、パラナ州のウニオン・グ・ビトリア (União da Vitória) にあるが、それぞれの距離が遠いため工業都市群の形は作っていない。

他方、70年代に新たな工業都市として名が知られるようになった都市としては、第3石油化学工業基地としてのモンテネグロ市 (Montenegro)、石炭の採鉱に関連する都市としてリオ・グランデ・ド・スール州内のサン・ジ

エロニモ (São Jeronimo) 及びブティア (Butia)、サンタ・カタリーナ州内のクリシウマ (Criciúma)、ツバロン (Tubarão)、インピツバ (Imbituba)、オイルシエルに関連するパラナ州サン・マテウス・ド・スール (São Mateus do Sul) 等があげられる。

以上のような構図の中にある南部地方の工業界は、いまだに開発度は低く70年代を通じてダイナミックな活動は行なわなかったが、南部地方の農業地帯がすでに面積拡大の余地を残していないため、都市への人口集中が更に加速化する傾向にあることや、中央政府の方針として工場の地方分散、工業開発の格差是正等の政策と共に、南部地方内の第二次産業部門は新たな時代に入ることが予想されており、この地方が提供する次の条件を利用した工業開発が展開されるものと思われる。

一南部地方の市場は現在までのところ地域外、とくにサンパウロ州を中心とする南東部地方の工業によって工



業製品や資材の供給を受けている現状にある。地域内工業の発達は直ちにその市場を利用することが出来、圈内自給に切り換える可能性を持っている。このことは又輸送コストが工業製品価格を高めている現状を改める上においても有益である。

- 一南部地方がそもそも農牧部門を主体とする地方であるところから、これに関連した工業が発達しているが、現状ではいまだに不足しており、南東地方に多くを依存している状況にある。農牧部門をベースとする工業の場合は投資額が比較的に少ないこと、工業プロセスが簡単であること、投資額あたりの雇用度が高いことなどから最初に注目されねばならない部門である。
- 一国内の工業中心地帯である南東地方に距離的に近く、工業開発のベースとなる各種のインフラを有していること、中でも機械金属部門ではすでに南東地方に対する供給者の立場にあるものもあり、今後もその可能性を有している。
- 一南部地方独自の地下資源としての石炭の開発は、これに関連する各種の工業活動を可能としている。またすでに操業段階に入っている第3石油化学工業基地は、その製造原料を利用する第二次工業の発展を推進することとなり雇用面、生産面で大きく貢献することとなる。このためにはこれらの工業群を誘致する政策を必要とし、工業開発の機会を失なわないよう施策することが重要となる。

1983年度の工業生産概況

南部地方の工業活動が国全体の経済環境に強く影響されるものであるところから、最初に国全体の工業界を概観したあと南部地方の特殊性を観察することとする。

イ) 1983年度における国内工業の状況

1983年度も又過去3ヶ年にわたる工業活動不振の年を経験した。同時に工業界に対する投資も79年以降連続して減少してきたあと、83年度にはインフレ抑制対策としてとられた政府予算の削減と、それに伴う公共投資の縮小により極度に悪化した年となった。工業投下の縮小は次年度の工業生産活動に影響を与えるばかりでなく、工業界全体の存続にも影響する深刻さがあった。

IBGE (ブラジル地理統計院) が発表したデータによると、製造工業部門は1983年に前年比(-)6.26%の生産減少を記録している。工業生産の減少は81年の頭初より始まり、82年の2月まで続いたあと反転し、83年の2月まで上昇するが、この月を頂点として再び下降し、結局83年の末には82年を下廻る実績に終わったものである。

工業部門を生産財の使用区分で見ると、1983年には資本財の生産減退がひどく、12月の時点で前年同期に対し(-) 20.21%という大巾な減少であった。これは資本財工業の受注量の約70%を占める公共部門の投資抑制及び経済界全般の資金不足によるもので、施設の50%が遊休化し、一部の業種では操業を中止したところや大型工場の

表24 工業生産成長率 (過去12ヶ月間の推移)

部 門 別	1982		1983	
	1月まで	12月まで	1月まで	12月まで
資 本 財	(-) 19.88	(-) 11.19	(-) 12.50	(-) 20.21
中 間 財	(-) 11.68	0.46	3.53	(-) 3.03
消 費 財	(-) 6.24	2.69	3.86	(-) 5.02
耐久消費財	(-) 27.71	7.73	11.03	(-) 4.00
非耐久消費財	(-) 2.46	1.80	2.60	(-) 5.21

出所: IBGE / SUDECO

表25

工業生産成長率（過去12ヶ月間）業種別

%

業 種 別	1982		1983	
	1月まで	12月まで	1月まで	12月まで
非 金 属 鉱 業	- 6.88	- 3.26	- 2.44	- 15.89
金 属	- 16.96	- 0.78	- 0.83	- 1.38
機 械	- 17.24	- 15.29	- 15.05	- 11.30
電 気 及 び 通 信 機 器	- 18.25	- 3.66	3.37	- 13.00
輸 送 機 器	- 28.17	6.70	- 0.70	- 8.84
紙 及 び 原 紙	- 8.47	4.81	8.14	2.89
ゴ ム	- 14.03	- 1.71	- 7.10	0.41
化 学	- 9.47	2.80	9.02	- 6.22
プ ラ ス チ ッ ク	- 23.09	10.82	10.44	- 10.93
繊 維	- 7.86	4.32	5.07	- 10.30
衣 料、靴	- 1.44	3.00	3.88	- 10.83
食 品	0.97	0.90	3.02	4.29
飲 料 水	- 6.78	- 5.98	- 2.16	- 7.67
煙 草	1.85	- 1.16	2.35	- 2.87
薬 品	- 0.97	1.97	1.74	- 5.44
香 料、石 ケ ン	0.57	- 2.83	2.06	- 1.51

出所：IBGE / SUDESUL

破産などがみられた。

耐久消費財の生産は他の部門に比して落ちこみ方はひどくなかったが、それでも83年12月の過去12ヶ月実績は(-)5.02%のマイナス成長であった。この部門の中では食品工業のみが生産を拡大している。

非耐久消費財の方は、代表的な業種としての自動車工業が83年の2月及び6月と増産を記録したあと下降し、12月には(-)3.24%に落ちており（注：自動車工業を含む輸送機器全体では(-)8.84%の下降）、家電製品等を含む全体で年間(-)5.21のマイナス成長に終わっている。

中間財もまた例外ではなく、他の部門にみられたのと同様の傾向を辿った。ここでも政府の予算削減が影響しており、鉄鋼や化学製品の輸出増も全体的な生産減を防ぐことは出来なかった。

生産減少がひどかったものとしては非金属工業(- 15.89%)、電気及び通信機器(-13.0%)、機械 (-11.2%)、プラスチック (- 10.83%)、繊維 (- 10.30%)、輸送機器 (-8.84%) 等があり、逆に生産を増加した部門としては食品 (+4.29%)、紙 (+2.87%)、ゴム (+ 0.4%) 等がある。

ロ) 南部地方における1983年の工業活動状況

上にみた1983年度の工業全般の活動状況の中で南部地方も同様の傾向にあり、生産の減少を余儀なくした。ペッツリオ・ヴァルガス経済研究所と南部地方開発庁が共同で行った工業調査の結果によると、1983年は年間を通じて生産を低下しており、生産を増加したのはごく一部の業種に止まった。

部門別にみると生産がもっとも大きく後退したのは全国の場合と同様に資本財部門で、建築部門がこれに次ぐ悪い業績であった。最近数年間にみられた公共及び民間部門の投資減少をその理由としている。このため国内に

おける発注の減少のほか金利の上昇による金融コストの増加、資材価格の上昇に大きな影響を受けている。このほか海外への輸出に対しては輸入諸国における自国産品の保護主義、83年2月に行なわれたクルゼイロの大巾切下げにより外国融資を受けた企業の外債の増加、また資本財部門を構成するトラクター及び農機具部門では、農業融資枠制限の影響を受けたほか、5月末の洪水による農作物の被害、農業者の収益減少による購買力の低下等が必要減少の要素として作用した。この様な状況の中で資本財工業部門では設備更新のための投資が行なわれておらず、耐用期限外のものが増えているため今年の新しい生産サイクルに深刻な影響を与える見通しである。

この様に多くの制約事項にかかわらず、下半期には資本財部門に活気を与える一連の要素として夏収穫の開始、大豆及び加工品の国際相場の好転、国内市場におけるとうもろこし価格の値上り等があり、また農機具の購入融資の再開などによって一息ついた形となっている。

資本財に次いで不振を極めた建築材料部門も公共投資削減の影響をまともに受けた部門であり、セメント、建

表26

南部地方工業に対する開発銀行融資

工業部門	1977年を基準とした実質金額 Cr\$ 1,000			対 比 %	
	1981	1982	1983	82/81	83/82
新しい工業部門					
非金属鉱業	78,519	52,674	59,282	- 32.7	12.6
金属	333,727	267,526	240,140	- 19.8	- 10.2
機械	157,486	91,761	228,501	- 41.7	149.0
電気・通信	137,040	64,662	19,328	- 52.8	- 70.1
輸送機器	66,130	36,387	21,414	- 45.0	- 41.2
紙、原紙	122,442	219,935	325,922	79.6	48.2
化学	312,313	192,616	255,212	- 38.3	32.5
ゴム	18,633	12,236	7,341	- 34.3	- 40.0
プラスチック	37,515	38,989	59,956	3.9	53.8
伝統工業部門					
木材	220,123	93,157	114,342	- 57.7	22.7
家具	91,912	124,890	71,076	35.9	- 43.1
皮革	10,213	13,141	26,517	28.7	101.8
薬品	4,670	2,586	8,199	- 44.6	217.1
化粧品、石ケン	-	4,150	10,436	-	151.5
繊維	158,732	41,996	44,342	- 73.5	5.6
食品	484,248	238,963	226,051	- 50.7	- 5.4
衣料、靴	62,281	136,308	181,738	118.9	33.3
飲料	8,811	15,568	6,493	76.7	- 58.3
煙草	5,428	10,281	3,825	89.4	- 62.8
印刷出版	49,107	12,548	5,846	- 74.5	- 53.4
その他	29,543	46,688	1,752	58.0	- 96.3
計	2,388,873	1,717,062	1,917,713	- 28.1	11.7

出所：DESEMPENHO DA ECONOMIA DA REGIÃO SUL

築用プラスチック材料、木材及び塗料関係の工場がとくに大きな被害を受けた部門であった。

中間財部門では資材コストの上昇のほか、その需要先の多くが工業界自身であり、これが不況の中にあつたため良好な結果を期待すべくもなく停滞した。中間財部門の生産は各工業の原料ストックの形成、又はストックの増減に深く関連しているが、83年下半期には工業界の全般がストック形成を控えたため需要が減退し、業績に影響したものである。

非耐久消費財の成果も又期待に反するものであった。その活動水準は農産物資材需要、都市の雇川率、給料生活者の購買力につよく関連している。83年の場合、雇川率は年間を通じて減退し、給与圧縮政策のもとで減退した購買力は深刻なまでに低下し、これが非耐久消費財の需要に反映した。

南部地方では家具及び金属加工品を基礎的な業種とする耐久消費財は年間の1、2、3四半期とも停滞を続けた。ここでも失業率の増加、消費者金融に対する金利の上昇、給料生活者の購買力の低下等が業界不振の原因となっている。第四半期は例年の傾向として生産の増加をみている。

工業活動の変化を南部地方の開発銀行が行った工業融資を指標としてみると、機械工業部門が融資額を増加したあとがみられる。これは前述のとおり大豆及加工品の国際相場の好転、とうもろこしの国内価格の上昇による活気がトラクターを中心とする農業機械の需要を増加させたための現象であった。

このほか紙及び原紙工業、化学、衣料、靴部門も開発銀行融資を多く受けた部門であった。これらの部門は海外輸出を主体とする部門であるが、海外での市況がよく、その需要に支えられた生産を反映したものである。他方、各州の開発銀行融資では南部地方の3州とも1981年に比して実質価値で融資額の減少がみられた。また前年の1982年と比較するとパラナ州では実質価値で1.9%、サンタ・カタリーナ州では42.8%の増加、リオ・グランデ・ド・スール州だけが前年比減少の融資実績であった。

各開発銀行の融資推移は表26の通りである。

1.2.3 農牧部門

農業部門は長期にわたって南部地方の経済を支えて来た部門であり、地方内の所得形成に24%の比率を占める

表27 南部地方の農業生産高に占める主要作物の比率 %

作物別	1960	1970	1980
大豆	1.6	6.0	32.2
とうもろこし	15.7	15.1	19.7
米	11.0	10.6	10.5
小麦	9.5	13.4	7.9
コーヒー	31.4	23.2	4.6
マンジョカ	5.9	6.4	4.2
フェイジョン	10.3	9.0	4.0
煙草葉	1.9	2.9	3.0
綿	2.8	4.5	3.0
ジャガイモ	3.5	3.1	2.6
その他	6.4	5.8	8.3
計	100.0	100.0	100.0

出所：REGIÃO EM PERSPECUTIVA

ほか、地元の工業活動も農牧部門に関連しているものが多く、農牧産品を原料とする食品工業や農牧部門への機械や資材を供給する工業が主体を占めている。

牧畜部門も農業部門と並んで地域内経済に重要な位置を占めており、牛、豚、鶏及び羊の生産では全国的にも重要な生産地帯に数えられる。

採集産業は木材の搬出を除いて見るべきものはなく、少量のマテ茶が採集されている程度である。木材の搬出も50年代までは盛んに行なわれてきたが、農業前線の拡大による森林の伐開によって森林地帯は輸送の困難な地域だけが残され、木材搬出活動を鈍らせている。最近はこれに代って植林活動が盛んである。

農作物の中では次の主要10品目が農業生産高の90%を占めており、この中には全国的に1~2位の規模にあるものが多い。

上記作物の中、コーヒー、とうもろこし、米は1960年代の代表的な作物で南部地方農業生産高の50%を占め、中でもコーヒーは単独で30%前後を占めている。70年代に入ると霜害によるコーヒー地帯のサンパウロ、ミナス・ジェライスやセラード地帯への移動から、コーヒーに代って大豆が登場し、とうもろこし、米と合せ今日の3大品目を構成している。

最近の統計に欠けるが農業生産高は70~79年に7%の成長をみており、この中76~77農年に最高の生産をあげている。80年代に入ってから毎年の天候不順に見舞われているため生産が下降しているものが多い。

牧畜部門は牛をベースとした生産活動が続けられているが、こども大きな変動はなくむしろ停滞気味である。

各作物別の生産状況については2、3主要農産物の生産現況を参照されたい。

1.2.4 南部地方の輸出

南部地方ではブラジルの輸出に大きな比重を占める大豆及びコーヒーを中心とした農産物、牛肉、とり類（鶏肉や七面鳥）、靴を中心とする工業加工製品など多様な輸出活動が行なわれて来たが、最近ではリオ・グランデ・ド・スール州に設置された第3石油化学基地が操業に入っており、その製品も同地方の新しい輸出製品に加えられることになる。このため同地方の輸出動向は国の輸出成果に大きな影響を持つ部門であり、農・工業活動と合せて注目する必要がある。

83年度における南部地方の輸出概況をみる前に同年のブラジル貿易を概観すると次の状況にあった。

前年の低調な輸出実績に引き替え83年以降の輸出は順調で、IMFとの間に約定した貿易黒字目標（83年60億ドル、84年90億ドル）を夫々突破した。この成果はブラジルが直面する対外債務軽減のための重要な手段として經常収支の赤字減少、その基本となる貿易黒字の増大という絶対目標として達成されたものである。そのためには極度の輸入抑制という一部の産業界を犠牲とした政策が取られて採用された結果ではあったが、幸いにも国際市場環境はブラジルにとって有利に展開し、長期のリセッションよりの脱却、一部農産物、とくにブラジルが主力とする大豆及びその加工品、コーヒー、ココア、オレンジ・ジュース等の国際相場の好転などが影響したのも大きな理由であった。83年の輸出はこの様な背景の中で前年に比して8%増、輸入は20.5%減（いづれも金額）という結果を得た。

83年度の輸出を促進した貿易政策としては、年頭の2月に行なわれたクルゼイロの対米ドル平価大巾切下げがあげられる。インフレにおけるブラジル通貨の対米ドル平価の調整は、国内インフレの進行に応じて毎月小刻みに行なう浮動為替制度によっているが、前同大巾の調整が行なわれた79年12月以降82年末までの調整率が実勢のレートを下廻りクルゼイロの過大評価となっていたため、一挙に30%平価を切下げて現実に合せた調整を行ったのが83年2月の大巾切下げであり、その効果としてブラジル製品の海外における競争力を高めた一方、輸入コストを高めて輸入を抑制するのにも役立った。大巾切下げがあたえる逆の効果として国内インフレへのプレッ

シャーとしての作用が避けがたいが、これを敢えて行ったのは対外債務という目前の問題を解決する手段として前年末IMFに救援を求めたブラジルにとって、同国際機関との間に約定した貿易黒字の目標達成のためには避け得ない方法であったと思われる。

この大巾切下げによってとくに恩恵を蒙ったのは加工製造品目の消費財で靴、繊維製品、工業原材料等であった。農産物の場合は前提として国内生産が国内消費を賄ってなお輸出余力があること、世界市場の需要が高いことなどがあり、また資本財については価格そのもの以上に買手側の経済的能力、長期融資の有無等が先買契約をきめる鍵となるので大巾切下げの恩恵はそれ程大きなものではない。

この大巾切下げの補足措置として大蔵省は、従来輸出企業に対する恩典としてあたえられてきた輸出金融の量を25%減額することを決定し(中銀決議第674号)、大巾切下げによって増大する輸出業者のクルゼイロ貨による収入が中銀が管理する金融予算の枠を越えることがないように措置した。

しかし、上記大巾切下げの効果も数ヶ月を過ぎたあと国内インフレの加速に加え、国際市場におけるドルの強気によってドルに平行するクルゼイロ貨の価値がヨーロッパ通貨に対して再び高まり、早くもその競争力を弱めたため本来目的とした効果は期待ほどではなかった。

83年における輸出傾向としては少数の市場に集中し、工業先進国に強く依存する形となったのを特徴としている。とくに米国に対する輸出割合が増加したほか、その他の大型市場としてオランダ、西独、サウジアラビア等への輸出が増加した反面、ラテン・アメリカ諸国への輸出は工業加工度の低い製品に止まっており逆に輸出額を上廻る輸入が行なわれている。これはとくにメキシコ、アルゼンチンを中心とする開発途上国に共通した経済危機が、これら諸国の輸入余力を落したためと解釈される。それだけに少数工業先進国への依存を高めたのは好ましい形ではなく、再度市場の多様化が求められている。

83年の輸出品分類としては基礎製品が前年を4.2%上廻り、輸出総額の39%を占めた。中でもコーヒーと大豆及びその加工品が特に重要な役割りを果たし、国際相場の上昇によって輸出金額を伸ばした。このほか全般に国際市場における主要農産物の価格が上昇し、これが83年外貨収入を良好とする原因を作った。このような農産物価格の上昇は主要生産国における減産がその背景として作用している。

工業製品の方は前年比11.4%増という良好な成績を残した。工業製品の中では半加工品の増加がいちじるしく、82年に対し24.7%の増加であり、完成品も輸送機器における(+)-16.1%、機械器具の(-)9.1%等主要品目の前年比輸出減少にかかわらず全体では9.5%の増加であった。

工業製品の輸出対策としては工業製品税の11%を税務上のクレジットとする恩典を設定した。これは70年代の工業製品輸出の振興を促した制度であったが、一種のダンピングとして輸入国側の批判があったため79年末のクルゼイロ平価の大巾切下げの際中止されていたものであり、これを再び復活したものである(中銀決議674号)。このほか補助クレジット制度(Credito Subsidiado)が設定された。この恩典制度は別名“内部draw-back”制度と呼ばれるもので、83年3月28日付の大蔵省布告第68号をもって実行に移されたものである。この制度は輸出に向けられる製品用資材を製造する企業に対し、これらの企業はトレーディング・カンパニーを通じて資材の製造に必要な原材料を輸入価格と同等の価格で入手することが出来ることを規定したもので、輸出用製品の原材料を輸入する場合に与えられている恩典を享受出来る制度である。この制度は当初繊維部門のみに適用し、後日他の部門に拡大することとなっている。

他方83年2月9日付中銀決議第811号では、第1次産品に課せられていた輸出税を大部分軽減又は廃止した。また、83年6月29日付CACEX(ブラジル銀行貿易管理局)通告第52号では、draw-back制度にもとづく輸入資材は国産類似品についての検査を不必要とし、輸入資材の使用に対して定められた期間内は国産品と競合出来るシステムとした。この措置は国内資材価格の上昇を押える役目も果たした。

このような各種の恩典措置を行っていく間にも国の外貨事情は依然として悪く、その対策として83年8月1日以降一定の期間内の為替取引を中銀が集中管理することを決定している（通貨審議会決議第851号、及び中銀布告804号）。この措置は外国に対する支払いの優先順位を中銀が決定出来る方法としたものである。

南部地方の輸出

以上のような情勢下にあった83年度の輸出を南部地方にしぼってみると前年比次のような成果であった。

表28 南部地方の輸出83年度前年比 %

分類	前年比増減	全体に対する割合	大豆及加工品が占めた割合
基礎財	13.1	55	63
半加工品	(-) 12.1	6	50
加工品	20.0	39	15

出所：DESEMPENHO DA ECONOMIA DA REGIÃO SUL

上表にみられる通り輸出品の中では基礎財の割合が全輸出品の55%を占めて大きく、加工品がこれに続いている。ブラジル輸出のトップに立つ大豆及び加工品は南部地方輸出の中でも最大の項目であり、基礎財の中で63%、半加工品の50%、加工品15%を占めた。この輸出規模は前年に比して重量で17.9%、金額で19.7%の増加であった。

表29 大豆及び加工品の輸出83年度前年比

区分	重量	金額
大豆 (豆)	148.8 %	139.0 %
大豆 粕	8.7	10.8
大豆 油 (粗油)	(-) 31.2	(-) 30.9
〃 (精製油)	102.7	88.3
計	17.9	19.7

出所：DESEMPENHO DA ECONOMIA DA REGIÃO SUL

パラナ州の大豆輸出はパラナグァ港 (Porto de Paranaguá) を通じて行なわれるが、83年には10月の末にすでに前年度の総取扱い量を越す状況にあり、港湾施設がフルに利用されている。

サンタ・カタリーナ州では冬期の洪水が輸出品の生産や輸送に大きな障害となって影響した。州内の工業地帯ではそのため長期間操業中止を余儀なくしており、とくに繊維部門がもっとも大きい被害を蒙った。他方、州の主要輸出品目である冷凍ブロイラーや七面鳥の国際相場が悪く、前年に引き続いて輸出不振の年を繰返した。他の重要輸出品目である煙草葉も悪く、前年をやや上廻ったものの81年には遠く及んでいない。この傾向は他の2州についても同様で、この3年間では1981年がもっとも良好な成績を残している。

南部3州の中ではリオ・グランデ・ド・スール州の輸出が重量金額共もっとも大きく、83年の輸出増加率ももっとも高い記録を残している。とくに工業加工品は量で176%、金額で6.7%という大巾な増加を示しているのが注目される。これは同州で70年代より重要な輸出品目となっている靴の輸出が大きく貢献したものである。83年は原料の牛皮が不足して国内価格が国際価格を30%も上廻るといふ異常な事態が発生したにもかかわらず、靴の製造と輸出は順調に行なわれた。ノーボ・ハンブルゴ市 (Novo Hamburgo) を中心とするリオ・グランデ・ド・スール州とフランカ (Franca) 市を中心とするサンパウロ州の靴は、その主要市場を米国として毎年大型の輸出

表30

南部地方の輸出(重量)

1,000トン

区 分	基礎製品	半加工品	加工品	その他	計
リオ・グランデ・ド・スール州					
1981	4,696.0	757.7	289.4	138.1	5,881.2
1982	3,873.0	453.4	342.4	163.0	4,831.8
1983	3,997.4	371.3	945.1	222.5	5,536.3
パラナ州					
1981	4,020.9	474.1	1,018.5	92.9	5,606.4
1982	3,463.5	215.5	858.7	92.7	4,630.4
1983	4,468.6	175.0	737.7	104.8	5,486.1
サンタ・カタリーナ州					
1981	886.4	127.4	451.1	4.5	1,469.4
1982	1,070.6	42.2	517.5	4.7	1,635.0
1983	1,398.2	74.7	492.0	3.3	1,968.2
南部地方計					
1981	9,603.3	1,359.2	1,759.1	235.4	12,957.0
1982	8,407.1	711.2	1,718.6	260.3	11,097.2
1983	9,864.3	621.0	2,174.8	330.5	12,990.6

出所: DESEMPENHO DA ECONOMIA DA REGIÃO SUL

表31

南部地方の輸出(金額)

100万ドル

区 分	基礎製品	半加工品	加工品	その他	計
リオ・グランデ・ド・スール州					
1981	1,485.1	338.4	942.3	64.4	2,830.2
1982	1,211.7	211.1	803.7	35.2	2,261.7
1983	1,256.0	180.9	1,179.3	45.3	2,661.5
パラナ州					
1981	1,110.9	250.3	534.9	31.9	1,928.0
1982	765.2	106.7	406.3	19.0	1,297.2
1983	1,012.4	80.0	349.5	21.1	1,463.0
サンタ・カタリーナ州					
1981	424.3	68.0	446.6	7.1	946.0
1982	470.9	22.9	352.9	2.2	848.9
1983	498.8	38.7	346.6	1.7	885.8
南部地方計					
1981	3,020.3	656.8	1,923.8	103.3	5,704.2
1982	2,447.8	340.7	1,562.9	56.4	4,407.8
1983	2,767.2	299.5	1,875.5	68.1	5,010.3

出所: DESEMPENHO DA ECONOMIA DA REGIÃO SUL

を続けているが、これが米国の業界を圧迫したため米国政府はブラジル製品の輸入に対する課超金を設定し、これがブラジル製品輸出の大きな障害となっていた。

83年には長期にわたったこの課超金が撤廃されておりブラジルの靴業界にとって大きな朗報となっているが、これが影響して輸出を伸ばしたのも工業製品輸出増加の要因となっている。

このほか、セルローズ業界や、最近操業を開始したばかりの石油化学工業もすでに輸出部門に参加しており、今後この部門における輸出拡大が期待されている。

これらの好調な輸出に反して同州の重要輸出面としての煙草葉は量的に10%の輸出増を記録したにもかかわらず、国際相場の下落から前年比輸出金額を落している。国際相場の下落は米国のストックが過剰になったためとされている。

リオ・グランデ・ド・スール州の主力輸出商品である大豆及び加工品は（豆）と大豆油において前年を上廻ったが、大豆粕は前年の輸出を下廻った。

83年はこのように比較的順調な輸出が行われたが、83年末の12月20日付通貨審議会の決定によると、従米中銀決議 674号によって輸出企業に与えられてきた輸出金融に対する補助が大巾に切下げられることとなった。すなわち、従米この融資はコレソン（通貨価値修正率）の60%+3%を年間の金融諸掛りとしていたものであるが、84年よりはコレソンの100%+10%の利息に改められ、事実上補助が撤廃されることとなった。

この輸出金融に対する補助の撤廃にかかわらず84年も又輸出黒字目標の90億ドルは突破されている。

1.2.5 輸送インフラの状況

1) 概要

南部地方は国内でも南東地方に次いで開発度の高い地方であるため、その輸送システムも整備された地域の1つとなっている。

道路網の延長距離数は1982年度の統計で333.7千kmとなっており、全国道路延長距離数の23.6%を占めている。この比率は1970年には28.6%であったのでこの10年間に全国比率を縮めたことになるが、これは最近中西部地方や北部地方の農業前線の開発に伴う道路建設がすすんだため、既開発地帯の比率が減少したものである。

南部地方の道路網はその延長距離数では南東地方に劣っているが、全体の面積が狭小であるため単位面積あたりの距離数にすると、南東地方の49km / 100km²に対し、南部地方は59km / 100km²で、100km²あたり10km高い指数となり道路密度の高さを示している。ちなみに全国平均の単位面積あたり道路距離数は17km / 100km²である。

一方、鉄道は7,003kmの延長距離数で全国鉄道距離数の24%を保有している。この鉄道路線の規模は東北地方の6,733kmをも上廻るものであるが、面積は東北地方の3分の1にあたることから密度の差は3倍となる。

港湾施設については輸出入統計に表われる港はパラナ州4、サンタ・カタリーナ州7、リオ・グランデ・ド・スール州12で、1983年にはブラジル輸出の中で重量で12%、金額で27%を占めている。ここでも南東地方の港湾規模には劣るが、パラナ州のパラナグァ港やリオ・グランデ・ド・スール州のポルト・アレグレ及びリオ・グランデ港など国内でも有数の港を備えている。

このように南部地方の輸送態勢は国内他の地域に比して整備されているものの、いまだ不備な面が多く、これが地域開発の一つの障害となっている点も認めないわけにはいかない。現存する問題点としては道路網が圧倒

表32 南部地方の道路延長距離数推移

年 度	距離 km
1942	74,229
1952	77,643
1960	135,347
1970	297,671
1982	333,737

出所：ANUÁRIO ESTADÍSTICO

的に多く、鉄道網が極めて小規模で発達していないという構造的な問題のほか、道路輸送面では道路延距離数の中、舗装道路の割合はわずかに6%弱で、大半が舗装前の状態にあるため雨期の交通を困難としており、また毎年雨期に入ると河川の氾濫による道路の決壊が頻繁におこり、輸送の中断を余儀なくしていることなどがあげられる。

各種の輸送手段の中でもっとも重要な役割を果たしているのは道路で鉄道、水路、空路がこれに続いている。

道路は南部地方でもっとも延長距離数が長く、各生産地帯に通じる道路網を形成しているので多く利用されている輸送手段である。鉄道は建設の歴史は古いが重要性は薄くあくまで二次的な立場を脱していない。従来、南部地方の鉄道は奥地の入植地と海岸の港を結ぶためと、南東地方の市場に連結することを目的として建設されたものであったが、昨今の食糧生産の増大と生産地帯の奥地移行（セラード地帯）に伴ない穀類の長距離輸送の必要が生じており、大量輸送による輸送コストの軽減を目的とした鉄道建設計画が輸出回廊計画の一部として企画されている。

水路輸送は海岸の港湾を中心とする遠洋航路が大半を占め、沿岸航路、河川航路は道路の発達に伴ないその重要性を失ないつつある。

各輸送手段の状況は次の通りである。

ロ) 水路輸送

現在行なわれている水路輸送は海上輸送を重点とし、内陸の河川輸送はほとんどその重要性を失っている。

ブラジルの沿岸航路による海上輸送は植民地時代の重要な輸送手段として用いられ、南部地方の海岸線ではパラナ州のパラナグァ (Paranaguá)、アントニーナ (Antonina)、サンタ・カタリーナ州のサン・フランシスコ・ド・スール (São Francisco do Sul)、フロリアノポリス (Florianópolis)、ラグーナ (Laguna)、リオ・グランデ・ド・スール州のポルト・アレグレ (Porto Alegre)、リオ・グランデ (Rio Grande) 等の港が利用されてきた。しかし、これらの海岸線がブラジル植民地時代の中心となった東北地方から遠距離にあったことや、当時ヨーロッパで求められていた熱帯作物が南部地方になかったことから大きな関心が持たれぬまま長年月を経過しており、その間、沿岸航路がとくに発達した時代を経験していない。

他方、パラナ州よりサンタ・カタリーナ州の南部にかけた狭い海岸線は、海岸山脈が障壁となって奥地との連絡がなかったことも海岸地帯の発展を抑えた理由の一つとなっている。これらの港町の中でパラナグァ港だけはグラシオーサ (Graciosa) 道路を通じて高原と連絡していた。また浅瀬が連続するリオ・グランデ・ド・スール州の海岸は人が住む条件下になく、長期にわたって放置され、18世紀の終り頃にリオ・グランデ港の近くに干肉工場が出来たことや、更に1世紀後シノス (Sinos)、ジャクイ (Jacui)、カイ (Cai)、グラバタイ (Gravatá)、イタジャイ (Itajaí) 及びイタボク (Itapocú) 各盆地にヨーロッパ移民が入植した頃になって始めて海岸地帯に村落の形成がみられるようになり、これら入植地と海岸線間の輸送に始めて河川輸送が用いられるようになった。

これら大西洋に注ぐ河川は奥地のパラナ川やウルグァイ川の支流のように大きなものではないが、上記のように奥地方への入植、村落の形成、生活物資や生産物の輸送には大きな役割を果たしており、19世紀の中期には商船隊の組織や造船所の建設などが行なわれている。またこの頃、ジャクイ (Jacui)、リオ・パルド (Rio Pardo) 及びカショエイラ (Cachoeira) 各河川の周辺に農産物の取引所も建設されている。これらの地帯をヒンターランドとする天然港のポルト・アレグレはこの頃に発展の基礎を作っている。

サンタ・カタリーナ州の海岸地帯では海岸に向かって小さな河川が注いでいるが、中でもイタジャイ川 (Rio Itajaí) がこの地方の経済開発に大きな役割を果たした河川である。その航行可能区間は短い河口近くのブルメナウ (Blumenau)～イタジャイ (Itajaí) 間の区間がとくに重要である。この区間は長期にわたってイタジャイにいたる

唯一の交通手段であった。

奥地方の河川は水量の豊かなパラナ川、ウルグァイ川とその支流によって構成されているが、急流が多く水が発電のポテンシャルを持つ割に輸送に利用出来る河川は少ない。

前世紀の終りより今世紀の始めにかけて建設された鉄道により、河川輸送は鉄道に切り替えられその重要性を失っている。

ハ) 鉄 道

最初南部地方に鉄道が敷設されたのは1874年のことで、すでに一世紀以上が経過している。その後今世紀の始めにかけて現在ある鉄道網の大部分が建設された。当初鉄道建設の目的はリオ・グランデ・ド・スール州を中心としてすすめられた植民に伴ない、これらの植民地帯と海岸地帯の港を連結することにあつた。それまで行なわれてきた河川輸送が距離的に制約され、農産物を輸送するのに極めて不備な輸送手段であったことを改めることを目的としたものであつた。

パラナ州のパラナグァ(Paranaguá)やリオ・グランデ・ド・スール州のリオ・グランデ(Rio Grande)港のようにヒンターランドとの連絡を道路輸送によっていた港も、輸出農産物の搬出のためには輸送手段が不足し鉄道の必要性が生じていた。

最初に建設された鉄道路線はパラナグァ(Paranaguá)、インビツバ(Imbituba)、ポルト・アレグレ(Porto Alegre)及びリオ・グランデ(Rio Grande)を起点として奥地に向う路線であつた。この中パラナグァ港から奥地に向う鉄道はパラナ鉄道の名称で1884年にクリチーバに達し、その後外国移民が大量に人植したポンタ・グロッサ(Ponta Grossa)やリオ・ネグロ(Rio Negro)まで路線を伸ばしている。この鉄道の建設によってパラナグァ港のヒンターランドは拡大し、マテ茶や木材の輸出を増大した。

サンタ・カタリーナ州の南部では“ドーナ・テレザ・クリスチーナ鉄道(Estrada de Ferro Dona Tereza Cristina)”がインビツバ(Imbituba)港と奥地の石灰地帯を連結している。

リオ・グランデ・ド・スール州ではこの時代に二つの鉄道が奥地に向っている。一つはポルト・アレグレより中央部の低地帯に向い、又リオ・グランデ港を起点とした鉄道はカンパーニャ(Campanha)を通して奥地に向いカセケ(Caceque)で上の路線と合流している。

ジャクイ(Jacui)や高地方の植民地帯は鉄道の敷設によって、それまで行なわれていた採集産業や自家食糧の生産に止まっていた農耕形態を商業的農業形態に変革した点、地方経済の発展に大きく貢献しており、これらの中に今日国内有数の煙草葉栽培地帯のサンタ・クルス・デ・スール(Santa Cruz de Sul)地方なども含まれている。

またカンパーニャ(Campanha)地方では牧場地帯への鉄道の拡張により、それまで港のリオ・グランデやペロッタス(Pelotas)で行なわれていた乾肉工業が奥地で行なわれるようになったほか、冷凍工場も奥地に設置された。

鉄道の建設は、その終着点かつ積卸港としてのポルト・アレグレやリオ・グランデの都市構造を拡大するが、とくにポルト・アレグレは従来より水上輸送面で果していた重要な役割に加え、鉄道建設によってその重要性を増加し、南部地方の政治、経済社会面での中心都市となる案地を作っている。

また、この時代(今世紀の始め)には南部地方の鉄道を南東地方の鉄道に連結する工事が行なわれており、サンパウロ市～ポルト・アレグレ市間の鉄道連絡が可能となり両地方間の交易に重要な役割を果たした。

前世紀の末より今世紀の始めにかけて集中的に建設された鉄道建設も、その後に出現した道路網の前にその価値を次第に落し、以後今日にいたるまで大きな変化をみていない。

今世紀に入って特に進展をみた鉄道としては、コーヒー産業の発展に平行したサンパウロ州よりパラナ州北部

に入った鉄道（旧称サンパウロ～パラナ鉄道）で、1940年にパラナ州北部のコーヒー産業の中心都市ロンドリーナ(Londrina)に到達している。この路線はその後延長されアプカラナ(Apucarana)、マリंगा(Maringá)、ジュサラ(Juçara)を通過し、最近ではシアノルテ(Cianorte)にいたっている。

また、ごく最近の工事としてはモンテネグロ(Montenegro)～マフラ(Mafra)間の建設で、ポルト・アレグレとブラジリアを結ぶ（サンパウロ経由）重要な区間であり、1969年に竣工した。

鉄道の管理組織としては南部地方の鉄道はすべて国鉄(RFFSA-Rede Ferroviária Federal)の管理下に置かれている。昔は単独の鉄道会社によって各路線が別個に管理されていたが、1959年以降国鉄の傘下に統合されており、現在国内鉄道の80%がその組織下に入っている。

なお、国鉄外の鉄道としては国営鉱山会社のバーレ・ド・リオ・ドーセ(Vale do Rio Doce)社が、ミナス州の鉄鉱石をエスピリト・サント州のビトリア港に搬出するために建設した773kmの路線、この鉄道は日本の技術援助によるユニット・トレン方式が採用されている。北部地方ではアマパ直轄領でマンガン鉱の採掘を行なっているイコミ(Icomi)社が経営する、アマゾン河口のサンターナ港(マカバ市より20km)とマンガン鉱区のセーラ・デ・ナビオ(Serra de Navio)を結ぶ194kmの鉄道、サンパウロ州内の鉄道を別個に管理するパウリスト鉄道5,063km、及び同じくサンパウロ州内の観光都市カンポス・ド・ジョルドン(Campos do Jordão)への登山電車鉄道47kmが国鉄の管理を離れている。

南部地方ではリオ・グランデ・ド・スール州内が国鉄の第13管区、パラナ州及びサンタ・カタリーナ州内が第11管区、このほか小管区として第12及び第14管区がある。

1982年の統計によると南部地方の鉄道延距離数は7,003kmで、1970年の統計による7,125kmより122km減少した距離数となっている。このように鉄道距離数が減少しているのは新規工事が行なわれなかったことのほか、使用価値が無くなった区間の廃線、曲線の矯正等による結果である。1950年の鉄道距離数5,838kmと比較すると、この32年間に1,165km年間平均37kmの増加であった。

南部三州の中ではリオ・グランデ・ド・スール州がもっとも多く、鉄道延距離数の50%以上を占めて各方面に伸びており、南北及び東西それぞれ二本の幹線を基幹線としている。

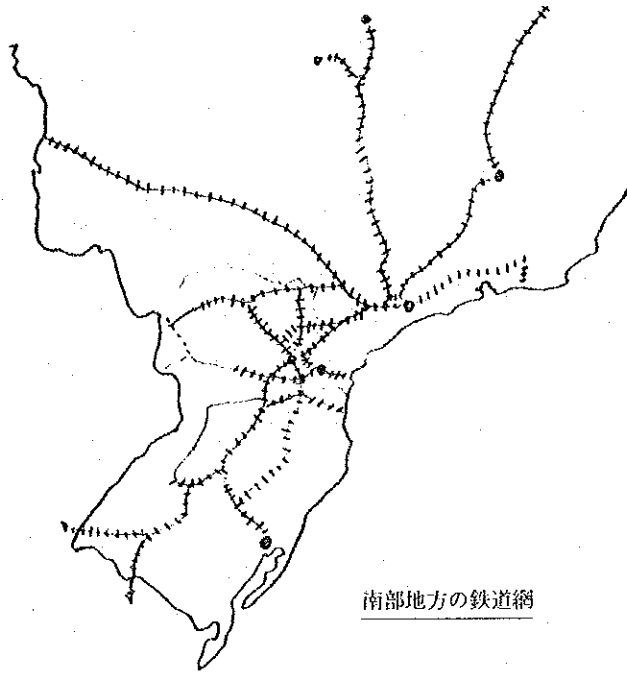
サンタ・カタリーナ州及びパラナ州では東部に集中しており、東西線に比し南北線の距離数が多い。

南部地方の鉄道に関するプロジェクトとしてはパラナグァ港を起点としてパラナ州を横断し、マツト・グロソ州や隣国のパラグアイをも包含する輸出回廊計画があるが、資金事情から計画はすすんでいない。

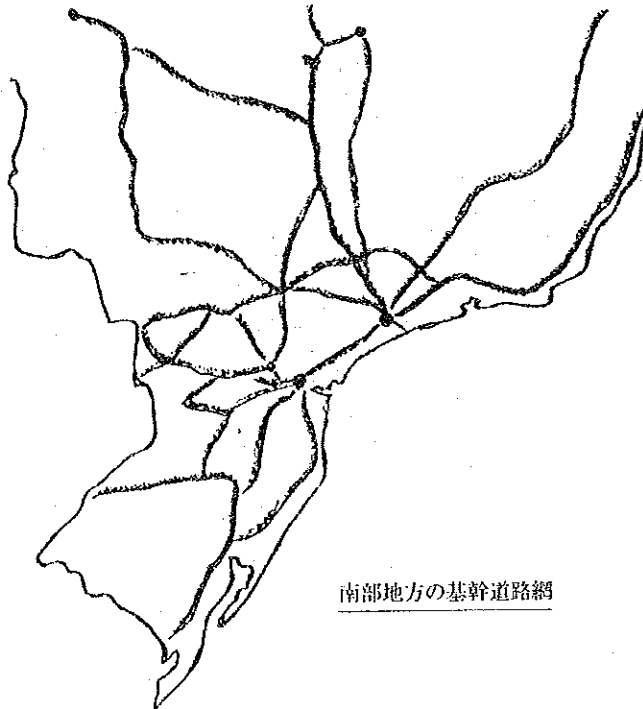
表33 鉄道延距離数

区 分	1980	1981	1982
連 邦 鉄 道			
クリチーバ管区	3,409	3,409	3,409
ポルト・アレグレ管区	3,988	3,655	3,610
小 計	7,397	7,064	7,003
そ の 他 の 管 区	16,194	16,107	16,084
計	23,591	23,171	23,087
パウリスト鉄道	5,054	5,052	5,063
アマパ鉄道	194	194	194
カンポス・ド・ジョルドン鉄道	47	47	47
ビトリア・ミナス鉄道	773	773	773
全 国 計	29,659	29,237	29,164

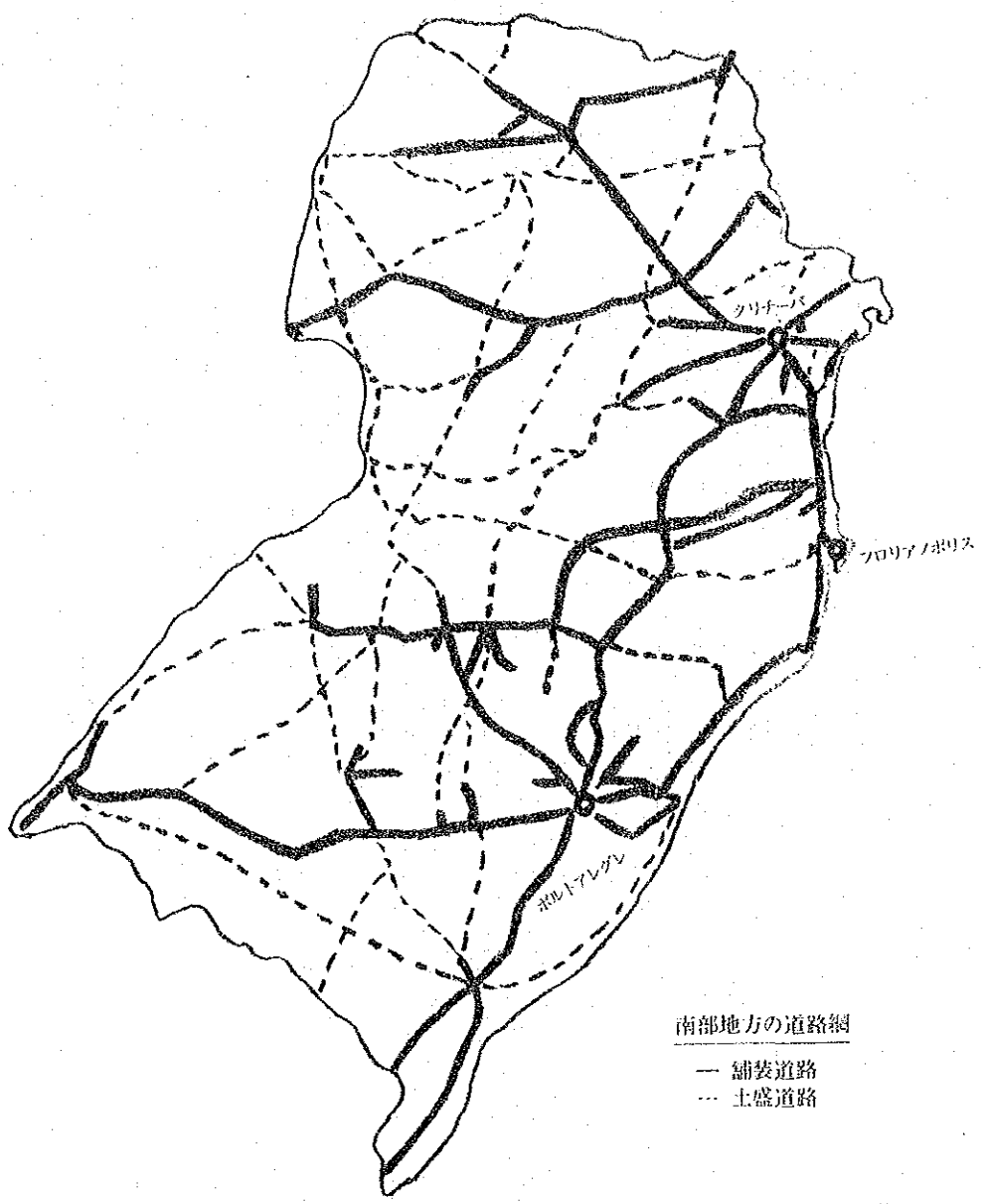
出所：ANUAPIO ESTADÍSTICO



南部地方の鉄道網



南部地方の基幹道路網



南部地方の道路網

- 舗装道路
- - - 土盛道路

二) 道路輸送

地域内や他地方との通商の増加、農業前線の拡大、農工業生産の多様化、外国貿易の増大等から輸送需要は増大し、既設の鉄道ではこれらの需要に応じ得なくなったため、その増設が必要視されていた。しかしながら鉄道の建設には長期の日時と大型の投資を必要としたため、短期かつ少ない投資で建設出来る道路輸送が優先され、早急に道路網の拡大をみるごととなった。

今にして考えると石油危機のあと国の経済に大きな影響を与えた石油副産物を燃料とする道路輸送より、国内に豊富なポテンシャルを持つ電力を利用出来る鉄道建設が優先されるべきであったが、1940年代の安価な石油価格の前にこれを利用する道路輸送が選ばれたことは当然の成り行きであったともいえる。

このようにしてブラジルの道路網は1940年代に急速に拡大され、鉄道に平行する道路から鉄道がなかった地域にも縦横に広がり、いわゆる道路網を作っていった。南部地方も例外ではなくこの時期に多くの道路が建設されている。

この急激なインフラストラクチャーの変化は上述の理由のほか、この頃より急速な発展を遂げた南東地方の工業化に伴い、同地方と国内の他の消費市場間の通商が拡大し、それに応じた輸送態勢が要求されたためでもあった。1950年代に入るとこの傾向は更に強くなり道路建設への投資が強化された反面、鉄道と水路の輸送は全く二次的な立場に置かれ投資対象より外された。このような道路優先の傾向は1957年に自動車工業が設置されるに及んで決定的なものとなった。

1950年から1970年にかけて20年間に道路網が4倍に拡大された反面、鉄道はその延距離数を1950年の6,570kmより7,125kmに、わずか555km延長されたに過ぎず事実上変化していない。道路の増加に合せた自動車数の増加が道路利用の増加を如実に物語っている。

自動車数の増加ははげしく70～80年間の推移をみても、道路距離数が12%増加したのに対し乗用車数は270%、バス132%、トラック48%の増加であった。この統計にみられるように乗用車の増加がいちじるしく、人口あたりの車数でみても1950年頃に188人に1台の割合いであったものが、1960年には100人に1台、1970年が36人に1台、1980年は12人に1台の割合となっている。

各州別ではパラナ州内における道路距離数の増加がもっとも大きく、82年の統計ではパラナ州が南部地方全体

表34 南部地方の道路距離数と自動車数の推移

年度	道路距離数 (km)	乗用車数 (台)	バス (台)	トラック (台)
1952	77,643	64,619	3,553	41,618
1960	135,347	117,347	4,787	71,943
1970	297,671	117,689	9,187	172,550
1982	333,737	1,751,457	21,330	254,500

出所：ANUARIO ESTADISTICO

表35 南部地方の乗用車1台あたり人口の推移

州 別	1950	1960	1970	1980
パ ラ ナ	255	143	47	12
サ ン タ ・ カ タ リ ー ナ	422	190	41	11
リ オ ・ グ ラ ン デ ・ ド ・ ス ー ル	140	72	28	10
南 部 地 方 計	188	101	36	11

出所：IBGE

表36

南部各州の道路距離数の推移

1,000km

年度	パラナ州	サンタ・カタリーナ州	リオ・グランデ・ド・スール州	南部計	全国
1952	26.0	24.9	26.8	77.6	302.1
1960	48.4	30.9	56.0	135.3	476.9
1970	102.4	59.3	135.9	297.7	1,039.8
1982	147.1	86.7	99.9	333.7	1,411.9

出所：IBGE

表37

道路延距離数 (1982年)

州別	舗装済	非舗装	工事中	計
国道				
パラナ	2,850	190	76	3,116
サンタ・カタリーナ	1,807	170	269	2,246
リオ・グランデ・ド・スール	4,820	123	422	5,365
南部地方計	9,477	483	767	10,727
その他の地方	33,041	16,731	4,098	53,870
全国計	42,518	17,214	4,865	64,597
州道				
パラナ	5,881	3,111	1,146	10,138
サンタ・カタリーナ	1,435	2,336	940	4,711
リオ・グランデ・ド・スール	1,961	5,470	698	8,129
南部地方計	9,277	10,917	2,784	22,978
その他の地方	41,864	89,346	9,942	141,152
全国計	51,141	100,263	12,726	164,130
郡道				
パラナ	84	133,737	—	133,821
サンタ・カタリーナ	626	79,149	—	79,775
リオ・グランデ・ド・スール	192	86,244	—	86,436
南部地方計	902	299,130	—	300,032
その他の地方	3,585	879,411	181	883,177
全国計	4,487	1,178,541	181	1,183,209
道路合計				
パラナ	8,815	137,038	1,222	147,075
サンタ・カタリーナ	3,868	81,655	1,209	86,732
リオ・グランデ・ド・スール	6,973	91,837	1,120	99,930
南部地方計	19,656	310,530	3,551	333,737
その他の地方	78,490	985,488	14,221	1,078,199
全国計	98,146	1,296,018	17,772	1,411,936

出所：ANUARIO ESTADISTICO

の44%を占めており、リオ・グランデ・ド・スール州30%、サンタ・カタリーナ州26%の割合となっている。地域別ではパラナ州内のクリチバ市近郊及び北部地域、リオ・グランデ・ド・スール州のポルト・アレグレ市近郊及び州内東北部が交通網のもっとも密集した地域である。これらの中でクリチバを例外としてその他の地域は農牧業の集中地帯であり、そのために生じた人口増加、農業生産の増加、輸送需要の増加、道路の増設となったものである。

道路の種類は国道、州道及び郡道の三種に分けられ、それぞれの管轄を異にしているが、南部地方の基幹道路としての南北線道路及び東西の基本線は中央政府の管轄下に置かれる連邦道路（国道）である。

これらの幹線道路は地方内部や他の地方との間に大量の輸送を行っており、その延距離数は南部地方道路延距離数の3.2%にすぎないが、そのほとんどが舗装されているため年間を通じて交通を可能とする極めて重要な道路となっている。

州道及び郡道は全道路距離数の96.8%を占めて各方面に伸びており、この中州道は州内の重要拠点より国道への連結、郡道はフィーダー道路としての役割を果たしている。問題点としては舗装率が低いことで州道において40%、郡道ではわずかに0.3%が舗装されているにすぎない。

南部地方の国道の中ではBR-116号国道がもっとも重要な国道で、クリチバ〜ポルト・アレグレの南部都市圏をサンパウロ〜リオ・デ・ジャネイロの商工業及び一大消費市場に連結している。

この国道はリオ・グランデ・ド・スール州内でぶどうの産地カシアス・ド・スール(Caxias do Sul)や工業中心地帯のサン・レオポルド(São Leopoldo)、ノーボ・ハンブルゴ(Novo Hamburgo)、ポルト・アレグレ都市圏を通過する。この道路はセアラ州のフォルタレーザ市を起点とし、ウルグァイ国境都市ジャグァロン(Jaguarão)に達する長距離の道路であり、南部地方と南東・東北地方を連絡している。また南部のペロッタス(Pelotas)ではBR-471号に連結してウルグァイとの国境の町シュエイ(Chui)に達し、その連続としてのモンテビデオ、ブエノス・アイレスに通ずる道路に連絡されるので南米を縦断する道路の一部を構成する。この様に重要な道路であるため車輛の交通量は多く、とくに交通が集中するクリチバ市やポルト・アレグレ市の近くでは道路巾を増加して、その対策が行われている。

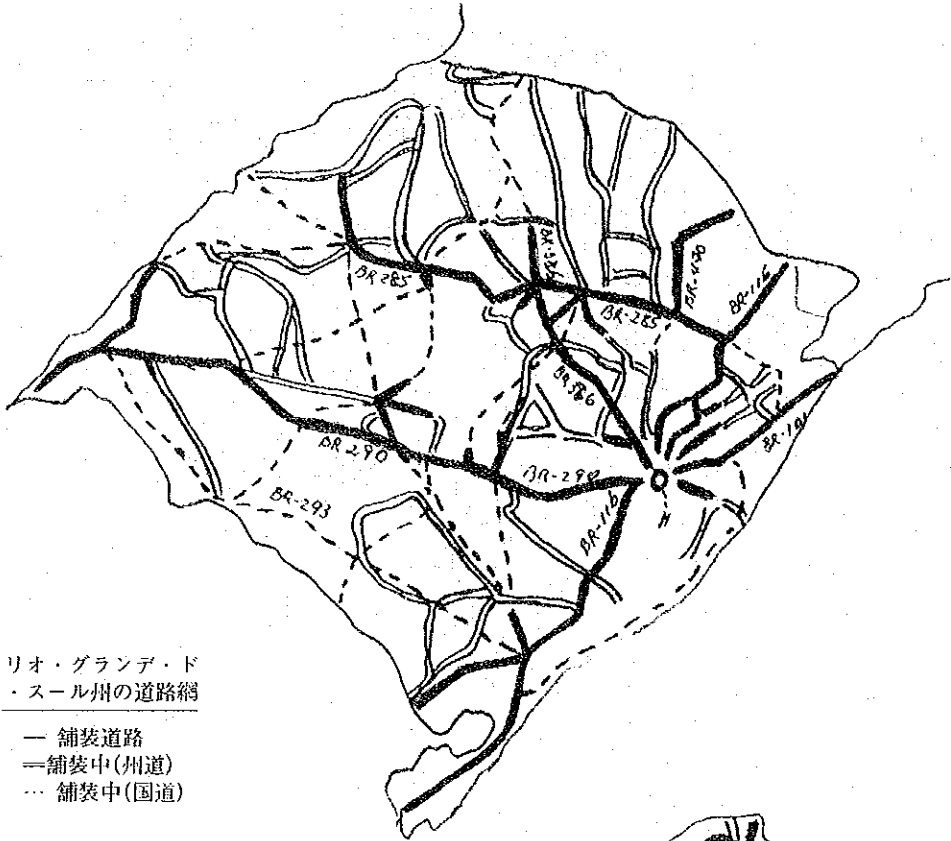
BR-116号線と並んで重要な道路としては海岸線を通るBR-101号線がある。この国道も南部地方より南東、及び東北地方に達するもので、リオ・グランデ・ド・スール州のオソリオ(Osório)市を起点としてリオ・グランデ・ド・ノルテ州都ナタール(Natal)市にいたる長距離の道路である。この道路は南部地方を通過する途中、サンタ・カタリーナ州のツバロン(Tubarão)及びイタジャイ(Itajaí)等の重要な地帯や南部三州の首都を連結している。このうちオソリオ市とポルト・アレグレ市間は都市間交通の渋滞を緩和するための方法として全長95kmの高速道路が設けられている。

南部地方を縦断する主要幹線2本の他は各州の必要に応じた二次的な幹線が建設されており、その多くは東西又は南北幹線と東西線の間にある斜線である。ここではBRの符合を持つ国道のみを見ることにする。

リオ・グランデ・ド・スール州内ではポルト・アレグレ市よりアルゼンチン国境のウルグァイアーナ(Uruguaiana)にいたるBR-290号が特に重要な道路である。この道路は全線が舗装されており、州内の牧場地帯(牛及び羊)としてのカンパーニャ・ガウシャ(Campanha Gaúcha)と呼ばれる地帯や水田地帯を通過する産業道路であるほか、アルゼンチンに通じる陸路としても重要であり、両国間の輸出入経路としても利用されている。またブラジルよりアルゼンチンに向う長距離バス・コースの一つでもある(注:他の一つはウルグァイ国経由)。

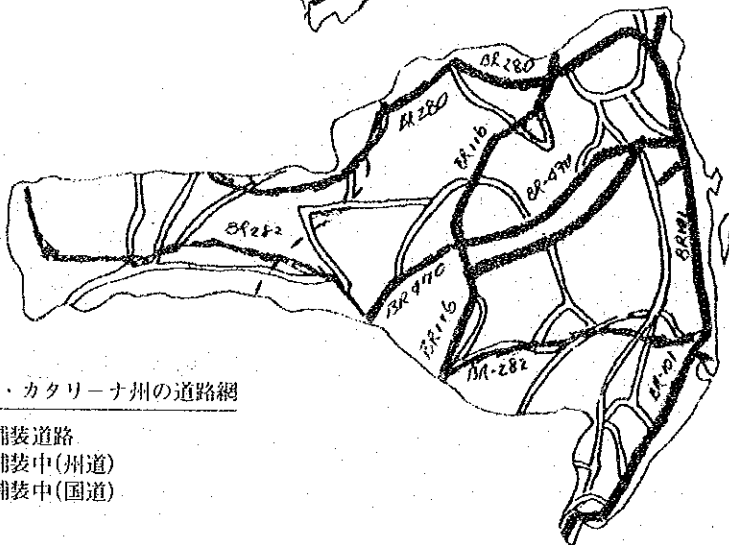
州の南部地方にはBR-293号国道があり、ペロッタスよりウルグァイアーナにいたる。このほか州を横断する道路として重要なものはBR-285号があり、サンタ・カタリーナ州海岸地帯のアラングァ(Araranguá)よりリオ・グランデ・ド・スール州内のサン・ボルジェ(São Borje)にいたっているが、この間バカリア(Vacaria)、

パッソ・フンド (Passo Fundo)、カラジンニョ (Carazinho)、イジュイ (Ijuí)、サント・アンジェロ (Santo Angelo) 等を通してあり、州内の大豆や小麦の生産地帯と州都ポルト・アレグレ間の連絡に役立っている。またバカリアでは BR-116 号と交差するので他地方への連絡も可能としている。このほか州内北部の小麦や大豆の生産地帯を横断する道路として、ポルト・アレグレ市よりサンタ・カタリーナ州西部のサンミゲル・デ・オエステ (São Miguel de Oeste) にいたる BR-386 号線がある (別名プレジデント・ケネディ街道)。



リオ・グランデ・ド・スール州の道路網

- 舗装道路
- - 舗装中(州道)
- ... 舗装中(国道)



サンタ・カタリーナ州の道路網

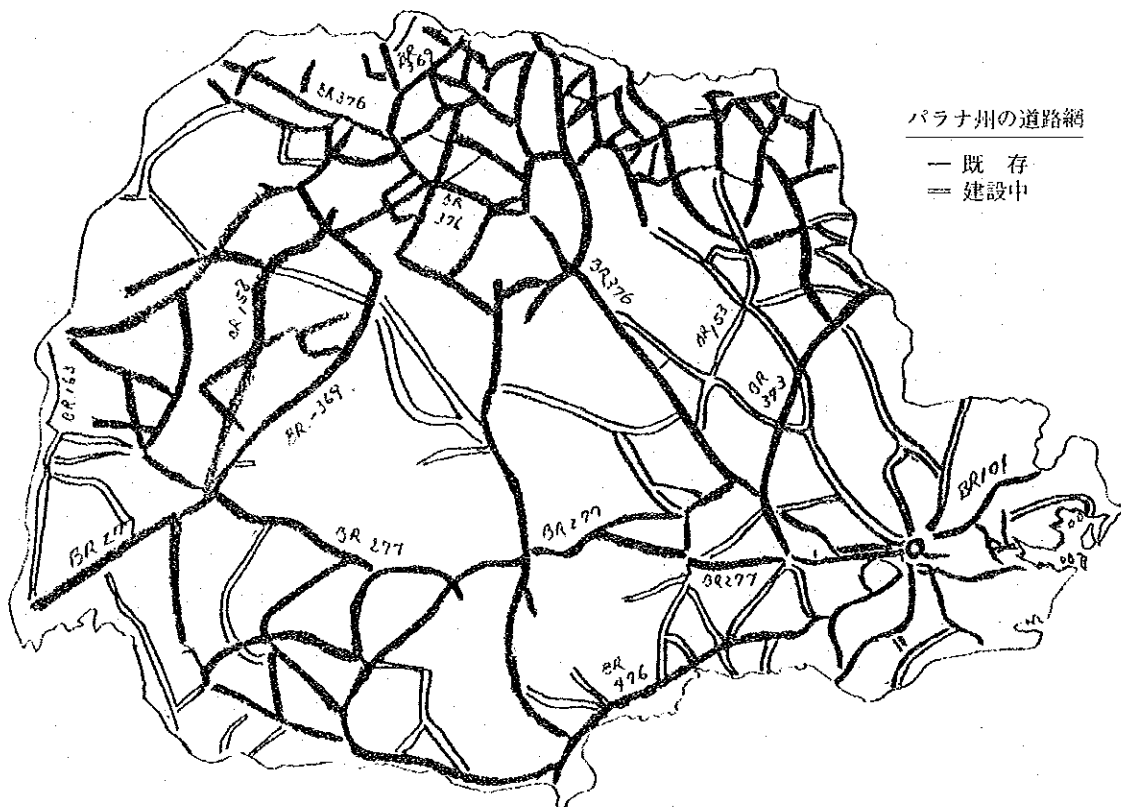
- 舗装道路
- - 舗装中(州道)
- ... 舗装中(国道)

サンタ・カタリーナ州に入るとBR-116号及びBR-101号線が州を縦断しているほか、イタジャイよりモンテ・ネグロ(Monte Negro)にいたるBR-470号がある。この道路はカンボス・ノーボス(Campos Novos)においてフロリアノポリスを起点とするBR-282号線に連結される。上記BR-470号国道はブルメナウ(Blumenau)及びリオ・ド・スール(Rio do Sul)を通過し、サンタ・カタリーナ州北部の重要な工業都市であるイタジャイをBR-116号幹線に連結させる重要な道路となっている。この道路の建設によりサンタ・カタリーナ州内第14管区の鉄道が廃線となった。

首都のフロリアノポリスと州の西部を結ぶBR-282号国道は、カンボス・ノーボスとサン・ミゲル・ド・エステを結んで州西部の農産物搬出を容易としBR-116号及びBR-101に連結している。従来、重要な幹線道路との連絡を持たなかった州都のフロリアノポリスはBR-202とBR-101の交差により交通上も重要な位置を占めるようになった。

BR-280と同様の性格を持つBR-280号の場合は、パラナ州とサンタ・カタリーナ州にまたがり、パラナ州のサン・フランシスコ・ド・スール(São Francisco do Sul)よりジョインビレ(Joinville)を通り、西端のディオニジオ・セルケイラ(Dionísio Cerqueira)に到達する。州内東北部の重要な工業都市ジョインビレはBR-101号が通過する他、BR-280号道路によって中央幹線と又、BR-476号線を経由してパラナ州都のクリチーバ市に通ずる有利な立地条件下にある。

最後にパラナ州内の道路をみると、州内の輸出港パラナグアと最西端のフォス・ド・イグアスー(Foz do Iguaçu)を結ぶBR-277号国道がとくに重要である。この道路は途中、州都のクリチーバを通過したあと工業都市のポント・グロッサ(Ponta Grossa)、農業中心地帯のカスカベル(Cascavel)などの州内主要都市を通過する重要な産業



道路であり、BR-116号線と交差して他地方への連絡も可能としている。この道路は又フォス・ド・イグアスーに世界的な瀑布のある観光地帯を持ち、パラグアイ国とアルゼンチン国との国境に通じている。中でもパラグアイ国との国境を形成するパラナ川(Rio Paraná)に架設された友好の橋(ブラジル側名Ponte de Amizade, パラグアイ側名Puente de Amistad)を通じてパラグアイ国の首都に通じることが出来、内陸国の同国にとって海に通ずる極めて重要な道路となっている。パラナ州の西部に通じる場所から西部道路(Rodovia do Oeste)と呼ばれている。

この西部道路に次ぐ重要な道路としてはマツト・グロッソ・ド・スール州のドウラードス(Dourados)市よりパラナ州のガルバ(Garua)市にいたるBR-376号線が特筆される。この道路はBR-277と交差してクリチーバ及びパラナグァ港に通ずることが出来るため、コーヒーを中心とするパラナ州北部の農産物をパラナグァ港に輸送する役目を果している。パラナ州北部コーヒー地帯の重要道路としてコーヒー道路(Rodovia do Café)の別名がある。

以上のほか重要道路に数えられるものとしてはBR-369号道路がある。この道路は西部のカスカベルよりミナス・ジェライス州ボア・エスペランサ(Boa Esperança)にいたる。この区間の中でジャンダイア・ド・スール(Jandaia do Sul)よりパラナ州北部のアプカラナ(Apucarana)やロンドリーナ(Londrina)を通してサンパウロ州のオウリンニョス(Ourinhos)に到達する区間はすべて舗装されており、この地方で産出する穀類のサンパウロ市場への搬出道路として用いられている。したがって別名穀物道路(Rodovia dos Cereais)と呼ばれている。

パラナ州南東部ではサンパウロ州のリメイラ市(Limeira)を起点とするBR-373号線がパラナ州のバラコン(Barracão)にいたっており、途中トレス・ピネイロス(Tres Pinheiros)でBR-277号線と交差する。

またウニオン・ダ・ビトリア(União da Vitoria)よりクリチーバに向うBR-476号線は、パラナ州内のオイル・シェル地帯を通過しておりオイル・シェル道路(Rodovia do Xisto)の別名がある。この道路はオイル・シェルの開発がすすむにつれてその重要性を増すものと思われる。

以上南部三州の主要道路網を概観したが、南東地方の道路に関する将来計画としては次のものがある。

BR-158～リオ・グランデ・ド・スール州サンターナ・デ・リブラメント(Santana de Livramento)より北部地方のパラー州アルタミラ(Altamira)に通ずる道路計画。

BR-153～リオ・グランデ・ド・スール州内のウルグァイ国境の町アセグア(Acegua)市よりパラー州マラバ(Marabá)に通ずる道路。

BR-163～サンタ・カタリーナ州サン・ミゲル・デ・オエステよりスリナム国境にいたる道路。この道路が出来ると南部、中西部、北部の連結が実現する。

二) 港 湾

南部地方における道路の発達によってひきおこされた経済構造の変化は、当然の結果として南部地方の港の取扱い量も増加した。鉄道輸送を主体としていた今世紀の始め頃は、鉄道がポルト・アレグレ、リオ・グランデ、パラナグァといった主要港に集中していたが、道路の建設も又港を起点、又は終着点として行なわれたため港への輸送網の集中度は更に増大した。ただし道路の建設以後、昔さかんに用いられていた沿岸航路の重要性は失なわれていった。

リオ・グランデ・ド・スール州の港についてみると、ポルト・アレグレ港とリオ・グランデ港が重要であり、ポルト・アレグレ港は伝統的な牛肉、牛皮の輸送のほか最近は大豆及び副産物の海外向け輸出、小麦の国内他地方向け輸送に用いられており、その取扱い量は増している。また石油及び肥料の輸入港でもある。リオ・グラン

デ港は典型的な大豆及び加工品の輸出港であり、南部地方ではパラナグァ港と並ぶ二大港湾の一つである。

1983年の輸出港（海路、水路、陸路）別取扱い量及び金額は表37-Aの通りである。

下表の通りリオ・グランデ・ド・スール州内の港では海港を持つリオ・グランデが最も大きく、その取扱いは重量でエスピリト・サント州のツバロン(Tubarão)港（注：ミナス・ジェライス州の鉄鉱石積出し港）、リオ・デ・ジャネイロ州のセペチーバ港(Sepetiba)、サンパウロ州のサントス(Santos)港、パラナ州のパラナグァ港及びリオ・デ・ジャネイロ港に次いで第6位、輸出金額からみるとリオ・デ・ジャネイロ港及びパラナグァ港に次いで3位の位置にある。

パラナ州の港としてはパラナグァ港があり、南部地方最大かつ全国でも有数の良港であり、そのヒンターランドとしてはパラナ州全体、サンタ・カタリーナ州の一部、マツト・グロツソ・ド・スール州及び隣国のパラグァイ国まで広大な地域を包含する。

パラナグァ港の取扱いは1946年以降開始されたコーヒーの輸出によって拡大され、今日では大豆及び加工品、とうもろこし及びコーヒーの積出し港として重要である。昔ここから船積みされていた木材やマテ茶の量はごく少量に減少している。また輸入面では1946年以降、石油輸入の施設を設置しており、輸入港としても重要な役割りを果たしている。その取扱いは上述の通り金額面で全国二位の規模にある。

同港の概要は次の通りである。

パラナグァ港の概況

- 1、水 路：4,500 m
- 2、水 深：12 m 65千トンまでの船舶が着岸出来る。但し浚渫によって、いかなる大型船の入港も可能となる。
- 3、港 湾：全長3,000 m、巾2,000 m、水深8～12 m
- 4、岸 壁：全長2,016 m
- 5、棧 橋：1ヶ所、液体物積込み用、全長146 m
1ヶ所、ガス他液体積卸用、全長186 m

この設備により同時に2隻の着岸を可能としている。また国家港湾計画によると更に300 m

表37-A リオ・グランデ・ド・スール州輸出港取扱量及び金額

輸 出 港	重量 1,000トン	金額 100万ドル	備 考
リオ・グランデ (Rio Grande)	5,286.4	2,125.3	
ポルト・アレグレ (Porto Alegre)	12.4	216.2	空 港
ウルグアイアナ (Uruguaiana)	241.3	215.0	
ポルト・アレグレ (Porto Alegre)	247.5	129.6	海 港
サンターナ・リブラメント (S. Livramento)	29.1	39.2	
ジャグアロン (Jaguarão)	47.5	41.1	
シュイ (Chui)	65.5	27.7	
クアリ (Quari)	3.7	10.4	
トラマンダイ (Tramandai)	16.2	5.6	
その他	2.0	3.5	
計	5,951.6	2,813.6	

出所：CACEX

が追加建設される予定である。

6、積卸施設：起重機、250トン

走行クレーン（タイヤ車輪）136トン

電動クレーン、フォークリフト、トラクター、貨車

ガス用タンク3個、可燃性液体用26個

食油及び化学製品用ターミナル〜アラウカリア (Araucária) 精油所よりパイプラインが新設されている。

今後の計画としては肥料用ターミナル、施設の更新。

パラナグァ港以外の港としてはアントニナ港 (Porto de Antonina) がある。この港はパラナグァ港に近いのでその存在価値が失なわれて長期間使用されていなかったが、1979年より再開されており、サンタ・カタリーナ産石炭をパラナ州内のセメント工業に送るために用いられている。

パラナ州内港の83年度取扱量は表37-Bの通りである。

サンタ・カタリーナ州の港についてはピンターランドが小さい上、パラナ州及びリオ・グランデ・ド・スール州に通ずる道路があるため港の利用は伸びていない。

海岸地帯より奥地への道路は長期にわたって極めて不備な状況にあったが、道路の建設後 BR-470号、BR-280号によって奥地の道路網が整備されたあとも、ブルメナウやジョインビールの南東地方向け生産物は BR-116号国道を利用して目的地まで輸送されるので港は用いられていない。

州内の港としてはサン・フランシスコ・ド・スール (São Francisco do Sul) 港を最大とするが、パラナ州のパラナグァ港に近いので、その蔭にかくれて重要性は見失われており、木材の輸送に止まっている。

サン・フランシスコ・ド・スール港に次ぐ港としてはイタジャイ (Itajaí) 港及びインビツバ港 (Imbituba) がある。この中イタジャイは工業製品及びその原材料、各種資材、インビツバは石炭の積出し港である。

サンタ・カタリーナ州の港が1983年に取扱った輸出货量及び金額は表37-Cの通りである。

表37-B パラナ州の港取扱量（輸出商品）

港名	重量 1,000トン	金額 100万ドル	備考
パラナグァ (Paranagua)	6,721.9	2,243.5	
フォス・ド・イグアスー (Foz do Iguaçu)	248.8	208.5	
クリチーバ (Curitiba)	0.3	4.4	空港
グァイラ (Guaira)	2.1	1.4	パラナ川
計	6,973.1	2,457.8	

出所：CACEX

表37-C サンタ・カタリーナ州港の取扱量（1983）

港名	重量 1,000トン	金額 100万ドル	備考
サンフランシスコ・ド・スール (S. Francisco Sul)	重 1,021.4	327.9	
イタジャイ (Itajaí)	322.3	235.6	
インビツバ (Imbituba)	86.2	20.6	
その他	9.3	4.1	
計	1,439.2	588.2	

出所：CACEX

2 農業開発現況

2.1 概要

パラナ州、サンタ・カタリーナ州及びリオ・グランデ・ド・スール州によって構成される南部地方は、国内の地方区分（北部、東北部、中西部、南東部及び南部）の中では最南端に位置するもっとも面積の小さい地方で、北部はサンパウロ州及びマット・グロッソ・ド・スール州の亜熱帯性気候の連続帯から、南部は温帯のアルゼンチンやウルグアイに連続する地帯まで地勢上、気候上の変化が多く、これらの自然環境が多様な農牧活動を可能としている。

1980年の農牧センサス（注：農牧センサスは各5年置きに行なわれるので現時点でもっとも新しいデータ）によると南部地方には1,146.6千の農場があり、48.2百万ヘクタールの農地を所有した。この農地面積は全国農地面積の13.0%に相当するが、この中耕作されている土地の面積は全国耕作面積の約30%という高い比率を占めており、南東地方の25%をしのいで農耕密度の高い地方となっている。この様な状況は1960年代にパラナ州及びサンタ・カタリーナ州の西部地方が開発された結果によるものであり、今日のセラードのように60年代の農業前線として南部地方西部の開拓が急速にすすめられたものである。

最近でこそセラードを中心とする中西部地方の開発がすすみ、国内の農業構造は次第に変化しつつあるが、南部地方が長期にわたって占めてきた穀倉地帯としての位置は依然として変わらず、主要作物の多くが全国でも1、2の位置を占めている状況にある。1983年度の生産実績をみるとこの状況が明らかとされる。

表38にみられる通り穀類では米、小麦、とうもろこし、フェイジョン、大麦、ライ麦、カラス麦と殆んど穀物が全国1位の生産規模にあり、全国生産量に比して高い生産比率を占めている。この中では国内食糧としての米、フェイジョンの生産と並んで絶対量が不足する小麦の生産が行なわれており、外貨流出の大小は南部地方の生産量いかんにかかっている。穀類と並ぶ油脂作物でも大豆が国内生産の1、2位にあつて全国生産量の66%以上を占めており、マモナ（ヒマ）も全国2位の生産量を保っている。コーヒーと並ぶ重要輸出品目としての大豆及び副産物の生産は、農業部門にかぎらず国内経済全体の問題として重要視されており、その大半を産出する南部地方農業の重要性を裏付けるものである。

かつては国内最大のコーヒー生産地帯であつたパラナ州は、70年代に遭遇した度重なる霜害のためコーヒー栽培を縮小し、その生産地帯はサンパウロ州、ミナス・ジェライス州へと北上している。このため現在では国内3位の生産地帯に止まっているが、それでも全国生産量の18%を占めて全国生産に少なからぬ影響力を保っている。工業原料作物ではパラナ州の綿、リオ・グランデ・ド・スール州の煙草葉の生産が全国的に大きく、果実ではリオ・グランデ・ド・スール州のぶどう、サンタ・カタリーナ州のリンゴがそれぞれ全国生産の60.5%及び57.0%という大きな割合を占めている。リンゴの生産ではリオ・グランデ・ド・スール州の生産も大きくサンタ・カタリーナ州及びパラナ州を合わせた生産量は全国生産量の86%を占める圧倒的な立場にある。

この様な農業生産を行っている農牧形態と、その基本となる土地所有形態は次の通りである。

2.2 農牧形態

2.2.1 農場数及び農地面積

ブラジル地理統計院（IBGE）の農牧形態に関する統計では各農地を“Estabelecimento”という表現で表わしている。これは各農場を経営者別に一単位としたもので、地主自身が直接営農する場合に限らず、借地農、歩合農若しくは正式の地権がないまま土地を占有しているものでも、その管理下にある面積は一農場として取扱われ

ている。

表38 全国生産順位3位までに含まれる南部地方の農作物 1983年

品目	州別	生産量 1,000トン	順位	全国生産比率 %	単収 kg/ha	備考
米	リオ・グランデ・ド・スール	2,220.5	1	28.6	3,488	全国平均単収 1,516
小麦	パラナ	1,066.0	1	47.0	1,187	〃 1,202
	リオ・グランデ・ド・スール	794.5	2	35.3	1,156	〃 〃
とうもろこし	パラナ	5,019.0	1	26.8	2,125	〃 1,745
	リオ・グランデ・ド・スール	3,175.0	2	17.0	1,785	〃 〃
フェイジョン	パラナ	347.0	1	21.8	496	〃 390
大麦	リオ・グランデ・ド・スール	91.2	1	69.5	1,030	〃 1,073
	パラナ	22.0	2	17.0	1,048	〃 〃
〃	サンタ・カタリーナ	18.0	3	13.5	1,418	〃 〃
ライ麦	パラナ	1.4	1	39.0	885	〃 922
	サンタ・カタリーナ	1.2	2	34.0	1,031	〃 〃
〃	リオ・グランデ・ド・スール	1.0	3	27.0	868	〃 〃
カラス麦	リオ・グランデ・ド・スール	53.3	1	54.1	990	〃 1,018
	パラナ	28.0	2	28.4	1,400	〃 〃
	サンタ・カタリーナ	17.2	3	17.5	750	〃 〃
ソルガム	リオ・グランデ・ド・スール	106.0	1	49.7	2,047	〃 1,941
	パラナ	33.1	3	15.5	2,683	〃 〃
大豆	リオ・グランデ・ド・スール	5,269.0	1	36.1	1,548	〃 1,792
	パラナ	4,315.0	2	29.6	2,134	〃 〃
マモナ	〃	37.1	2	21.6	1,400	〃 632
草綿	〃	700.0	1	45.9	1,591	〃 1,132
煙草葉	リオ・グランデ・ド・スール	156.1	1	39.5	1,436	〃 1,252
	サンタ・カタリーナ	132.1	2	33.3	1,478	〃 〃
ラミー	パラナ	9.6	1	100.0	2,052	〃 2,052
コーヒー	〃	609.0	3	18.3	1,387	〃 1,450
ニンニク	サンタ・カタリーナ	8.6	2	15.0	3,323	〃 3,395
ぶどう	リオ・グランデ・ド・スール	347.5	1	60.5	8,765	〃 9,898
	サンタ・カタリーナ	141.5	3	9.5	10,371	〃 〃
リンゴ	〃	57.3	1	57.0	8,015	〃 〃
	リオ・グランデ・ド・スール	21.0	2	20.9	〃	〃 〃
じゃがいも	パラナ	423.0	3	23.2	9,396	〃 10,833
玉ねぎ	リオ・グランデ・ド・スール	167.5	2	23.1	8,434	〃 10,787
	サンタ・カタリーナ	125.7	3	17.3	10,191	〃 〃

出所：IBGE

上記分類にもとづく南部地方の農場数は1980年で1,146,578に達している。60年前の1920年には189,685農場であったのでこの間6倍に増加したことになる。州別ではリオ・グランデ・ド・スール州とパラナ州が50万弱でほぼ似かよっており、サンタ・カタリーナ州はそのほぼ半分程度の農場数である。

1920年から1980年にかけて60年間の推移をみるとパラナ州が14.5倍、サンタ・カタリーナ州が6.4倍増加したのに対し、リオ・グランデ・ド・スール州は3.8倍の増加に止まっているのが観察される。これはリオ・グランデ・ド・スール州の入植の歴史が古く、1920年代にはすでに州内の農牧形態がかなり整えられていたのに対し、パラナ州とサンタ・カタリーナ州では1950年代より急速に入植がすすみ農場単位が増えていったため、この2州は1920年頃にはいまだ少数の地主が大面積を管理していたものである。

以上の農地に属する農地面積は1980年で48百万ヘクタールで1920年の面積に対して1.7倍の増加となっている。この60年間に農地面積が1.7倍に増加したのに対し、その中に分割される農場数が6倍に増加したことは農地

表39 南部地方の州別農場数推移 (実数)

年 度	パ ラ ナ	サンタ・カタリーナ	リオ・グランデ・ド・スール	合 計
1920	30,951	33,744	124,990	189,685
1940	64,397	88,469	230,722	383,588
1950	89,461	104,429	286,733	480,623
1960	269,146	158,268	380,201	807,615
1970	554,488	207,218	512,303	1,274,009
1980	454,863	216,324	475,391	1,146,578

出所：ANUARIO ESTADISTICO

表40 南部地方の州別農地面積推移 1,000ha

年 度	パ ラ ナ	サンタ・カタリーナ	リオ・グランデ・ド・スール	合 計
1920	5,302.7	3,567.7	18,578.9	27,449.3
1940	6,252.5	4,862.3	20,441.8	31,556.6
1950	8,032.7	5,318.3	22,069.4	35,420.4
1960	11,384.9	5,948.9	21,659.4	38,993.2
1970	14,625.5	7,025.3	23,807.2	45,458.0
1980	16,613.3	7,369.5	24,202.1	48,184.9

出所：ANUARIO ESTADISTICO

表41 南部地方の農場数、農地面積全国比率

年 度	農 場 数 (実数)			農 地 面 積 (1,000ha)		
	全 国	南部地方	%	全 国	南部地方	%
1920	648,153	189,685	29.3	175,104.7	27,449.4	15.7
1940	1,904,589	383,588	20.2	197,720.2	31,556.6	16.0
1950	2,064,642	480,623	23.3	232,211.1	35,420.4	15.3
1960	3,337,769	807,615	24.2	249,862.1	38,993.3	15.6
1970	4,924,019	1,274,009	25.9	294,145.5	45,458.0	15.5
1980	5,167,678	1,146,578	22.2	369,587.9	48,185.0	13.0

出所：ANUARIO ESTADISTICO

の細分化がすすんだ結果によるものであり、1農場あたりの平均面積は1920年頃の144.7ヘクタールより1950年には73.7ヘクタール、1980年には42.0ヘクタールへと減少している。

一方、全国の農場数及び農地面積に対する南部地方の比率をみると、農場数では1920年の29.3%より80年には22.2%へ、また農地面積では15.7%より13.0%の比率を落している。これは農牧産業の歴史が古い南部地方に対し他の地方の農地造成がすすんで来た結果によるものであり、すでに限界に達している南部地方の農地面積が今後も大きな変動がないのに対し、農業前線としての中西部地方や北部地方、東北部地方の開発がすすむにつれ南部地方の割合は更に減少していくこととなる。

ここにいう農地面積とは農耕地のほか牧場、森林、未利用地のすべてを含むので、実際に生産をあげている面積の中農耕地面積の総農地面積に対する比率をみると次表の通り南部地方の農地利用度の高さが明らかとなる。

表42 農地面積の中に占める農耕地面積の比率

地方別	農地面積 1,000ha	農耕地面積 1,000ha	比率 %
北 部	42,546.1	1,763.5	4.1
東 北 部	89,555.1	14,282.3	15.9
中 西 部	115,327.9	6,480.1	5.6
南 東 部	73,973.8	12,119.2	16.4
南 部	48,185.0	14,540.1	30.2
全 国	369,587.9	49,185.2	13.3

出所：ANUÁRIO ESTADÍSTICO

表43 総面積に占める農地面積の比率

地方別	総面積 1,000ha	農地面積 1,000ha	比率 %
北 部	355,400.0	42,546.1	12.0
東 北 部	154,224.6	89,555.1	58.1
中 西 部	187,935.6	115,327.9	61.4
南 東 部	91,880.8	73,973.8	80.5
南 部	56,207.1	48,185.0	85.7
全 国	845,648.3	369,587.9	43.7

出所：ANUÁRIO ESTADÍSTICO

表44 南部地方の生産者形態（農場数）1980年

区 分	実数			計
	パ ラ ナ	サンタ・カタリーナ	リオ・グランデ・ド・スール	
地 主	296,852	168,211	364,188	829,251
借 地 農	46,188	13,829	30,709	90,726
歩 合 農	66,010	14,006	44,236	124,252
占 有	44,708	19,814	35,693	100,215
申 告 な し	1,105	464	565	2,134
計	454,863	216,324	475,391	1,146,578

出所：IBGE

表45 南部地方の生産者形態（面積）1980年

区 分	1,000 ha			計
	パ ラ ナ	サンタ・カタリーナ	リオ・グランデ・ド・スール	
地 主	14,381.1	6,537.5	20,343.4	41,262.0
借 地 農	799.3	283.3	2,239.3	3,321.9
歩 合 農	768.4	191.5	822.8	1,782.7
占 有	593.1	314.4	710.4	1,617.9
申 告 な し	71.4	42.9	86.2	200.5
計	16,613.3	7,369.6	24,202.1	48,185.0

出所：IBGE

農場数及び農地面積を生産者の種類別に分類したのが次表である。この分類法では地主が自ら経営管理している農場、借地契約によっているもの、歩合作及び占有者が占換している農地に分類されている。なお占有者とは地権が明確でない土地を長期にわたって占有しているものを指すものであり、地権のある他人の土地を不法に占換することを意味するものではない。占有権の売買すら行なわれており親子数代にわたって住居している場合もある。現在すすめられている農地改革では、これら占有地の地権を明らかとし正式に土地を所有させることが目的とされている。占有者は北部や中西部地方では多くを占めるが、面積自体が狭く開発形態が整備されている南部地方ではその比率は僅少である。

表46 南部地方の農牧形態 1980年

区 分	単 位	パラナ州	サンタ・カタリーナ州	リオ・グランデ・ド・スール州	計
農 場 数	1,000	454.9	216.3	475.4	1,146.6
農 地 面 積	1,000 ha	16,613.3	7,369.5	24,202.1	48,184.9
耕 作 面 積					
永年作物	〃	954.0	79.1	176.1	1,209.2
短期作物	〃	5,130.5	1,713.4	6,487.1	13,331.0
小 計	〃	6,084.5	1,792.5	6,663.1	14,540.1
農 業 人 口	1,000人	1,813.5	832.9	1,741.4	4,387.8
家 畜 数					
牛	1,000頭	7,875.7	2,613.6	13,968.2	24,457.5
豚	〃	5,643.5	3,886.9	5,419.9	14,950.3
と り 類	1,000羽	46,005.6	43,362.9	57,807.3	147,175.8
ト ラ ク タ ー 数	1,000台	79.7	31.9	118.7	230.3

出所：CENSO AGROPECUARIO 1980

表47 農牧形態・南部地方の全国比率 1980

区 分	単 位	全 国	南 部 地 方	南部地方の比率
農 場 数	1,000	5,167.6	1,146.6	22.2%
農 地 面 積	積 1,000 ha	369,587.7	48,184.9	13.0%
耕 作 面 積	〃			
永年作物	〃	10,497.3	1,209.2	9.6%
短期作物	〃	38,688.0	13,331.0	34.5%
小 計	〃	49,185.3	14,540.1	29.6%
農 業 人 口	1,000人	21,109.9	4,387.8	20.8%
家 畜 数				
牛	1,000頭	117,755.9	24,457.5	20.8%
豚	〃	32,569.6	14,950.3	45.9%
と り 類	1,000羽	415,477.3	147,175.8	35.4%
ト ラ ク タ ー 数	1,000台	530.7	230.3	43.4%

出所：CENSO AGROPECUARIO 1980

農地面積に対する耕作面積の割合は上に示した通りであるが、耕作面積の内訳を永年作物と短期作物に分けてみると、南部地方全体では短期作物の栽培面積が91.6%を占めて圧倒的に大きい。州別ではコーヒーを持つパラナ州の永年作物が比較的大きな割合を占めているほか、ぶどうのリオ・グランデ・ド・スールやリンゴのサンタ・カタリーナ州でも耕作面積の10%止まりである。これを全国の栽培面積と対比すると永年作物が全国面積の9.6%を占めるのに対し、短期作物では34.5%を占めており極めて大きな割合となっている。永年作物と短期作物を合わせた耕作面積では全国耕作面積の約30%を占めている。総面積で全国の6.8%、農地面積で全国の13.0%にすぎない南部地方が、耕作面積で全国の3分の1に近い割合を占めていることは農業部門に占める南部地方の重要性を示す明らかな指標といえよう。

農業人口については80年の農牧統計ではパラナ州181万人、サンタ・カタリーナ州83万人、リオ・グランデ・スール州174万人、計438万人という数字が出ている。これは全国農業人口の20.8%に相当する数で、農耕面積の全国比率30%をはるかに下廻っており、単位面積あたり労働力使用比率の低さ、いかえれば機械化の度合の高さを示している。その1例として80年センサスにおけるトラクターの保有台数は23万台で全国保有台数の43%という高い比率となっている。

南部地方の農牧形態を示す他の統計として家畜の保有数を見ると、全国の保有数に対し牛20.8%、豚45.9%、とり類35.4%という数字が出ている。とくに養豚、養鶏が盛んに行なわれている統計である。

2.2.2 土地所有形態

州別の経営規模別土地所有形態の分類方法としてIBGE（ブラジル地理統計院）では南部地方の農地面積を次の分類で区分している。

表48 南部地方：経営規模別農場数 1,000

規模別	1960年		1970年		1980年	
	農場数	%	農場数	%	農場数	%
10 ha 以下	242.1	30.0	538.5	42.3	452.3	39.4
10 ~ 100 ha	513.4	63.5	675.3	53.0	623.9	54.5
100 ~ 500 "	41.8	5.2	49.0	3.8	55.3	4.8
500 ~ 1,000 "	5.7	0.7	6.8	0.5	8.1	0.7
1,000 ha 以上	4.5	0.6	4.8	0.4	7.0	0.6
計	807.5	100.0	1,274.4	100.0	1,146.6	100.0

表49 南部地方：経営規模別農地面積

規模別	1960年		1970年		1980年	
	農地面積	%	農地面積	%	農地面積	%
10 ha 以下	1,286.2	3.3	2,769.8	6.1	2,271.9	4.7
10 ~ 100 ha	14,341.0	36.8	17,476.5	38.2	16,669.1	34.6
100 ~ 500 ha	8,376.6	21.5	10,023.8	21.9	11,429.8	23.7
500 ~ 1,000 ha	3,929.4	10.0	4,686.4	10.3	5,637.1	11.7
1,000 ha 以上	11,060.1	28.4	10,751.2	23.5	12,177.0	25.3
計	38,993.3	100.0	45,707.7	100.0	48,184.9	100.0

出所：CENSO AGROPECUARIO

イ) 零細農地 (Mini Fundio)

農地面積が10ヘクタール以下のものを指す。この面積は穀類の栽培では経営単位とすることが出来ない小面積であるが、都市近郊の野菜、果樹、養鶏等の農業では経済的に可能性のある面積とされている。

ロ) 小農地 (Pequeno Propriedade)

農地面積が10～100ヘクタールの範囲のものを指す。家族労働を主体とする経営規模で、収穫とくにぶどうの収穫、煙草葉の精製、作業小舎の建設など特殊の作業の時だけ他の労働力を雇用する。

この部類の中には州政府が行なっている植民計画の一家族当り単位25～35ヘクタールのロッテが多く含まれる。

ハ) 中農地 (Medio Propriedade)

一般に農地面積が120ヘクタールを越える場合、家族以外の労働力を用いずに全面的に土地を利用することは困難となり、雇用労働力や歩合作用を利用するようになる。このように農業形態は大型化するが、他の地方の場合と同じく500ヘクタールまでは大農場には含まれない。

ニ) 大農地 (Grande Propriedade)

500ヘクタール以上の農地を指している。この分類に含まれる農場になると土地の利用度は低くなり、中小農場が土地を全面的に利用しようとする方法から、もっとも条件のよい場所を利用しようとする方法に変わる。当然労働力及び機械の利用ははるかに高くなる。

ホ) 特大農地 (Lati Fundio)

零細農地の“ミニフンディオ”に対して広い未耕の所有地をもつ大荘園を“ラチフンディオ”と呼んでいる。南部地方の場合1,000ヘクタール以上の面積を持つ農場はこの分類に含まれる。

表50 南部地方の経営規模別農場数全国対比 1980年 1,000

規模別	全 国		南 部 地 方		南部地方の割合 %
	農場数	%	農場数	%	
10 ha 以下	2,603.6	50.5	452.3	39.4	17.4
10 ~ 100 ha	2,015.8	39.1	623.9	54.5	30.9
100 ~ 500 ㍍	430.8	8.4	55.3	4.8	12.8
500 ~ 1,000 ㍍	58.5	8.1	8.1	0.7	3.8
1,000 ha 以上	48.3	0.9	7.0	0.6	14.5
計	5,157.0	100.0	1,146.6	100.0	22.2

表51 南部地方の経営規模別農地面積全国対比 1980年 1,000 ha

規模別	全 国		南 部 地 方		南部地方の割合 %
	農地面積	%	農地面積	%	
10 ha 以下	8,994.7	2.4	2,271.9	4.7	25.3
10 ~ 100 ha	64,456.4	17.4	16,669.1	34.6	25.9
100 ~ 500 ㍍	86,693.5	23.5	11,429.8	23.7	13.2
500 ~ 1,000 ㍍	40,242.7	10.9	5,637.1	11.7	14.0
1,000 ha 以上	169,200.6	45.8	12,177.0	25.3	7.2
計	369,587.9	100.0	48,184.9	100.0	13.0

出所：CENSO AGROPECUARIO

以上のように分類される農地は多くの農場によってそれぞれの面積に分割される。ブラジルの農地所有形態は多数の農場が小さい面積を持ち、少数の農場が大面積を占有するのを特徴としているが、南部地方も例外ではなく、1980年の統計によると南部地方全体で農場数の93.9%を占める零細及び小農場が総農地面積の39.3%を占めたのに対し、農場数のわずか1.3%にすぎない大及び特大農場が農地面積の37%を占る状態にある。これらの大農場の農地が十分利用されていないところにブラジル農業の大きな問題点が残されているともいえる。

1960、70及び80年の農牧センサスにもとづき各州別の土地所有形態をみると次の状況にあった。

イ) パラナ州

表52 パラナ州：経営規模別農場数 単位 1,000

規 模 別	1960年		1970年		1980年	
	農 場 数	%	農 場 数	%	農 場 数	%
10 ha 以下	93.5	34.7	295.1	53.1	215.4	47.4
10 ~ 100 ha	159.1	59.1	241.2	43.5	215.0	47.3
100 ~ 500 〃	14.4	5.4	15.8	15.8	20.3	4.5
500 ~ 1,000 〃	1.2	0.5	1.6	0.3	2.3	0.5
1,000 ha 以上	0.9	0.3	1.1	0.2	1.9	0.3
計	269.1	100.0	554.8	100.0	451.9	100.0

表53 パラナ州：経営規模別農地面積 単位 1,000 ha

規 模 別	1960年		1970年		1980年	
	農 地 面 積	%	農 地 面 積	%	農 地 面 積	%
10 ha 以下	523.9	4.6	1,583.1	10.7	1,107.4	6.7
10 ~ 100 ha	4,741.4	41.6	6,139.5	41.6	5,874.2	35.4
100 ~ 500 〃	2,820.4	24.8	3,158.1	21.4	4,134.5	24.9
500 ~ 1,000 〃	864.2	7.6	1,098.7	7.4	1,617.2	9.7
1,000 ha 以上	2,435.0	21.4	2,796.5	18.9	3,880.0	23.3
計	11,384.9	100.0	14,775.9	100.0	16,613.3	100.0

出所：CENSO AGROPECUARIO

上表にみられる通り1960年より1970年にかけて10年間に農場数の急激な増加（106%）がみられた。この間農地面積も30%の拡大をみている。これは40年代より50年代にかけて州内北部のコーヒー地帯が開発されたのに次ぐ、州内西部地方の大豆及び小麦作を目的とした農業前線の開発による現象であった。経営規模では零細農場の増加がいちじるしく10年間に200%以上の増加であった。

表54 パラナ州：1農場当り平均面積 ha

経営規模別	1960年	1970年	1980年
10 ha 以下	5.6	5.4	5.1
10 ~ 100 ha	29.8	25.5	27.3
100 ~ 500 〃	195.9	199.9	203.7
500 ~ 1,000 〃	720.2	686.7	703.1
1,000 ha 以上	2,705.5	2,542.3	2,042.1
計	42.3	26.6	36.5

出所：IBGE

70年より80年にかけては60年代とは逆の現象がみられ、零細農及び小農の数が減少し、中・大農場数の増加に

より大型農場への集中化が観察される。

10～100ヘクタールの範囲にある小農の場合は1960年、1970年に州内農地面積の42%を占めてきたが、80年には35.5%にその比率を下げている。この部類の平均面積は27.3ヘクタールであった。このように最近その比率を落しているものの、家族労働を主体とする小農の割合が多いパラナ州農業の形態は今も変わっていない。

中農の場合はほぼ同等の比率が保たれており、平均面積は80年にやや増加して203.7ヘクタールとなった。

大型機械化農業に必要とする大面積を持つ大農場は農場数及び面積を増加しているが、特大農場ではや、細分化がすすんでおり、その平均面積は1960年の2,700ヘクタールより80年には2,000ヘクタールへと落ちている。

ロ) サンタ・カタリーナ州

表55 サンタ・カタリーナ州：経営規模別農場数 単位 1,000

規 模 別	1960年		1970年		1980年	
	農 場 数	%	農 場 数	%	農 場 数	%
10 ha 以下	48.5	30.7	65.4	31.5	76.0	35.1
10 ～ 100 ha	101.8	64.3	132.8	64.1	130.6	60.4
100 ～ 500 ㄴ	6.7	4.2	7.7	3.7	7.9	3.7
500 ～ 1,000 ㄴ	0.7	0.4	0.9	0.4	1.0	0.5
1,000 ha 以上	0.5	0.4	0.5	0.3	0.8	0.3
計	158.2	100.0	207.3	100.0	216.3	100.0

表56 サンタ・カタリーナ州：経営規模別農地面積 単位 1,000 ha

規 模 別	1960年		1970年		1980年	
	農 地 面 積	%	農 地 面 積	%	農 地 面 積	%
10 ha 以下	235.5	4.0	333.9	4.7	376.9	5.1
10 ～ 100 ha	2,882.3	48.4	3,623.7	51.0	3,494.4	47.4
100 ～ 500 ㄴ	1,232.8	20.7	1,484.9	20.9	1,569.5	21.3
500 ～ 1,000 ㄴ	480.0	8.1	591.4	8.3	701.4	9.5
1,000 ha 以上	1,118.4	18.8	1,066.6	15.1	1,227.3	16.7
計	5,949.0	100.0	7,100.5	100.0	7,369.5	100.0

サンタ・カタリーナ州では60年代以前に可成りの入植がすすんでいたもので、60年より70年にかけて農場数の増加はパラナ州程ではなく、30%程度の増加に止まっている。60年から80年にかけての推移をみると零細農の割合が次第に増加しており、60年の30.7%より80年には35.1%へと変化した。これに応じて面積も4.0%より5.1%へと伸びている。

表57 サンタ・カタリーナ州：1農場当り平均面積

経 営 規 模 別	1960年	1970年	1980年
10 ha 以下	4.9	5.1	4.9
10 ～ 100 ha	28.3	27.3	26.8
100 ～ 500	184.0	192.8	198.7
500 ～ 1,000	685.7	657.1	701.4
1,000 ha 以上	2,236.8	2,133.2	1,534.1
計	37.6	34.3	34.1

出所：IBGE

10～100ヘクタールの部類に含まれる小農の割合はパラナ州の場合よりも高く、80年の統計では農場数で60.4

％、面積で47.4％を占めているが、70年の統計と比較するとそのいずれも減少傾向である。この統計にみられるように同州は国内でも典型的な家族労働主体の農場が支配的である。

100～500ヘクタールに含まれる中農の場合は70年、80年とも大きな変化はなく、80年には農場数で3.7％、面積で21.3％を占めた。500～1,000ヘクタールの大農、1,000ヘクタール以上の超大型農場の場合、とくに大きな変化はないが傾向としては増加している。大型農場の平均面積はパラナ州の場合とほぼ同等の701ヘクタール、特大農場はパラナ州よりも小さく1,534ヘクタールを、80年度の平均面積としている。

ハ) リオ・グランデ・ド・スール州

表58 リオ・グランデ・ド・スール州：経営規模別農場数 単位 1,000

規 模 別	1960年		1970年		1980年	
	農 場 数	%	農 場 数	%	農 場 数	%
10ha 以下	100.1	26.3	178.0	34.7	160.9	33.8
10 ～ 100ha	252.5	66.4	301.3	58.8	278.3	58.5
100 ～ 500ヶ	20.7	5.4	25.5	5.0	27.1	5.7
500 ～ 1,000ヶ	3.8	1.0	4.3	0.8	4.8	1.0
1,000ha 以上	3.1	0.9	3.2	0.7	4.3	1.0
計	380.2	100.0	512.3	100.0	475.0	100.0

表59 リオ・グランデ・ド・スール州：経営規模農地面積 単位 1,000ha

規 模 別	1960年		1970年		1980年	
	農 地 面 積	%	農 地 面 積	%	農 地 面 積	%
10ha 以下	526.8	2.4	852.8	3.6	787.6	3.2
10 ～ 100ha	6,717.3	31.0	7,713.3	32.4	7,300.5	30.2
100 ～ 500ヶ	4,323.4	20.0	5,380.8	22.6	5,725.8	23.7
500 ～ 1,000ヶ	2,585.2	11.9	2,996.3	12.5	3,318.5	13.7
1,000ha 以上	7,506.7	34.7	6,888.1	28.9	7,069.7	29.2
計	21,659.4	100.0	23,831.3	100.0	24,202.1	100.0

以上の出所：CENSO AGROPECUARIO

リオ・グランデ・ド・スール州の場合は前2州よりも入植の歴史が古く、1920年代の終にはすでに全地域への入植が行なわれていたため、その後の農場数や農地面積の増加は比較的到新しく開発された前2州に比して低い。また限られた面積の中での農場数の増加は農地の細分化がすすんでいることを示すものである。すでに同州内には1万ヘクタール以上の農地を持つ農場は姿を消している。

表60 リオ・グランデ・ド・スール州：1農場当り平均面積 ha

経 営 規 模 別	1960年	1970年	1980年
10ha 以下	5.3	4.8	4.9
10 ～ 100ha	26.6	25.6	26.2
100 ～ 500ヶ	208.9	211.0	211.3
500 ～ 1,000ヶ	680.3	696.8	691.4
1,000ha 以上	2,421.5	2,152.5	1,644.1
計	57.0	46.5	50.9

出所：IBGE

10ヘクタール以下の零細農は州内全農場数の3分の1を占めているが、面積では3%をやや上回る程度であり小農の場合は農場数で3分の2、面積で3分の1という形は変わっていない。中農は農場数、面積共に増加傾向である。

大農場の比率は南部三州の中でもっとも高く500ヘクタール以上の農場数は全体の2%、面積の43%を占める。ただし1,000ヘクタール以上の超大型農場では1960年より1980年にかけて面積が減少しており、次第に細分化されたあとが明らかにされている。その平均面積は1960年頃の2,400ヘクタールより80年には1,600ヘクタールへと急激に縮小した。

いずれにしてもリオ・グランデ・ド・スール州は他の二州に比して家族労働を主体とする形ではなく、大型機械化形態が多い州である。

2.3 主要農産物の生産現況

イ) 穀類

2.3.1 米

南部地方における米の生産は60年代まで南東地方とほぼ同等の水準にあったが、70年代に入ってから国内最大の生産地帯をもつリオ・グランデ・ド・スール州を中心とした生産が増加し、83年には全国生産の38.5%を占める圧倒的な立場に立っている。

栽培面積では全国栽培面積の19.5%に過ぎない比率で、全国生産量の3分の1以上の生産をあげたのは単位面積あたりの収量が高かったためであり、これを支えたのはリオ・グランデ・ド・スール州における高単収によるものであった。リオ・グランデ・ド・スール州の単収は、天候が極めて不順であった1983年ですら1ヘクタール当り3.5トンを超えており、天候が順調であった81年や82年には4トン以上の収量を記録している。83年に国内の主要生産地帯（マラニョン、ゴヤス、マット・グロッソ、ミナス・ジェライス、サンパウロ各州）で1ヘクタールあたり1.5トン以上の単収をあげたのはサンパウロ州の1.8トンのみ、という状態をみても南部地方の高い生産性が理解される。この様に南部地方の米作が他の地方と比べて高い単収を得るのは、その主体となっているリオ・グランデ・ド・スール州内の米作地帯が全般に低地にあり、地形がなめらかな起伏状で農耕に適し、土壌の保水力が強い上、州内米作の95%が水稻の栽培によっているためである。他の主要生産地帯はそのほとんどが岡地栽培の陸稲であり、天候の影響を受けやすく人工的にコントロール出来ないため生産が不安定であるほか低い単収となっている。

南部地方ではリオ・グランデ・ド・スール州のほかサンタ・カタリーナ州でも一部水稻の栽培が行なわれているため、その単収は比較的に高く、パラナ州のみが陸稲を主体とする米作である。

表61 南部地方の米生産実績 1983年

州 別	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 3,488kg/ha	全国比率%
リオ・グランデ・ド・スール	636.5	2,220.5	3,488	28.7
サンタ・カタリーナ	142.6	395.4	2,722	5.1
パラナ	216.4	368.3	1,702	4.7
南部地方計	995.5	2,984.2	2,998	38.5
その他の地方	4,114.9	4,765.3	1,158	61.5
全国計	5,110.4	7,749.5	1,561	100.0

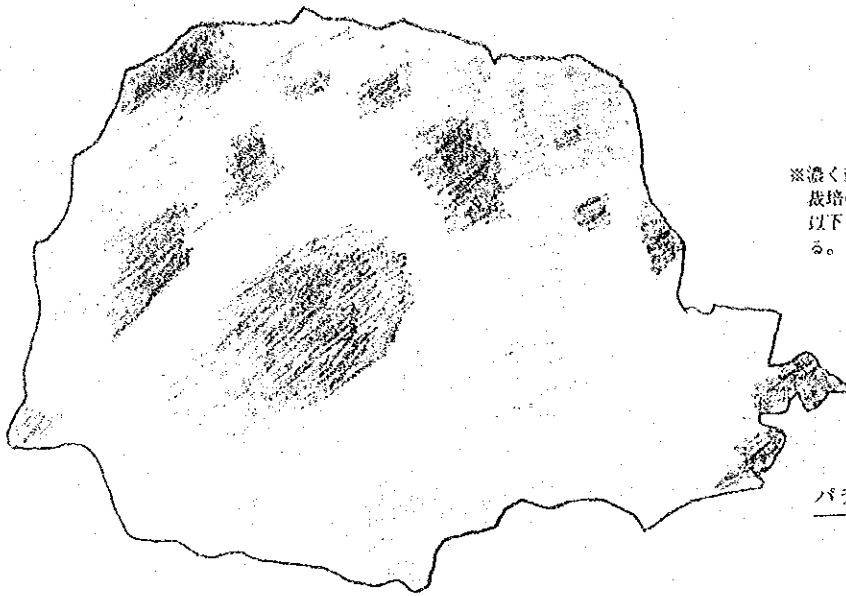
出所：IBGE

各州の生産地帯は次の通りである。

パラナ州：パラナ州内で米の生産が集中的に行なわれているのは州内西部で、リオ・グランデ・ド・スール州よりの入植者が多いウビラタン(Ubiratã)とこれに隣接するカスカベル(Cascavel)、コルベリア、マンボレ(Mamborê)、ボア・エスペランサ(Boa Esperança)、ジャニópolis(Janiópolis)などの地域である。

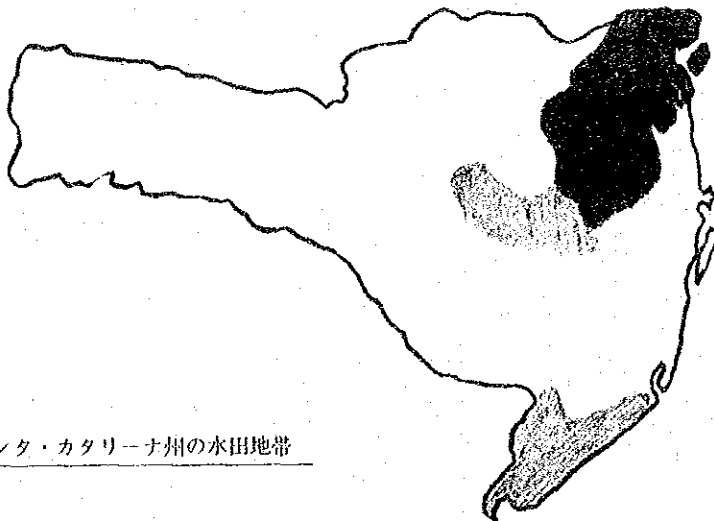
また州の東北部ではケレンシア・ド・ノルテ(Querência do Norte)、サンタ・クルス・ド・モンテ・カステロ(Santa Cruz do Monte Castelo)、サンタ・イザベル・ド・イバイ(Santa Isabel do Ivaí)やイカライマ(Icaíraima)等がある。

これらの地帯はコーヒー栽培の拡張地帯で、その間作として栽培されているものであり、すでにコーヒー園が造成された地帯でも米作が盛んに行なわれている。このような間作はコーヒーの生産が開始されるまでの期間、



※濃く塗り込んだ箇所は
栽培の密集地帯を指す。
以下各地面とも同様であ
る。

パラナ州内の米生産地帯



サンタ・カタリーナ州の水田地帯

現金収入を得る方法として行なわれる。

コーヒーの栽培が盛んであった60年代頃までは、これに合わせて盛んに行なわれた米作も70年代に入って以降、度重なる霜害によってコーヒー園が壊滅的な被害を受け、多くのコーヒー園が抜根されたことや、70年代の新しい作物としての大豆と小麦の栽培地帯が北上したことなどのため米の栽培は減少していった。

パラナ州内の米作の開発に貢献した外国移民としてはドイツ系、オランダ系、日系移住者があげられている。

サンタ・カタリーナ州ではパラナ州よりも集約的な米作が行なわれ、イタジャイ盆地 (Vale do Itajaí) のロデオイオ (Rodeio) におけるイタリア移民の入植者、これに隣接するドイツ系植民地等が同州の米作開発に貢献した。この地方では盆地の平坦な部分で米作が盛んに行なわれている。この地方では圃場の整地後、鶏糞の施肥を行ない、9～10月にかけて播種される。収穫は3月に行なわれ、収穫後は次の整地が行なわれる8月までの間、牛が放牧され切株を飼料として利用している。このような集約型のためこの地方の単収は国内でもっとも高い水準にある。

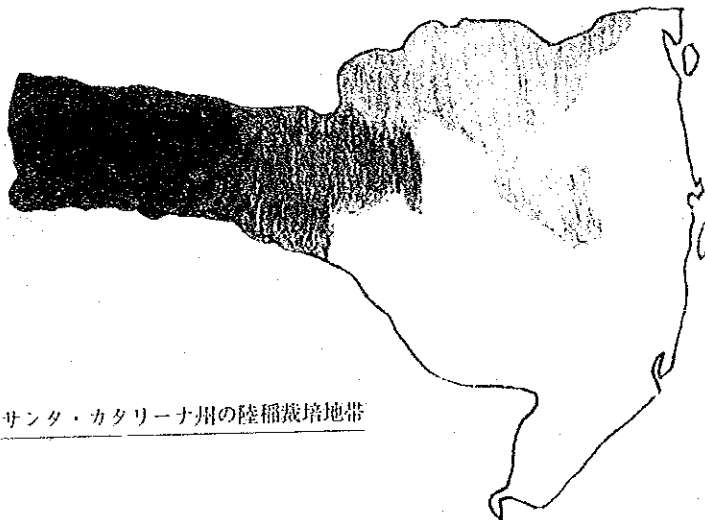
また同一土地での連作は2～5年間で、そのあとは放牧場として土地を休養させる。土地の休養期間は農地の規模によって異なるが一般に5～8年間である。

サンタ・カタリーナ州内の陸稲栽培は州の西部地方で行なわれているが、その生産規模は自家食糧用、又は地元需要に応じる程度である。イタジャイ川上流地帯、クリシウマ (Criciúma)、ウルサンガ (Urucanga)、トレビゾン (Treviso) 等のイタリア人植民地で行なわれている。

リオ・グランデ・ド・スール州は米作にとくにすぐれた条件を備えているため米作の盛んな地帯であり、他の南部二州とは明らかに異なった形態を有している。すなわちパラナ州とは陸稲栽培と水稲栽培の差であり、サンタ・カタリーナ州とは規模の差で比較の対象にならない。

州内の米作地帯は二つの地帯に分かれており、一つは中央低地の東西、他の一つは湖畔地帯である。これらの中で米作の集中地帯はイビクイ及びイピラピタン盆地 (Vale do Ibicuí e Ibirapitã) にあるウルグァイアーナ (Uruguaiana)、イタキ (Itaqui)、アレグレッテ (Alegrete)、ジェネラル・ヴァルガス (General Vargas)、カセキ (Cacequi) 及びサン・ガブリエル (São Gabriel)。

ジャクイ盆地 (Vale do Jacuí) にあるカシヨエイラ・ド・スール (Cachocira do Sul)、リオ・パルド (Rio Pardo)。



サンタ・カタリーナ州の陸稲栽培地帯



リオ・グランデ・ド・スール州の米作地帯

グァイバ盆地 (Vale do Guaíba) にあるグァイバ (Guaíba)、リオ・グランデ (Rio Grande)、サンタ・ビトリア・ド・バルマル (Santa Vitória do Palmar)、アロイオ・グランデ (Arroio Grande)、ジャグァロン (Jaguarão) 等があげられる。

水田栽培の方法としては堰を建設して自然の勾配を利用して配水する方法と、ポンプで運河に灌水する方法の二つが行なわれている。第一の方法は最初に大型の投資を必要とするため土地の所有者が融資を受けて行なうのが普通であり、第二の方法は大きな投資は必要としないので借地農が自己の費用負担で行なっている。ただしポンプ稼働のための燃料費が生産コストに大きなウェイトを占めるのは云うまでもない。

米作の振興を図る公共機関としては州農務局の管下に IRGA (Instituto Rio Grandense de Arroz=リオ・グランデ米作研究院) があり、米作に関連した土壌の肥沃度と化学成分に関する研究、病虫害、雑草駆除に関する研究、品種の改良、優良品種の導入・普及等の業務を行なっている。

最近の生産状況

最近の生産状況として1983年度の生産実績をみると、全国的には511万ヘクタールの面積より770万トンの生産で、前年を大巾に下廻る(−20.3%)減産であった。この生産減少は成育期間中、長期の降雨による被害のほか中西部地方で大豆及びとうもろこしの栽培が優先され米の栽培が縮小されたこと、最大の生産地帯である南部地方での減産、東北地方最大の生産地マラニョン州の減産等が重なったための現象であった。

この様な情勢下にあったため当初予想されていた940万トンの収穫は大巾に減少し、国内需要の不足を補うため輸入を余儀なくした程であった。

この様な国内生産の中で南部地方は全国生産量の38.5%を占め290万トンの生産をあげているが、前年と比較すると7.3%の減少となっている。南部地方の82/83農年米作は前年に得られた高単収が刺戟となって、栽培面積は前年を2.5%上廻る995千ヘクタールに達しているが、天候に恵まれず単収を前年比(−)9.6%減少したのが

表62 パラナ州の米生産推移

年 度	面 積 1,000ha	生 産 量 1,000トン	単 収 kg / ha
1979 / 80	390.5	638.0	1,634
80 / 81	275.0	494.0	1,796
81 / 82	204.0	257.0	1,259
82 / 83	216.4	368.3	1,702

出所：IBGE

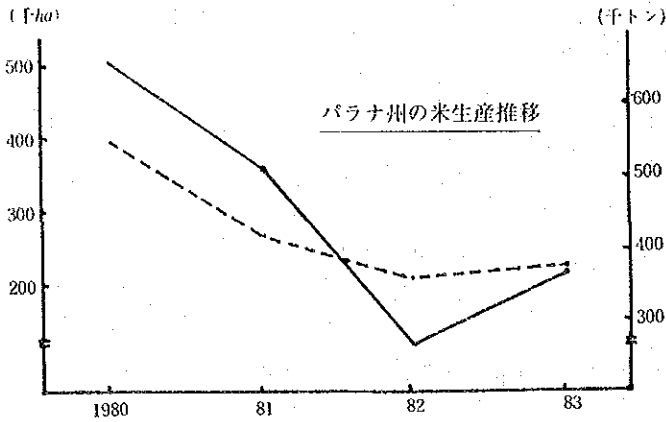
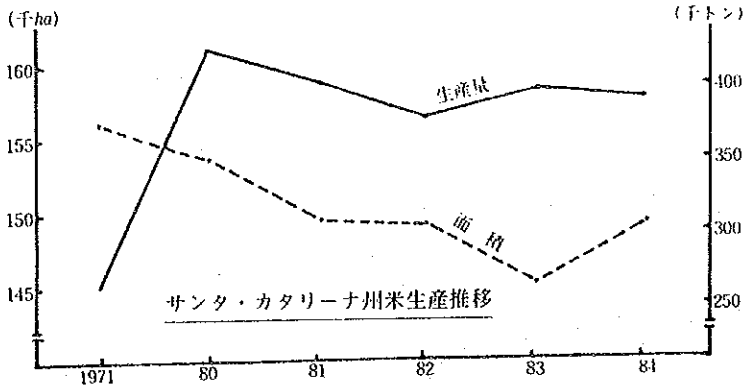


表63 サンタ・カタリーナ州の米生産推移

年 度	面 積 1,000ha	生 産 量 1,000トン	単 収 kg / ha
1978 / 79	156.1	259.8	1,665
79 / 80	153.5	428.9	2,794
80 / 81	149.0	404.1	2,713
81 / 82	148.2	374.0	2,524
82 / 83	145.0	395.3	2,727
83 / 84	148.6	390.0	2,624

出所：IBGE



大巾な生産減の理由となった。

パラナ州についてみると南部三州の中ではもっとも良好な成績を納めており、生産された368.3千トンの量は1981年の水準には劣るが前年に比して43.5%も上廻る増産であった。州内の陸稲栽培地帯は気候が明らかに幸いして増産をみたが、反面水田地帯では河川の洪水によって約6,000ヘクタールが被害を蒙っている。

州内の需要は約50万トンと見積られており、不足分はマツト・グロツソ・ド・スール州及びリオ・グランデ・ド・スール州よりの補給に依存している。

サンタ・カタリーナ州の米作は天候不順によって生産を落しており、83年には前年をやや上廻ったものの80年、81年と続いた40万トン台に達していない。不作の理由としては、

- a) 州内の水田地帯で河川の洪水によってすでに播種済みの圃

表64 リオ・グランデ・ド・スール州の米生産推移

年 度	面積 1,000 ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1978/79	540	1,690	3,017
79/80	569	2,293	3,824
80/81	613	2,455	4,006
81/82	624	2,589	4,149
82/83	636	2,221	3,488

出所：IBGE

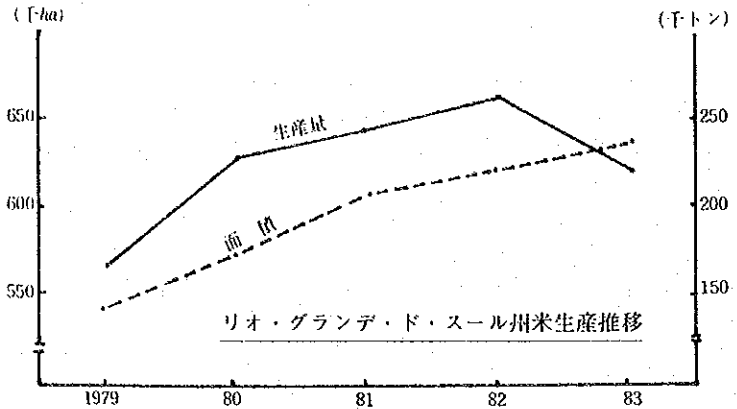
表65 リオ・グランデ・ド・スール州とその他の州の米作比較

農 年	リオ・グランデ・ド・スール	その他の州		全 国 計	リオ・グランデ・ド・スールの比率
		〈 面 積 1,000ha 〉			
1977/78	539	5,085	5,624	9.6	
78/79	540	4,892	5,452	9.9	
79/80	569	5,674	6,243	9.1	
80/81	613	5,454	6,067	10.1	
81/82	624	5,396	6,020	10.4	
82/83	636	4,493	5,129	12.4	
〈 生 産 量 1,000トン 〉					
1977/78	2,009	5,237	7,246	27.7	
78/79	1,690	5,905	7,595	22.3	
79/80	2,293	7,482	9,775	23.5	
80/81	2,455	5,805	8,260	29.7	
81/82	2,589	7,092	9,681	26.7	
82/83	2,221	5,578	7,799	28.5	
〈 単 収 kg/ha 〉					
1977/78	3,729	1,030	1,283	190.6	
78/79	3,017	1,207	1,393	116.6	
79/80	3,824	1,319	1,566	144.2	
80/81	4,006	1,064	1,317	204.2	
81/82	4,149	1,314	1,608	158.0	
82/83	3,488	1,242	1,520	129.4	

出所：DESEMPENHO DO SETOR AGROPECUÁRIO DO R. G.

場が被害を受けたこと
や、西部の岡地栽培地
帯で長期降雨のため適
期の播種を不可能とし
たこと。

b) 開花前期に気温が下り
冷たい風が吹いて授粉
に影響したこと、この
ほか天候不順による単
収への影響がみられた
こと。



この様な状況にはあったが岡地栽培での単収はよく、栽培中心地帯のマフラ地区 (Mafra) では1ヘクタール当り2トンの単収に達したところもあった。陸稲における単収2トンは良好な水準である。

最後にリオ・グランデ・ド・スール州の米作をみると82/83農年では面積で全国の10%、生産量で20%を占め国内供給面で相変らず大きく貢献している。年の始めには州内新記録の270万トンが期待されていたが、生育期間中の長期降雨と収穫期の洪水の被害が影響して生産量を220万トンへ落した。

リオ・グランデ・ド・スール州の米作は前述の通りその95%が水稲栽培であり、機械化の度合が高く、灌漑のための施設が整備されている点が、陸稲を主体とする他の生産州と異なる点で他地域に比して高単収かつ安定した生産を可能としている。

表66 米：リオ・グランデ・ド・スール州生産者受取価格 Cr\$ / 50kg

月 別	価 格		実 質 価 格	
	82 / 83	83 / 84	82 / 83	83 / 84
1982				
7月	2,263.	5,855.	3,160.	3,368.
8月	2,232.	6,242.	2,946.	3,281.
9月	2,211.	7,300.	2,816.	3,381.
10月	2,369.	7,800.	2,879.	3,191.
11月	2,710.	8,000.	3,136.	3,000.
12月	3,531.	9,000.	3,850.	3,154.
1983				
1月	4,043.	—	4,043.	—
2月	3,897.	—	3,658.	—
3月	3,345.	—	3,108.	—
4月	3,621.	—	2,828.	—
5月	3,731.	—	2,731.	—
6月	4,941.	—	3,220.	—
平均	3,071.	7,360.	3,198.	3,229.

出所：DESEMPENHO DO SETOR AGROPECUÁRIO R. S.

南部地方の米作にみられる問題点としては次の事項があげられる。

- イ) 農機具、生産資材価格の上昇、金融コストの増大による生産コストの増加。
- ロ) 流通上の問題としては卸商やスーパーが最終価格の決定に大きな影響力をもっており、生産者団体の組織もこれに対抗し得ていない。
- ハ) 基礎食糧品であるため供給の円滑を図る政府の対策（価格政策、輸入の許可等）が生産者に不利に作用している。
- ニ) 一般消費層の購買力が落ちているため生産物の流通速度は遅く、価格は低迷しているため生産者収益の減退、農業資本の減少を招いている。

83年産米についてもこの様な状況のため、不作が確定的となった時点で始めて価格の反発がみられたが、一般化した購買力の減退から市場の本格的な反発は期待出来ない状況が続いている。

なお、83/84農年の生産については、次の理由による栽培面積の増加がみられた。

- イ) 前年の不作による営農収益の減少をカバーするためにも栽培面積を拡大する必要があった。
- ロ) 融資の基本とされるVBCS（営農費基準額）が前年の基準額に対して139%の調整が行なわれ、これに応じて米作融資枠が拡大されたこと。
- ハ) 政府の最低保証価格も193%とインフレに平行して調整され政府の買上げ価格が上ったこと。
- ニ) 新品種のIRGA-404及びIRGA-410により単収の増加が期待されたこと。

この様な状況の中で州内生産は270万～300万トンが期待されていたところ、天候に恵まれ（気温と降雨量）たため史上最高の4,450kg/haという高単収を得て、すべての予想を上廻る310万トンの収穫をあげている。

この大豊作は州内の生産者に限らず国全体としても好ましい現象であったが、現今の経済情勢下で農業融資に対する補助が削減しているため、金融コストが年々増大しており、これが生産コストを高め、最終的に販売価格を高めるところから一般消費層の購買力がどこまでついて来れるかというのが米作関係者の懸念となっている。

2.3.2 小麦

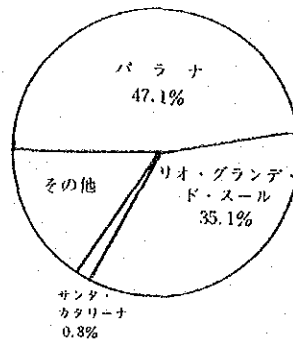
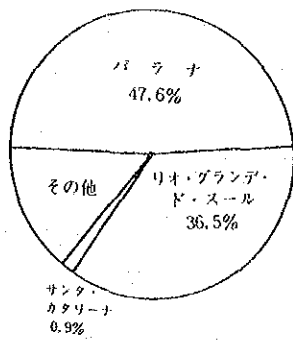
生産地帯

表67 南部地方の小麦生産（1983）

州 別	全国順位	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収kg/ha	全国生産比率
パ ラ ナ	1	898.3	1,066.0	1,187	47.1
リオ・グランデ・ド・スール	2	687.3	794.5	1,156	35.1
サンタ・カタリーナ	3	18.0	17.3	960	0.8
南部地方計		1,603.6	1,877.8	1,171	83.0
その他の地方		281.4	387.5	1,377	17.0
全 国 計		1,885.0	2,265.3	1,201	100.0

出所：IBGE

南部地方の小麦生産は、83年の統計でみると全国栽培面積の85%、生産量の83%を占めており国内でも圧倒的な位置にある。州別ではパラナ州の生産が大きく、リオ・グランデ・ド・スール州がこれに続いているが、この両州はほとんど同規模の栽培を行っており、年によって1、2位を交互に代っており、ここ数年間ではパラナ州が1979年に160万トン、リオ・グランデ・ド・スール州が78年に150万トンの生産をあげたのが最近の最高記録となっている。



60年の終り頃には南部地方が全国生産の99%、リオ・グランデ・ド・スール州が単独で77%の生産を占めていたものであったが、生産地帯が次第に北上し70年代よりはパラナ州の生産が伸びたことや、他の地方とくにセラード地帯における小麦生産が拡大されたことなどから南部地方の比率は次第に減少しており、またリオ・グランデ・ド・スール州の割合もパラナ州の進出によって減退した。

国内生産の過去の推移をみると1954年にはすでに100万ヘクタールの栽培が行なわれ、翌55年には100万トンの収穫をあげており、1971年には227万ヘクタールより200万トンの生産を記録しているので、これと比較した83年度の生産はいちじるしい減退といわねばならない。

国内で最初に小麦の栽培が行なわれてから最近まで、国内最大の生産地帯を保ってきたリオ・グランデ・ド・スール州の小麦地帯をみると、次の三ヶ所が生産集中地帯となっている。

- イ) 東北高原地帯：ヴァカリア (Vacaria)、アントニオ・ブラード (Antonio Prado)、イビライアラス (Ibirairaras) 等の郡を含む。
- ロ) 中部高原地帯：パツ・フンド (Passo Fundo)、カラジンニョ (Carazinho)、コロラド (Colorado)、サンタ・バルバラ・ド・スール (Santa Barbara do Sul)。
- ハ) ミスソーエス地方 (Area de Missões)：パルメイラス・ダス・ミスソーエス (Palmeiras das Missões)、コロネル・ビカコ (Colonel Bicaco)、サンタ・アウグスト (Santa Augusto) 等の郡を含む。

以上の中イ)とロ)の地域は森林地帯、ハ)は草原地帯を利用して小麦作が行なわれているが、この三地域は途切れずに連続している。

イ)の東北高原地帯はイタリア移民の古い入植地で、当初とうもろこしが栽培されていたが連作が続いて土地が疲弊してきたため、新しい土地を開いて輪作が行なわれるようになり、夏作としてのとうもろこしと冬作としての大麦、ライ麦及び小麦の栽培に切り換えられ、中でも小麦の栽培が普及していった。

新しい土地が開かれる場合は、最初に森林地帯の再生林を伐開して山焼し、9～10月にとうもろこしを播種、5月に収穫、5～7月にかけて小麦を播種、12月に収穫する方法がとられている。

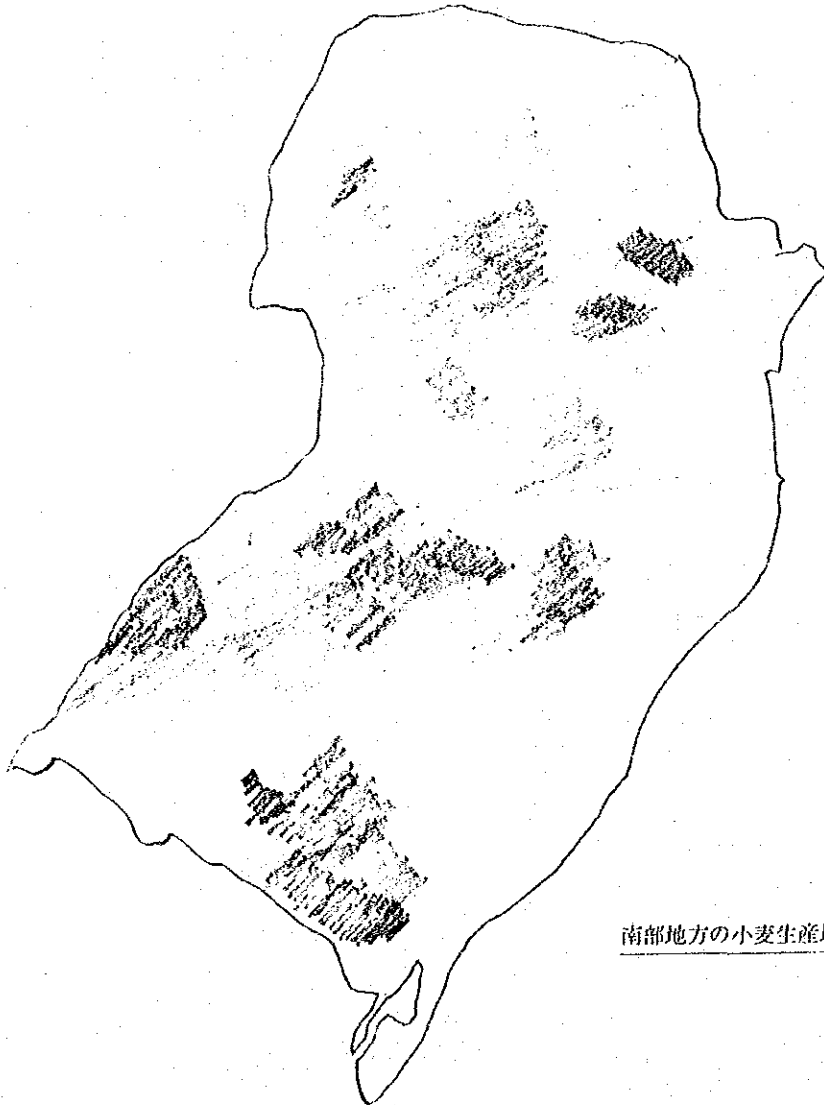
サンタ・カタリーナ州とパラナ州はリオ・グランデ・ド・スール州より移動したイタリア系、ドイツ系の入植者によって栽培が開始されている。サンタ・カタリーナ州では西部地方の第三高原のイラニ (Irani)、アベラルド・ルス (Abelardo Luz) 等が小麦栽培の中心地帯である。またパラナ州ではカンポス・ジェライス (Campos Gerais) やグアラプアーバ (Guarapuava) が小麦地帯である。パラナ州ではとうもろこしのほかフェイジョンの輪作も行なわれてきたが、70年代より急速に普及した大豆栽培との輪作が増加している。

小麦栽培の振興を図る公共機関としては州の試験農場や、大学の研究室等が小麦栽培の問題点を研究しているが、これらを統轄する機関として EMBRAPA (Empresa Brasileira de Pesquisa Agropecuária = ブラジル農牧

研究公社)の下部機構である全国小麦研究センター(Centro Nacional de Pesquisa de Trigo-CNPT)がリオ・グランデ・ド・スール州パソ・フンド(Passo Fundo)市に設置され、次の研究を行なっている。

- イ) リオ・グランデ・ド・スール州内における伝統的栽培地帯及び小麦栽培の可能性を持つ地域に新しい栽培方法を導入することにより、高収益を保証し得る生産システムの開発。
- ロ) 工業加工に有利な条件を持つほか、ブラジルの土壌及び気象条件に適合し、病害に対する抵抗力を持ち、かつ安定した高単収をあげ得る新品種の導入、小麦栽培を商業ベースに乗せうる生産システムの開発。
- ニ) 農業上、工業加工上適性を持つ大麦栽培の開発、高単収及び高収益を保証しうる大農生産システムの開発。

またパラナ州では、パラナ農業研究院(Fundação Instituto Agronomico do Paraná-IAPAR)やEMBRAPAの州別調査研究所ポタ・グロッサ支所(UEPAE/Ponta Grossa)等が小麦の研究にあたり、サンタ・カタリーナ州では、サンタ・カタリーナ農牧研究公社(EMASC)を中心として小麦の研究が行なわれている。



南部地方の小麦生産地帯

これまで栽培上の大きな問題となっていたサビ病に対しては、抵抗品種の開発が60年代の後半に行なわれており、また早生種の開発によって早期の霜害を防ぎ、収穫の集中を避けるなどの効果をあげている。

最近の生産状況

南部三州における最近の生産状況をみると、79/80農年を頂点とした減少傾向がみられる。とくにリオ・グラ

表68 パラナ州の小麦生産推移

年 度	面 積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1979/80	1,440.0	1,350.0	937
80/81	785.0	915.0	1,166
81/82	1,175.0	1,025.0	872
82/83	898.3	1,066.0	1,187

出所：IBGE

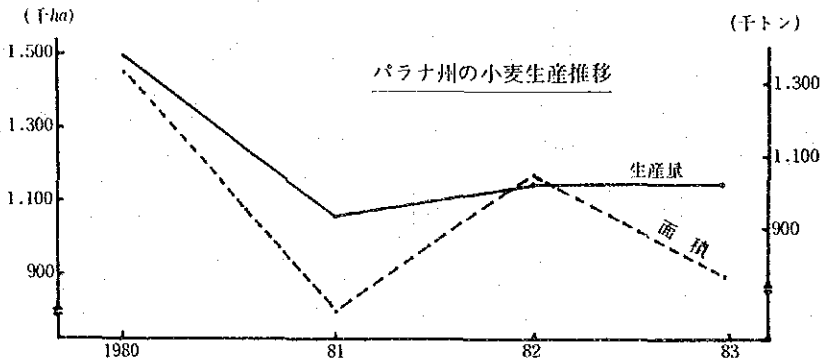
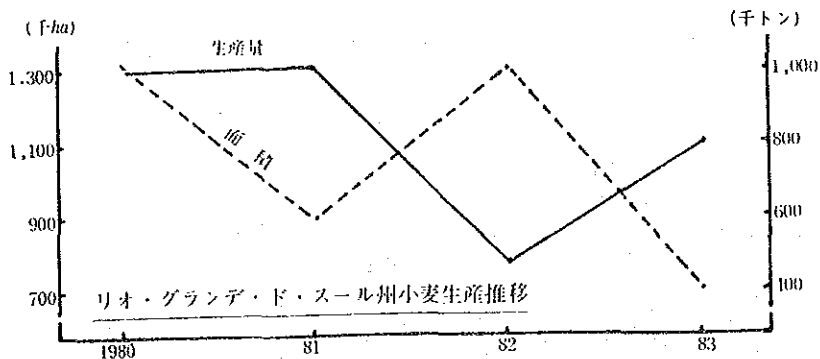


表69 リオ・グランデ・ド・スール州の小麦生産推移

年 度	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単 収 kg/ha
1979/80	1,335.0	1,016.3	761
80/81	901.4	1,070.8	1,187
81/82	1,303.0	481.6	370
82/83	690.6	797.4	1,155



ンデ・ド・スール州は栽培面積を 687 千ヘクタールに落しているが、1968年以降 100 万ヘクタール以下に落ちたのは68年と81年のみで、83年を加えたこの栽培面積は過去16年間で最低の生産規模となっている。

南部地方でこのような小麦生産の減退を招いた理由としては次の事項があげられている。

イ) 前年度の不作による優良種子の不足、リオ・グランデ・ド・スール州の場合、当初は80万ヘクタールの植付けに足る種子があるものと予想されていたが、予想を大きく下廻り70万ヘクタール以下の植付けとなった。

ロ) 農業融資枠の制限と利息の改訂により金融費用が増加したため融資の利用が減少した。

ハ) 政府による小麦の買上げ価格はドルの交換レートの変動に応じて毎月調整されるシステムとなっており、この方法が82年の営農収益に好ましい影響を与えていたが、82/83農年の植付けを決定する時期にこの制度が廃止されるかもしれないという噂があり、生産者がそれを警戒した。

ニ) 82年の4月、5月及び7月に長雨がつづいて圃場の整備が遅れたため適期の播種が遅延した。

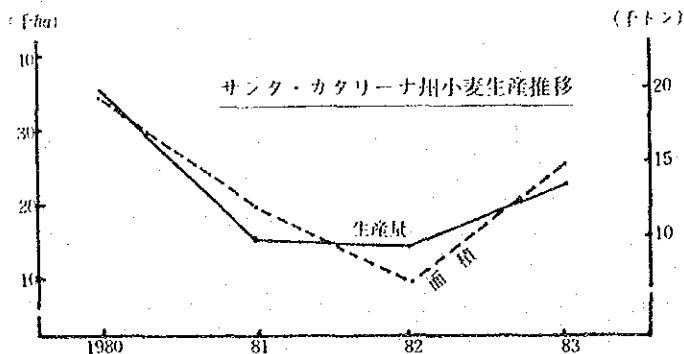
この様な理由によって栽培面積が減少したが、小面積栽培による収益を確保する必要から条件のよい土地が選ばれたことや、成育中の手入れにも例年以上の注意が払われたことなどによって単収は向上し、前年並みの凶作をまぬかれている。

サンタ・カタリーナ州における小麦の栽培は過去には15万ヘクタール（1952/53農年）、70年代が平均して10万ヘクタールの規模で行なわれてきたが、80年代に入ってから急激に減少し、81/82農年にいたっては1万ヘクタールを割る状況に落ちた。

この様な生産の減少は70年代に行なわれた小麦の消費に対する政府の補助制度により、小麦製品の消費価格が低く押えられたため、リスクの多い小麦作を行なうよりも他の安全な作物を作って小麦製品を買った方が有利といった風潮がとくに小農業者の間にあった。他方、製粉工場に対する補助つき小麦の割当てシステムが大型の工場に有利に展開し、小農業者が利用するコロニア風の小型製粉工場の操業を不利なものとしたのも小型生産者が小麦作への興味を失った理由の一つとされている。

表70 サンタ・カタリーナ州の小麦生産状況

年 度	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1979/80	34.7	18.9	543
80/81	19.2	9.0	469
81/82	8.9	8.6	961
82/83	25.8	13.6	529



以上のほか天候不順と政府の不安定な価格政策も生産の減退を招いた大きな理由となっている。

小麦の国内消費については1972年以降、基礎食糧として政府の補助が開始された（生産者よりの買上げ価格や輸入価格以下の価格で製粉工場に配給し、小麦製品価格の消費価格を押えた）ため小麦製品の消費量は、当時の年間360万トンより80年には650万トンへと増加した。

これに対して国内生産量は200万トン前後に止まってきたため毎年400万トン前後の輸入を必要とし、多額の外貨がこの為に費やされてきた。たとえば1982年度の例をとると420万トンの輸入が行なわれ6億3千万ドルが支出されている。

1982年末、国際金融危機の中でブラジルもメキシコ、アルゼンチン等ラ米諸国が共通して直面した対外債務の問題が表面化しIMFに救援を求めることになるが、同国際機関がブラジル経済へのテコ入れを行なう条件の中にインフレの一つの原因とされている財政赤字の減少が主要項目としてとりあげられ、その方法として補助の打ち切りが要求され、小麦及び石油副産物に対して行なわれてきた補助を段階的に削除していくことが決定された。

補助の削減は小麦製品価格をつりあげ、価格の上昇が消費を押えとの見通しから1983年の1月SUNAB（内国食糧供給管理局）は年間の消費量を550万トンと予想し、製粉工場に対する原料小麦の割当てを上半期290万トン、下半期260万トンと定め、その中150万トンが国産品、400万トンを輸入品によって補なうことを決定した（1983年1月28日付SUNAB布告001号）。この際南部三州に対する割当量は845,653トンと定められている。

しかしながら、このような政府の予想にかかわらず、補助の一部打ち切りによって上昇した小麦製品価格以上にその代替品としての農産物価格が高騰したため逆に小麦製品の需要が急増し、上記製粉計画では絶対量が不足する心配が強くなったため、政府は9月までに30万トンの追加割当てを行なわざるを得ない状況に立たされており国内生産が不振な状況下で困難な事態が続いている。

表71 小麦製品と代替品の価格推移上昇率（1983年）

	製 品 別	上昇率 %
代 替 品	とうもろこし粉	600.1
	マンジョカ粉	453.1
	ジャがいも	447.4
	さつまいも	319.0
	フェイジョン（黒）	286.8
	マンジョカ	280.1
	レンチャーヤ	274.8
	米	157.8
小 麦 製 品	小 麦 粉	264.0
	ビスケット	228.0
	麵 類（卵入り）	203.5
	〃 （卵なし）	201.5
	パ ン	182.6

出所：DESEMPENHO DO SETOR AGROPECUARIA R.S.

2.3.3 どうもろこし

南部地方のどうもろこし生産はパラナ州及びリオ・グランデ・ド・スール州が全国の1及び2位、サンタ・カタリーナ州が6位の位置にあり、合せて全国生産量の半分以上を占めている。83年度の統計では面積が520万ヘクタール、生産量は約一千万トンの規模である。ブラジルの穀類(含油脂作物)の生産量は約5千万トンであるのでその5分の1を占めることになり、量的に大豆に次ぐ位置にある。

南部地方におけるどうもろこしの栽培は、その用途が食用から家畜の飼料にいたるまで多様にわたる利用価値を持つため広く普及している。食用としては若どうもろこしなどそのまま煮て食用するものから、イタリー人の食生活に用いられるポレンタ(Polenta)、ポルトガル人が食用するフバ(Fuba-どうもろこしの粉末)、家畜の飼料としては豚、牛、馬及びとり類の飼料として用いられる。

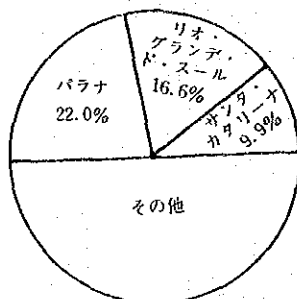
南部地方のどうもろこし栽培システムは地方毎に変化があり、極めて原始的な方法から機械化による近代的な大規模栽培にいたるまで多様である。

どうもろこしの栽培を普及させた他の要因は小麦との輪作用作物として大豆と交互に用いられていることで、夏作としてのどうもろこし、冬作としての小麦の輪作は古くより行なわれてきた農耕形態であった。この場合、

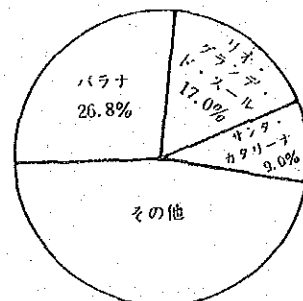
表72 南部地方のどうもろこし生産 (1983)

州 別	全国順位	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収kg/ha	全国生産比率%
パ ラ ナ	1	2,362.0	5,019.0	2,125	26.8
リオ・グランデ・ド・スール	2	1,779.0	3,175.0	1,785	17.0
サンタ・カタリーナ	3	1,062.5	1,687.3	1,588	9.0
南部地方計		5,203.5	9,881.3	1,898	52.8
その他の地方		5,538.5	8,862.7	1,600	47.8
全 国 計		10,742.0	18,744.0	1,745	100.0

出所：IBGE



どうもろこし：南部地方の面積比率



どうもろこし：南部地方の生産比率

地域の条件によってその期間は異なるが2年間連作したあと3～4年間休閑させ、再生林を山焼又は山焼をしないまま伐開整地したあと、天然の地力回復によるとうもろこし栽培が普通に行なわれている方法である。

この方法はパラナ州クリチーバ市周辺のイタリー人移住地カンポ・ラルゴ (Campo Largo)、ロンジンニャ (Rondinha) やミナス・ジェライスよりパラナ州に移動した生産者によるジャグアラアイバ (Jaguaraaiva)、トマジーナ (Tomazina)、ジョアキン・タボラ (Joaquim Tavora) 地方等において行なわれている。

一定期間土地を休閑させて地力を回復したあと、再びとうもろこし栽培を行なう方法はリオ・グランデ・ド・スール州の高原地方でベラノポリス (Verano Polis)、アルフレッド・シャベス (Alfredo Chaves)、グアポレ (Guaporé)、カスカ (Casca)、サラフィーナ・コレイア (Sarafina Correa) 等の地帯で行なわれている。これらの地帯では小麦がとうもろこしの裏作として利用されており、1～2年耕作したあと3～4年休閑させる方法がとられている。

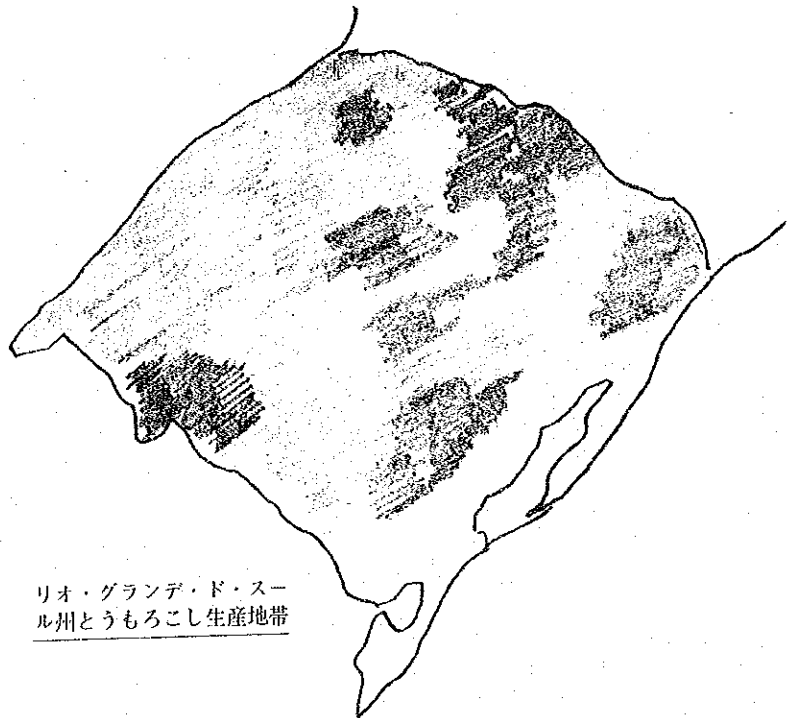
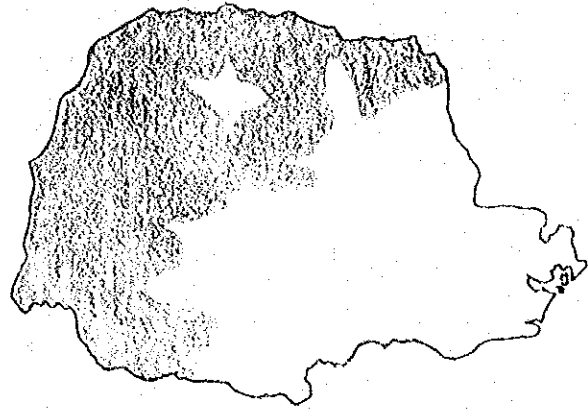
この地帯では主に豚の飼料として用いられ、飼育された豚は近隣の屠殺工場や冷凍工場に送り込まれる。

パラナ州の西部及び西北部では陸稲やフェイジョンと同様に伐開、整地直後のコーヒー園の間作として栽培されている。これら間作が行な

われる間コーヒーの苗はいまだ小さく、アラプカ (Arapuca) と呼ばれる覆いの下にある。間作として栽培されるとうもろこし等の短期作物はコーヒー園主には属さず、その管理を請負っているものの取人となるのが普通である。その期間はコーヒーが成木となるまでの4ケ年間で、この期間が終ると土地は地主に戻される。

リオ・グランデ・ド・スール州のとうもろこし栽培は伝統的に小農業者によっており、50ヘクタール以下の規模の農場が州内全生産量の98%を占めるといわれる。1農家あたりの平均栽培面積は4ヘクタ

パラナ州のとうもろこし生産地帯

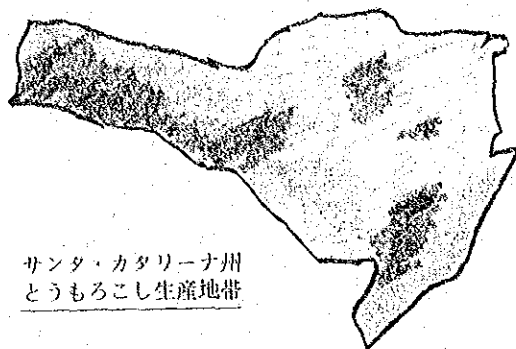


リオ・グランデ・ド・スール州とうもろこし生産地帯

ール程度である。中大農場の場合は大豆との関係で栽培面積は大きく変動する。

サンタ・カタリーナ州におけるとうもろこしの栽培は、州内西部地方のコロニアル・ド・オエステ (Colonial do Oeste) 地方が州内生産の60%を占めて大きく、これにつづく生産地帯としてコロニアル・ド・リオ・ペイシエ (Colonial do Rio Peixe) 21%、プラナルト・デ・カノインニャス (Planalto de Canoï-nhas) 5.3%、カンボス・デ・クリチバーノス (Campos de Curitiba nos) 2.6%、コロニアル・デ・アルト・イタジャイ (Colonial do Alto Itajai) 2.3%の割合である。

なお、サンタ・カタリーナ州の場合も、とうもろこしの生産は州内農業活動の中でもっとも重要な作物の一つに数えられており、州の農務局が発行している年次報告書にもとくに大きく取扱われている。同報告書によると1980年の農牧センサスの結果として、州内のとうもろこし栽培に従事した生産者数は179千人で、中93千人がとうもろこしみの栽培、残りが他の作物との組合せ栽培を行ったと述べている。また上記生産者の中117千人は自家食糧用にとうもろこしの栽培を行っており、残りの62千人が販売を目的とした栽培を行った。更に販売を行った62千人の中、42千人は仲買商人に生産物を売り渡しており、残りの20千人が組合を通じて直接工場に販売している。優良種子の利用については生産者の中75%が用いており、残りは自家生産の普通種を用いている。また肥料の利用については栽培された面積の42%が化学肥料、6.5%が有機肥料、5.6%がその両方を使用したこととなっている。



サンタ・カタリーナ州
とうもろこし生産地帯

最近の生産流通状況

全国生産の26.8% (1983年) を占めて1位にあるパラナ州のとうもろこし生産は、81/82農年までは順調にすすめられたが、82/83農年には天候に恵まれず単収を落したため、栽培面積の増加にかかわらず生産量は500万トン台に落ちた。

単収は80/81年に1ヘクタール当り2,600kgに達し、サンタ・カタリーナ州が80/81農年に達した2,750kgに次ぐ高い水準に達したあと、82/83年には2,125kgに落ちている。

83年のリオ・グランデ・ド・スール州のとうもろこし栽培は前年並みで、ここ数年間横這いの生産状況にあるが、供給面では次の様な問題があり他州や外国品の供給を受ける状態にあった。

- イ) 収穫中に降雨が続いたため収穫を遅らせた他、パラナ州やマツト・グロツソ・ド・スール州よりの輸送をも困難とし供給に支障を来した。
- ロ) 収穫前に行なわれた外国との売買契約にもとづき輸出が行なわれた (年間を通じて70万トン以上) が、この商品は国内供給が不足したため本来国内に保留されるべき性質のものであった。この能力外の輸出が国内供給面に大きな影響を与えた。
- ハ) 政府の手持ちストックの放出が遅れたこと、またCFP (生産融資公社) が行った競売もその量は市場が必要とする量よりもはるかに少ないものであった。

年間を通じて供給が正常化したのは年の終りで、この頃国内供給の不足を補うため補助つきの輸入が行なわれたとの噂があり、投機的に出し控えていたストックが放出されたためである。

結局、パラナ州及びマツト・グロツソ・ド・スール州より30万トン、外国より75万トンの輸入を行って需要を

満たしている。

サンタ・カタリーナ州の生産は最近数年間比較的安定してきたが、82/83農年には降雨多過によって当初の予想 286万トンを 118万トンも下廻る 168万トンの生産に終わっている。この様に低い生産記録は長期乾燥によ

表73 パラナ州：とうもろこし生産

年 度	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1979/80	2,156.6	5,467.0	2,535
80/81	2,162.0	5,362.1	2,600
81/82	2,277.0	5,430.0	2,385
82/83	2,362.0	5,019.0	2,125

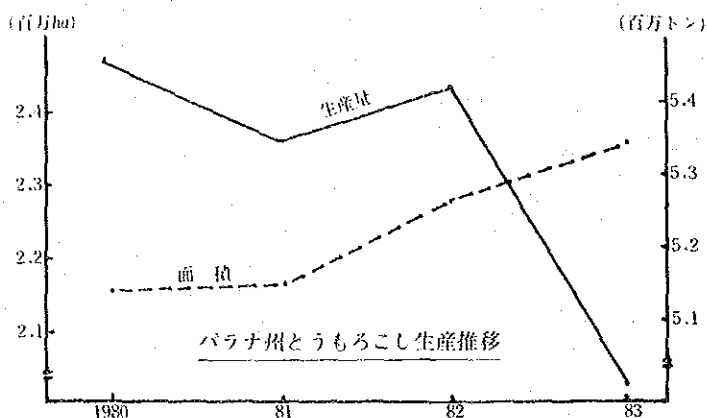


表74 リオ・グランデ・ド・スール州のとうもろこし生産

年 度	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1978/79	1,787.5	1,853.6	1,037
79/80	1,861.3	3,162.0	1,699
80/81	1,818.7	3,808.8	2,094
81/82	1,851.7	3,147.2	1,700
82/83	1,779.0	3,174.8	1,785

出所：IBGE

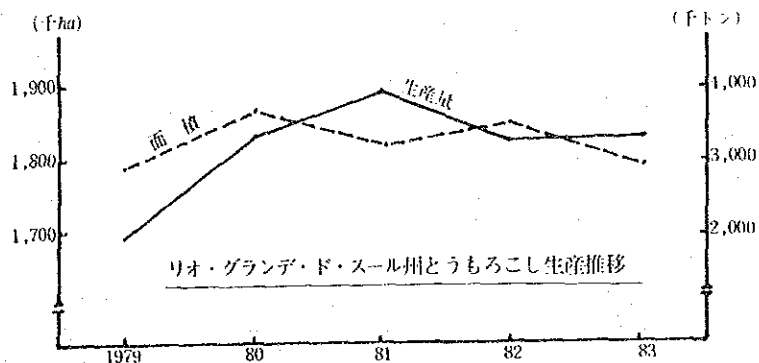


表75 どうもろこし需給 (リオ・グランデ・ド・スール)

供給量	重量 トン
1981/82よりの繰越在庫	30,000
1982/83 生産量	3,174,800
他州よりの輸入量	300,000
外国よりの輸入量	75,000
供給量計	3,586,300
需要量	
種子用保留	30,000
養豚業界の消費量	1,500,000
養鶏	850,000
畜役用家畜の消費量	400,000
乳牛及び肉牛用消費量	400,000
工業加工原料消費量	200,000
損失	206,300
需要計	3,586,300

出所：DESEMPENHO DO SETOR AGROPECUÁRIO

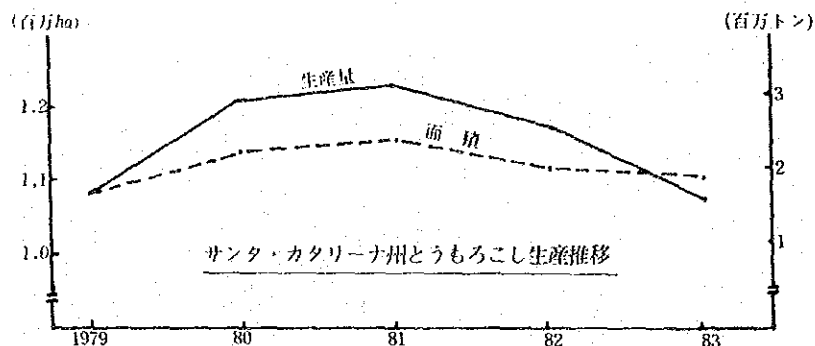
て大きな被害を受けた77/78及び78/79農年に次ぐものであった。

州内の需給面については、州内生産量のほかパラナ州の産品がCFP (生産融資公社) を通じて州内に持ち込まれ競売に付されるため、82/83農年産のどうもろこし収穫が開始されるまではとくに問題は生じていなかった。

表76 サンタ・カタリーナ州のどうもろこし生産

年 度	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1978/79	1,078.0	1,709.0	1,585
79/80	1,128.4	3,016.2	2,673
80/81	1,150.0	3,162.5	2,750
81/82	1,109.0	2,628.7	2,371
82/83	1,096.0	1,687.3	1,540

出所：IBGE



83年も収穫物が出廻った5月頃までは特に問題はなかったが、6月に入ると全体的な不作による供給量の不足が感じ出され、更に連続した降雨によって生産物の輸送に支障を来たことから供給面に種々の障害が表われてきた。州内で生産されるところは約60%が農家の自家消費用に保留されるので、販売に廻される量は約80万トンであるが、83年には大巾な減産から販売に廻された量はいじりしく減少した。このため通常パラナ州より40~45万トンの供給を受けているものが同年には80万トンが必要とした。

以上の通り南部3州が生産量を落し供給量が減少したため、とうもろこしの価格は上昇し養豚、養鶏部門の生産コストを高めた。とうもろこしの価格は1979年と1980年がインフレ率に平行した価格推移をみせ、1981年より82年にかけて下落、82年には実質価格で35%という大巾な下落であった。価格の反転は1983年5月以降で年末にかけて高騰するが、この時点では生産者のストックはなく価格上昇の恩恵は受けていない。

表77 南部地方のとうもろこし価格推移 (実質価格)

月 別	1980	1981	1982	1983
1	104.59	122.18	70.05	71.26
2	99.97	111.05	66.96	69.80
3	90.93	87.76	70.00	67.47
4	91.95	81.20	68.98	65.86
5	88.84	80.07	66.25	75.86
6	91.02	78.82	66.41	87.55
7	90.47	74.99	59.87	91.12
8	101.56	69.79	56.24	99.44
9	106.70	66.31	55.04	115.86
10	114.82	65.08	59.45	152.90
11	116.30	78.81	67.38	142.30
12	113.85	74.30	70.98	...

出所：DESEMPENHO DO SETOR AGROPECUARIO R.G.

2.3.4 フェイジョン

ブラジル人の基礎食糧としてのフェイジョンも南部地方にとっては極めて重要な作物であり、全国生産の約38% (83年度) を占めている。南部3州の中ではパラナ、サンタ・カタリーナ、リオ・グランデ・ド・スール州の順に南下する程生産規模が小さくなるが、全国的にはパラナ州が21.9%の生産比率をもって1位、サンタ・カタリーナが4位、リオ・グランデ・ド・スールでも6位に位置する生産量である。

フェイジョンはこれを栽培する農家自身が必須の食物として消費するのでその生産は広く分布しており、その栽培を制約する自然条件下にある地域は少ない。

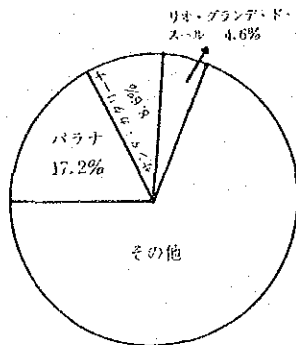
最大の生産地帯であるパラナ州では州内の全般にわたって栽培されているが、これらの栽培地帯は南東部、西部及び北部の三地帯に分けられ、それぞれの地域に密集した栽培地帯を有している。この中、南東部と西部はとうもろこし、大豆及び小麦の生産地帯でその輪作が行なわれており、フェイジョンも夏作の1つとして冬作の小麦と輪作される。また北部地方では、コーヒー園の間作作物として米やとうもろこしと同様に栽培されている。この中にミナス・ジェライス州よりの移住者によるゾーナ・ミネイラ (Zona Mineira ミナス人地域の意) と呼ばれる地域では、ミナス・ジェライス州のフェイジョンを中心とする食習慣が持ち込まれており、これが南部地方へのフェイジョンの普及に影響したといわれている。

表78

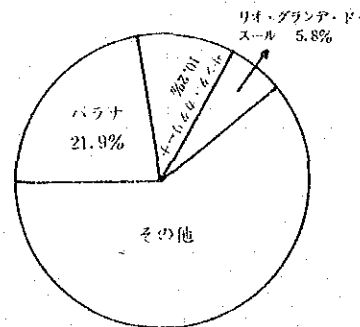
南部地方のフェイジョン生産状況 (1983)

州 別	全国順位	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収kg/ha	全国生産比率%
パラナ	1	699.7	347.0	496	21.9
サンタ・カタリーナ	4	349.1	162.4	465	10.2
リオ・グランデ・ド・スール	6	187.4	92.4	493	5.8
南部地方計		1,236.2	601.8	487	37.9
その他の地方		2,832.8	985.2	348	62.1
全国計		4,069.0	1,587.0	390	100.0

出所：IBGE



南部地方のフェイジョン栽培面積



南部地方のフェイジョン生産量

サンタ・カタリーナ州ではとうもろこしの場合と同様に西部地方を中心としたフェイジョンの栽培が行なわれており、雨期収穫のフェイジョン栽培はコロニアル・ド・オエステ・カタリネンセ (Colonial de Oeste Catarinense) が州内生産の48.0% (83年)、プラナルト・デ・カノインヤス (Planalto de Canoinhas) 16.7%、カンボス・デ・クリチパーノス (Campos de Curitiba) 13.3%、コロニアル・ド・リオ・ペイシェ (Colonial do Rio Peixe) 7.7%、コロニアル・ド・アルト・イタジャイ (Colonial do Alto Itajai) 6.6%、カンボス・デ・ラージェス (Campos de Lages) 2.6%の割で分布する。

またサフリニャ (Safrinha) と呼ばれる第二期栽培 (全体の約35%がこれに属す) は、雨期の場合と同様にコロニアル・ド・オエステ・カタリネンセ地域が66%の比率をもつてもっとも大きく、コロニアル・ド・アルト・イタジャイ 12.13%、及びカルボニフェラ (Carbonifera) と呼ばれる石炭地帯が5.54%で続いている。

サンタ・カタリーナ州におけるフェイジョンの栽培は全国的にはパラナ、サンパウロ及びミナス・ジェライス各州に続く第4の生産州であり、州内では1983年の統計によると栽培面積ではとうもろこし、生産量ではとうもろこし、マンジョカ、砂糖キビ、大豆及び米に次ぐ位置を占めている。また農業生産高では年によって異なるが1981年は2位、82年は3位、3年はとうもろこし、煙草葉、大豆及び米に次ぐ5位の位置にあった。

生産は小農業者による家族労働を主体とする栽培形態を特徴としており、1980年の農牧センサスによると約133千人の農業者がこれに従事しており、平均単位面積は1.35ヘクタールとなっている。しかし、その後の面積拡大によって現在では2ヘクタール近いのではないかと推定されている。フェイジョンの栽培面積は大豆の栽培と深い関連があり、大豆の価格が悪い場合はフェイジョンの栽培面積が増加し、逆に大豆の価格がよいとフェイジ

ンが圧迫される形を繰返してきた。最近は大豆価格が好転しているのでフェイジョンの栽培面積は再び減少していくことも予想されている。

リオ・グランデ・ド・スール州におけるフェイジョンの栽培は前二州に比して小規模であり、州内の地域需要に応ずる程度の生産量である。生産地帯はコロニアル・デ・イライ (Colonial de Irai) 及びその南部の東西に走る低地帯である。

最近の生産状況

パラナ州におけるフェイジョンの生産推移をみると80年代に入ってより増産が続き、81/82年では記録的な667千トンの生産を行ったのを頂点として、次年の82/83年には347千トンとほぼ半分に減少した。この間の単収をみると81/82年に758kg/haの高単収を得たあと82/83年には496kgへと落ちていく。

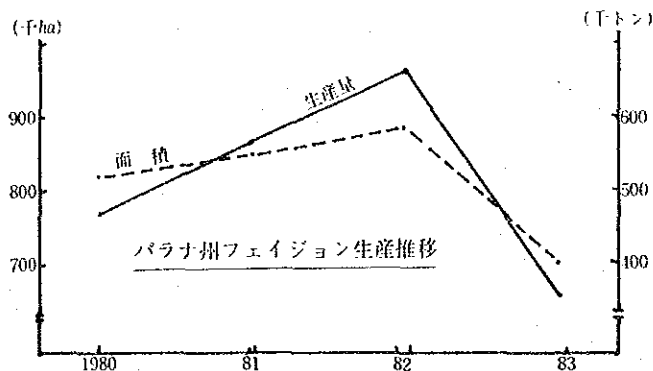
このように81/82年に得られた記録的な生産はフェイジョンの特別生産奨励策によったもので、国民の基礎食糧でありながら生産の不振から過去数回にわたって輸入を余儀なくして貿易収支に影響を与え、国内供給の不足から価格が高騰してインフレの昂進に拍車をかけるなど好ましくない事態をあらためるため、70年代の中期よりすすめられてきた政策で、これが効果を現わした結果とみられている。具体的な政策としては生産者が満足する最低価格の設定、生産融資枠の確保、小農業者が利用し得る農業融資利息率の設定、天災による損害を全面的に補償する農業保険制度、販売融資 (EGF~最低保証価格制度による生産物担保融資) に対する十分な資金準備等があたえられたためである。

しかし82年より83年に入ると82年末に表面化した国の経済危機からIMFに救援を求め、その条件として金融引締めと公共赤字の解消を主要経済目標として義務づけられるが、金融引締めの政策では農業融資枠が制限され、また公共赤字の解消を目指す政策では小麦などへの補助の打ち切りとともに農業融資利息に対する補助の撤廃などがすすめられ、農業界にとって好ましくない政策が打出された。このため農業生産面では自己資金の利用率が高

表79 パラナ州のフェイジョン生産推移

年 度	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1979/80	815.1	462.2	567
80/81	853.0	571.0	669
81/82	880.0	667.0	758
82/83	699.6	347.0	496

出所：IBGE



められ、これが無い場合は一般商業銀行より不足資金を調達せねばならない状況に追い込まれ、生産コストに占める金融費用の上昇を余儀なくしていくが、栽培上の大きなリスクを持つフェイジョンの栽培は負担が大きす

表80 サンタ・カタリーナ州フェイジョン生産推移

年 度	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1978/79	227.8	189.4	837
79/80	276.0	120.0	435
80/81	291.1	246.2	846
81/82	373.0	321.0	860
82/83	422.1	162.4	385

出所：IBGE

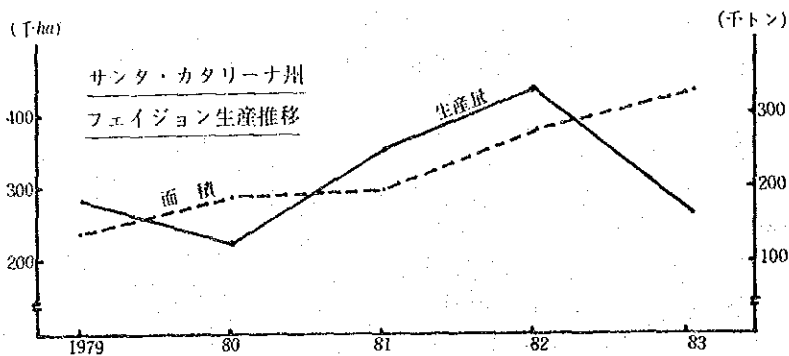
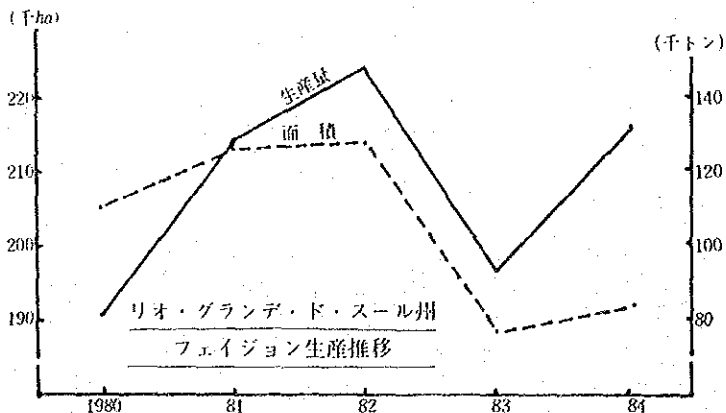


表81 リオ・グランデ・ド・スール州のフェイジョン生産推移

年 度	面積 1,000ha	生産量 1,000トン	単収 kg/ha
1979/80	205.5	80.4	391
80/81	212.6	127.6	600
81/82	213.4	146.7	688
82/83	187.4	92.4	493
83/84	192.7	133.1	677

出所：IBGE



いきおい栽培面積の縮少となって現われたものである。

この様な情勢の中ですすめられた82/83農年のフェイジョン作では更に天候不順が加って単収を落しており、全国的にも再び70年代に繰返えした供給不足の状態に戻っている。

サンタ・カタリーナ州の場合もパラナ州の場合と同様に82/83年には生産を落しているが、同州の場合は政策的な問題以上に天候不順による影響が大きく、このために病害の蔓延を併発して生産に大きな打撃を受け前年に比して半分の生産量に下落した。

天候不順は植付け直前の82年9月に水分の不足として現われ、このために播種が遅れたのを始めに、生産中心地帯の西部では寒風と降雹、中西部のベイシエ川盆地や高原地方では10月に降霜があり、10~11月と収穫期には降雨が続いて炭疽病 (Antracnose) やサビ病 (Ferrugem) などの病害が蔓延した。

州内の供給面では、この様な生産の減退にかかわらず各組合のストックや商人の手持ち在庫、CFP (生産融資会社) の在庫放出等によって州内需要に応じた。

最後にリオ・グランデ・ド・スール州の生産も又82/83年には大巾に下降し第1収穫、第2収穫がそれぞれ前年比30.7%及び58.8%の減少をみている。

しかし州内供給面では前年より繰越した在庫があったこと、価格の上昇による消費の減少により問題を生ずることなく終わった。州内の消費量は約11万トンと見積られており、これに対し生産量が92千トン、前年よりの繰越が27千トン、この合計より損失 (2.7千トン) 種子用 (7.5千トン) を差引いた供給量は109千トンでほぼ消費量に見合う量であった。

参考までに83年中の生産者受取価格は次表の通りであった。

表82 南部地方のフェイジョン生産者受取価格 (リオ・グランデ・ド・スール)

月 別	価 格 CrS / 60kg		実質価格 (83年8月を基準)	
	1982	1983	1982	1983
1982				
12月	3,407.	4,649.	14,202.	9,703.
1983				
1月	3,402.	5,987.	13,343.	11,459.
2月	3,337.	6,253.	12,380.	11,236.
3月	3,433.	6,733.	11,752.	11,055.
4月	3,369.	7,367.	10,946.	11,012.
5月	3,560.	7,790.	10,900.	10,913.
6月	4,010.	8,543.	11,369.	10,658.
7月	4,183.	10,384.	11,184.	11,434.
8月	4,307.	14,437.	10,882.	14,437.
9月	4,262.	14,343.	10,384.	12,716.
10月	4,013.	15,536.	9,335.	12,161.
11月	3,898.	15,550.	8,635.	11,228.
平 均	3,478.	6,712.	12,563.	11,066.

出所: DESEMPENHO DE SETOR AGROPECUÁRIO R. G.